

「ムクを借りてどうしようといふんだ」

「はい、ムクをお借り申しまして、マドロスの奴を追ひかけて見てえと思つて、殿様に先程お願え申して見たでございます、マドロスの野郎、思へば思ふほど胸の悪くなる畜生だ、殿様の御恩も忘れやがつて、わし共を踏みつけにしやがつて、どうしても腹が癒えねえから、一つ、ムクが歸つたらば、ムクをお借り申して、あいつのあとを追ひかけて、とつ捕まへて、思ふさま、一つ懲しめてやらねえことにや……」

船頭は、餘憤堪へ難き風情で、駒井へ直訴に來にものらしい。

處が駒井は、いゝとも悪いとも云ひません。

つまり、うむ、では、直に出かけてつかまへて來いとも云はないし、あんな奴は問題にするなども云はないのは、駒井としてそこに若干の苦衷が存するものらしいことを田山白雲も最初から感じてゐました。彼のウスノロのマドロス奴、言語道斷の奴ではあるが、船長としての駒井甚三郎がその言語道斷の奴を一刀兩斷にも爲し難い——といふのは、駒井甚三郎はその秀拔な頭腦を以て、最近の學術と經驗と應用とを以て、一艘の船を獨創した

ことは事實であるが、それを首尾よく運送して、初航海を無事に此處まで安着せしめた成功の大半は、此の放縱無頼のウスノロのマドロスの力に負ふ處が無いとは云へない状態なのだ、學問は無く、品性は下劣であるにしても、その世界中を渡り歩いて、海を庭とし、船を家としてゐた生活から生れた體驗は、駒井が書物や學理や少々の實驗からではどうしても得られないものを、此奴が豊富に持つてゐました、それは今度の初航海に充分に證明されたところであり、本人が此方にとつてそれほど貴重な經驗を、マドロスとしてあたり前の働きとして、鼻にかける處までは行つてなかつたらしいが、駒井にとつて、天の助けとも渡りに船頭とも、何とも有り難い唯一無二の羅針となつたものです、この男がゐるならうものなら、船を難破せしめるほどのことはないにしても、こゝまでの無事廻航にまづ覺束ない、或は途中、不意に何處かへ寄港して、腹帯を締め直す必要はたしかに存してゐたと見なければならぬ、同時に不意の寄港がもたらす處の不便や誤解や、さまざまの障碍を想像すると、マドロスにあつては尋常茶飯の勞務が、駒井には無くてならぬ依頼、船中の誰よりも、寧ろ船の次にはその男が必要と認めないではゐられなかつたと思はれる。

自然——今後の航海、その針路としては未だ確定はしてゐないが、それは當然房州から仙臺まで廻航して来た以上の難航が豫想される、その際に於てのあのマドロスの必要は全くかけ換へのない絶對的のものである、伊豆系統の熟練な船頭はゐるけれども、それは仕事の性質と経験が違ふ、さう思つて見ると、許し難き放蕩も許し、度し難き不埒も見て見ぬ振をして居らねばならなかつた駒井甚三郎の苦衷といふものが、白雲にはよくわかつて來ると共、自分といふものゝ不在中を残念がらずには居られない。

なかに、あのウスノロ如きは、自分がゐさへすれば頭から威壓して、文句は云はせもしないのだが、船長としての責任ある地位で、かけ換へのない無頼の労働者を、だましく使用する苦衷は自分のやうにさう一本調子に行くものでないことを白雲と雖も駒井の爲に推察するだけの思ひやりは持つて居る、そこで、白雲は身を乗り出して云ひました。

「うむ、その事もあつたつけない、許し難い奴だ、あのマドロス奴——もう一べん締めてやらなければ、よし／＼、その方も拙者が引受けよう、七兵衛おやぢの方と一しよに、ウスノロの奴も近いうに見つけ出して、有無を云はさず、これへ引ずつて來て見ませう、七兵

衛おやぢは思慮があるだけに雲をつかむやうだが、ウスノロの奴はなかに直ぐととつ捕まへますよ、第一あの赤髯と碧い眼で日本娘さんと道行なんてドコまでそんなフザけた洒落が利くものか、いくら奥州の果にした處で、あれで暗ての道中が出来たらお慰み、何處かに隠れ込んでゐるうちは無事だが、ウスノロとあの娘さんとはや、がて頭も尻尾も丸出しにするのは眼の前だ、或は早く追手がかゝつて呉れるやうにと待つてゐるかも知れない、これは船頭君の腹立ちまじれではない、拙者が行きませう、拙者が行つてズル／＼襟首を持つて引ずつて來ます、ウスノロの奴めまた泣きたらう、大きな圖體をしてザマはない」

「田山先生にあつちやかなひません」

昂奮しきつた船頭も、白雲畫伯がウスノロを捕へて引ずつて來る時の光景を想像して多少おかしくなつたらしい。

そこで白雲は駒井を促して云ひました。

「駒井氏——では、さういふ事に願ひませう、拙者ならば、旅には慣れてゐるし、手形も持つてゐる——こゝまで來た以上は南部領へも足を踏み入れて見たい希望もある、この船

の休養と修理の間を、拙者は右の通り一石……三島の獲物の爲に、また旅に出ませう」
 船の休養と修理の爲にも、少くとも約一二月はこゝに碇泊してゐる必要を聞き知つてゐる白雲は、こゝで其の期間を利用し、行方不明の二人の船族と、それからなほ進んでは風景の見學と、つまり所謂一石三島の妙案を獨斷的に提出すると、駒井甚三郎も、
 「では……さういふ事にお願ひしますかな」

白雲一人に使命を託することが粗放のやうで、實は最も安全にして確實な方法だと思案したのでせう、お松はムク犬と共に、是非白雲先生のお伴にと申出たけれど、それは却つて辛抱する方がお互ひの爲だといふことを説得されて、それが呑み込めない子でもありませんでした。

斯くて白雲は例のいでたちを以て、その翌朝、ひとりこの船を立つて一石三島の目的の爲に出かける事に評議がまとまりました。

その出立の前に當つて、賢明なるお松は斯ういふことを思案しました、そんなこんなの出來事の爲に、自分の心に大きな悩みを持たせられてゐるけれども、それよりもこんな事

の爲に、船長の意氣を沈ませてはならないこと、船中の人々の氣を腐らせてもいけないといふこと、だから、自分がまづ誰れよりもつとめて快活にして、船長をはじめ皆の氣を引き立てる事につとめなければならぬ、それには、一つこの人數を會して、陽氣な慰安會を開いて一つは田山先生の門出を祝し、一つは船中の意氣を盛んにしようとの案を立て、それを駒井船長と白雲畫伯とに申出で、欣然同意を得ました。

この慰安會は船中の人だけに限らないで、折角の事に、この港に碇泊してゐるすべての船とこの港附近の有ゆる漁村に觸れを廻して參會觀覽を許すといふことを提議して、お松が委員長で、準備を進めました。

立役者には清澄の茂太郎——といふものもあれば、お角さん仕込みの江戸前のムクの細ぬけ輪ぬけの藝當といふのも、こゝへ持出して悪いといふことはない、その他、乳母、船頭さん、金推さんまでが、どんな隱藝を持つてゐるようとも圖られぬ、お松さん自身は委員長としての外に太夫元、狂言作者、舞臺監督等のすべてを背負つて立たなければならぬが、事と次第によつては、舞臺上の一役をさへ買つて出なければならぬ都合になる

かも知れぬ。

斯くてその翌日。

果して當日の慰安會は、清澄の茂太郎の三番叟を以てはじまりました。

田山白雲も覺束ない手つきで、手品を一席やりました。

登の乳母やが三味線をひき、房州の船頭衆が唄ひつ踊りつしました。

見物は船の甲板上に一杯に溢れたけれども、他の船からも岸の上からも見られるやうにして置きましたから、廣くもあらぬ、この港の津々浦々は總出の見物です。

それから、飛び入りをうながすと、最初は、はにかんでゐたのが、一人やり二人やるうちに、勇氣が出て、處の名物の總ざらひがはじまつたやうなものです。

そこで、當日は臨時の大祭が行はれたやうなもので、船の人も樂しむと共に、土地の人をも樂しませることが出来、陽々たる和氣がたなびいて、お松の考案は百分の効果をあげたといふ次第です。

二十四

斯くてその翌日、田山白雲は一石三鳥の目的をもつて、暫しの旅に立ち出づる。

しばしの旅のつもりではあるが、旅といふ氣になつて見ると、またしても漂流性の血が脈を立て、一石三鳥の重任ある身でありながら、白雲悠々の旅心が動くに耐へないのです。

つまり、船に来てから人に逢つて見ると里心がついて、この當座は、人間界の代物でしただけでも、こゝでまたも放たれた氣分になりました、放たれたといつても、誰れも白雲を囚へんとしたものはないのですけれども、人事のことがあれこれと左右に群がると、どうしても旅心そのものは抑壓されてしまひます、しばしでも人事を離れて見ると旅心といふものは、生き／＼と盛返して来るものなのです。

だから、旅心といへば體がよいけれども蠻性に歸るのです、近代人の社會性を放れて原始的の漂流性に歸るのです、歴史は人類の野性、獸性、變性、無宿性、無頼性を訓練する

爲に先づ人間に戀愛を教へました、戀愛が次に羞耻を教へました、羞耻が人間に衣服を教へ、衣服が人間に住居を教へ、住居が人間に近隣を教へ、團體性を教へ、國家性を教へ、社會性を教ゆる處の最初のものとなります。

原始の人類は遊牧の民でありました、彼等は食のある處が住のある處でしたから、漂流が即ちその生存のルールでありました、ですから、今日に至つても、人間をひとりで置けば當然、この原始性への逆轉を見ないでは居られません、ひとりで置けば人は漂流に歸ります、さうして道徳的には一種の放蕩の人とならざるを得ないのです、酒色に溺れるだけが放蕩ではない、人間社會の約束を無視して、旅心を恣にせしむるは即ちこれ一つの大なる放蕩であります、さればこそ、芭蕉翁の如きも、西行法師の如きも、古今無類の放蕩漢と云へば云はれる、多くの人が、この種の放蕩漢になれないのは、前に云ふ如く、まづ戀愛を教へられたその柳なので——戀愛あるが故に妻があり、妻あるが故に子があり、子があつて來る、さうして、人間は完全に原始人の逆轉を防止されて善良なる國民に馴致される

と共に、自己本來の旅心は極度の暴壓を蒙つてゐる、古來、人間に加へられた重大なる抑壓と、苛辣なる課税の筆頭は戀愛でありました。

石の巻へ来て、ともかく、こゝで一泊の上、一石三島の使命を再検討しなければならぬ、い自省心によつて、白雲の漂浪性が取止められたやうなもので、もし此の事なくば、白雲の今度の旅にも全く糸目といふものがなく、このまゝ三ヶ月の圓くなり、明月の三ヶ月になるまで南部領あたりを巡つてゐたかも知れないのです。

石の巻の港の、田代屋とある宿へ泊りを求めて、さて、第一次に爲すべきことは、よき道案内の地圖を求めることでした、相當の繪圖は、船で駒井の文庫から寫し取つて來たものゝ、内地の委しいのになると、その土地で求めるか、或は實地について、聽取圖、見とり圖のやうなものを作つて置いてかゝらねばならぬ。

「繪圖はあるかな、奥州一國の全圖でもよし、この附近の郡村の地圖でもよろしい、何でもいゝから一つ貸して呉れないか」

斯ういつて宿へ頼むと、

「うちには、いゝ繪圖はござりませぬ——この間、お客様が置いてござつた繪圖が一枚ありました筈、あれを御覽に入れませうか」

「何でもいゝから見せて呉れ」

「持つてまゐりませう」

女の子が繪圖を持つて來た、それで見ると仙臺領の南の部分、松島から石の巻、牡鹿半島の切繪圖——あまり上手でない手つきで棒を引いたり書き入れをしたりしてある。

「結構々々、少しの間貸して呉んな」

白雲は、その繪圖を篤と見入りました、さうして、自分のこしらへて來た圖面と参照して多少の書き入れをする。

そのうちに、繪圖面の終りの方を見ると、同じ手筆で、

清澄村 茂太郎所持

と書いてある。

「おやく、こゝにも茂太郎がゐたぜ、同じく清澄村の住人」

田山白雲は、これを先頃の笠島の道祖神の繪馬と思ひ合せないわけには行きません。

思ひ合せて見れば見るほど、あれと同じ人間の手になるのです。

そこで、また女中を呼んで、一體、この繪圖を置いて行つたお客様てのは、どんなお客様であつたえ——え、え、それは、これ／＼斯様な人でござりまして、毎日々々のやうに出てお歩きになりました、何でもお江戸から船のお着きになるのを待ち兼ねての御容子でございました。あ、さうか、さうして年頃は、うむ、成程……。

それこそ、七兵衛をやぢに紛れもないと、白雲が直ちに覺りました、さうして見ると、あの道祖神の繪馬もます／＼あのをやぢの仕業に違ひない、なほ、して見ると、あの繪馬は、特に自分の筋道を慮つて、さうして日印にこちらの目につき易いやうにとの親切でしたことだ、今こゝで、わざ／＼清澄村茂太郎の署名をした繪圖を置き忘れて行つたのも何かこれを我々の爲の合圖の下心ではないか、なか／＼細かい處に親切のある男だな。

あゝ、さう云へば、成程——何のこつた、迂濶千萬、今までの事にまぎれて、それを忘れてゐたが、あの名取川への蛇籠作りの時に、あの男が、房州に残し置ける拙者の財産を

危急の場合にかき集めて、石の巻の宿まであづけ置いたといふ事だったが、さうだ、何と云つたかな、その宿の名は——さうく、田代の冠者くわじやで覚えてゐる、田代屋といふのだ、その石の巻の田代屋といふのへ、房州に残し置いた拙者の財産を持つて来て預けて置いたと、名取川である男が、確かに云つた——この宿が、その田代屋ではないか、さうだ、田代屋だ、この帳面にある。

急にその事を思ひついた白雲は、番頭を呼んで、その由を申入れて見ると、番頭の云ふには、確にお預り申してあります——土藏へ藏ひこんでございますから、只今、取出して御覽に入れます。

さうか——それはよかつた、白雲はこゝで思ひがけなく房州で別れたわが子にめぐり合はれるやうな喜びを感じました。

土藏から、その財産を取出して来て呉れる間の事、田山白雲は、地圖を按じて、追手おふてからぬ手の二つの戦略せんりやくを考へはじめました。

追手といふのは、七兵衛方面のことで、搦手といふのはウスノロと兵部ひやうぶの娘むすめの断落かけおち方面

の事をいふ、この二つをこれからどう目當めあてをつけていゝか、こゝ石の巻を策源地さくげんちとしての手段方法を案じはじめたのです。

二十五

つらく、地圖を按ずると、どうも何となく、第六感的に、北東部が氣になつてならぬい、こゝから北東部といへば、北上川きたがみがよの支流にあたる追波おつき、雄勝方面と、それから自分が今經て来た萬石浦まんごくうらから、女川灣おんながわんをいふのです。

七兵衛の逃げた方面といふのは、全然雲を掴むやうなものだが、絶體絶命の場合には、方角を選ぶ餘裕よゆうは無いに定つてゐるが、併し、彼の本心の磁石じしやくは必ずや月の浦の無名丸に向つてゐるに相違ない、一旦は暗雲やみくもにどちらへ逃げようとも、やがては、月の浦つきうらを目ざして、慕こひ寄らうとする心持はよくわかるから、西南北へ向つて遠く走り過ぎる心配はない、マドロス並びに兵部の娘らしいのが、萬石浦まんごくうらを小舟こねで渡つたといふのを見た者があるといふから、これは、いづれその邊の、木の根石の蔭に當分こらへてゐて、たまらなくなれば

這ひ出すのだ、この方は發見にさう骨が折れない！と、田山白雲は最初からタカをくつつてゐるのです。

いづれにしても、圓心はこちらにある、牡鹿、桃生、志田、仙臺の界限をさう遠く離れるに及ばないといふことを、白雲は白雲なみに斷定して、漫然とこの北上川の沿岸を漂流してゐるうちには何とか手がかりがあるだらう、奥羽第一の大河としての北上川の沿岸をぶらついてゐるうちに、其の風光を畫囊に納めなければならない、本來はこの方が本業なのだ、こゝに白雲の仕事がまた一つ加はつて、つまり、一石四鳥の目的の爲に、當分はこの邊をぶらついてといふ事に思案を定めました。

その思案が定まつた時分に、番頭が藏から七兵衛をやぢからの預り物、つまり、房州洲の崎の暴動の際に、手早く、かき集めて、こゝまで持つて來て呉れた白雲の財産——と云つても、寫生畫稿が主であつて、一冊經濟の上には大した價值のある代物ではないが、自分の丹精の無事なのを見て、

「これく——まづ、これで安心」

白雲は、一應あらためて見て大安心をして、その荷物をまた一からげ、歸りまで更に保管を託して置くことにしました。

さうして、夜具をのべて貰ひ、枕に就くと女の子が、六枚屏風を持つて來て、立て廻してくれました、六枚屏風は少し大形だと感じましたが、その手重いとところが、また旅情の一つと嬉しくも思ひました。

そこで、枕について、それとなく立て廻された六枚屏風を見ると、それは月並のつく芋山水を描いたものでなく、色々の文字を寄せ書きしてある容子が異つてゐるから、また少し枕の向を換へて見直すと、一目でわかる旅姿の芭蕉の像を描いて、その上に文章が記してある。

終に道ふみたがへて、石の巻といふ港に出づ、こがね花咲くとよみて奉たる、金華山海上に見わたし、數百の廻船、入江につどひ、人家地をあらそひて、籠の煙たちつゞけたり、思ひがけず斯る處にも來れるかなと、宿からんとすれど、更に宿かす人なし、漸くまとしき小家に一夜を明す。

これを読んで田山白雲が、は、あ、奥の細道だ、奥の細道も松島や平泉の處の名文は空に覺えてゐるが、こんな處はあまり氣がつかなかつた、宿からんとすれど、更に宿かす人なし——か、成程、芭蕉翁の如き名人でも、これだな、我々が、斯うして田舎廻りをしてゐながらも、とにかく、宿かす人はある、一とせ文晁は松平樂翁公につれられて仙臺へのり込んださうだが、豪勢な羽ぶりであつたさうだ、當節は繪師と雖も、名聲を得ればお大名だが、昔は芭蕉ほどの大家聖人でも我々に劣つた旅をしたものだ、併しさういふ貧しい旅のうちに、人間の眞相といふものが本當に掴めるのだ、人生の深奥といふものに却て觸れることが出来るのだ、有り難いものだ。

白雲はガラになく、しんみりと、こんなことを思ひやつて、六枚屏風をながめてゐるが、この六枚屏風には單に、これだけの事を記してあるのではない、なほ、盛んにあとからくつき足しらしい筆蹟が続いてゐるのである。

次のは片假名文字入で、

潮流ト河流トノ關係テ、北上ノ河口ガ土砂デ塞ガツタ、北上ノ無盡藏ナ水利ガ殆ンド無

用ノ長物ニナツタ、石ノ卷ノ衰ヘタ原因ハ如何ニモ明白デアアル、水ニ鮭、鮪ガアル、陸ニ石、糸ガアル、長十郎梨ガアル、雄勝ノ硯石モアル、渡ノ波ノ鹽ハ昔カラ名高イ物デアアル、アタリノ禿山ニ木ヲ植エ、荒蕪ノ地ヲ開墾スルナド興スベキ産業ハ天然ノ景色ト相俟ツテ有志ノ志ヲ待チツ、アル。

牡鹿唯一ノ都ハ無意味ニ廢頽ニ歸スベキデハナイ、石ノ卷恢復ノ策三ツアル。

と版下でも書くやうに、かつきりと書いてその下に「平五郎」と銘を打つてゐるのは、つまり平五郎といふ人の石の巻觀を率直に述べたものらしい、その次に「野老庵小集」とあつて、

風呂吹に酒一斗ある夜の會 木犀

風呂吹や尊き親に皿の味噌 其北

風呂吹を食へば麥蕎湯をすゝめ覺 陽山

風呂吹の贊宏大にたりにけり 平五郎

こゝで毎會を催した逸興であるらしいが、その次に、六朝風の筆で、

芒鞋布襪路三千 追逐看山臨水緣
 唱出俳壇新韵鐸 聲々喚起百年眠
 身在閑中不識閑 朝躋鶴嶺夕雲開
 瓠壺之腹縱摸筆 收拾五十四郡山

打見た處では一律のやうになつてゐるが、二絶句である。この詩と句とによつて考へると平五郎といふ俳諧師が、遙々こゝへ旅に来て同好の士がこれを迎へた、平五郎といふ人は近世の俳人で、さうして、これによつて見ると、都から遙々旅をして來た人だ、路三千とある、山河遍歴に於ては芭蕉に勝るとも劣らない人と見える、そこで白雲も、身に引き比べて何かしらこの六枚屏風の餘白に一つ書いてやりたい氣になつて、御苦勞千萬にも、一旦ついた枕をあげて、帯を締め直し、行燈をかき立て、筆墨の行李を開きにかゝりました。

白雲は屏風の餘白へ何か書いて見たい氣になりましたが、さて、お手前ものゝ繪を描く氣になれませんでした。

何か字を書きたい、といったところで、その文字も咄嗟に平仄を合せて詩を作るの餘裕もなく、また、餘り自信もない和歌や俳句、速成をのたくらせて、此の道の泰斗名家のあとを汚すほどの向ふ見ずもやりたくなく、思案のはてが、いきなり、

ゆく春や鳥啼き魚の目になみだ

と、ぶつつけ書きに墨壺の水のゆるすだけを大きくなぐりつけて、さうしてその下に魚と鳥と水と木の枝とを描いて、あゝこれでよしと心が落つき、獨り感心しながら再び枕につきました。

何の理由で、田山白雲が特にこの句を認める氣になつたのだから、それはわかりませんが、たゞこの場合、むやみに此處へ此の句を書いて見たくなつたから、その衝動に馳られて書いて見ただけのものでありませう、併しながら、即興といつても衝動といつても、人間は日頃心にないことを自發的に發表する筈はありませんから、田山白雲は日頃この一句が何かなしに好きで記憶に溢れてゐた結果と見なければなりません。

それで漸く白雲の即興の亢奮もどうやら鎮靜して、さうして枕につくやぐつすりと熟睡

に落込んでしまひました。

二十六

その翌日、白雲は漫然と結束して宿を立出でると、早くも北上川の渡頭の上の小高い處に立つて北上川の北より來つて東南にのぼり流るゝ勢ひに眼を拭ひました。

「はゝア、これが北上川だな——」

白雲はこゝで初めて北上川といふものゝ印象を新たにしました。

北上川そのものを見ることは今にはじまつたことではないのです、現に昨晚泊つた石の巻の港が、その北上川の河口にあるので、今日はまたその沿岸を溯つて來たのですから、北上川とは絶えず道連れになつて來たのに相違ないが、はゝア、これが北上川だなと印象を新たに、例によつて限りなき旅心を湧きたゝせたのは、この渡頭に立つた時が最初であると云はなければなりません。

立つて北上川及びその彼方、漠々と通なる陸奥の平野を見てゐるうちに、白雲は旅心濼

濼として抑へ難く、やがて大きな聲をあげて歌ひ出しました。

感來つて吟聲が口をついて出でるのは、白雲も元來が多情多恨の詩人的素質を多分に持つて生れたのみならず、これは清澄の茂太郎を育てつゝある間に、それにかぶれた處もあると見なければなりません、その白雲の吟聲を清澄の茂太郎がまた反芻して輪をかけるといふ事になり、即興と出鱈目とに於ては師弟何れが本家だかわからないくらゐになつてゐるのであります。

今や北上川の渡頭の邊に立つて田山白雲が歌ひ出したのは（寧ろ唸り出したのは）三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有。秀衡が跡は田野に成て。金鶏山のみ形を残す。先高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河也。衣川は和泉ヶ城をめぐりて。高館の下にて大河に落入。康衡が舊跡は衣ヶ關を隔て。南部口をさし堅め夷をふせぐと見えたり。俗も義臣すぐつて此城にこもり。功名一時の叢となる。國破れ山河あり。城春にして草青みたりと。笠打敷て時のうつる迄泪を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡

これは、やはりこの土地の形勢によつてうつされた文章でないことは判り切つて居りますが、白雲はどうしても、これをこの場で歌つて見たい氣持になつたのは、

「まづ高館たかたかにのぼれば北上川きたかみかみ南部より流るゝ大河也、衣川ころもがはは和泉わづみヶ城しろをめぐりて、高館たかたかの下にて大河たいがに落入」

といふ氣象がこゝでピタリと來たから、それでこの文章をこゝで高らかに吟じて見たくなつたのでせう、それは昨晚の屏風に無性に「ゆく春や鳥啼とりなき魚うをの目めになみだ」と書いて見たかつた心持、時は秋であるのに、往く春の心が抑へきれなかつたのと、同じ衝動であります。

さうしてまた、北上川なるものゝ相が如何にも汪蒙わうもうとして、古調こてうを帯びた處に白雲の心胸が打れないわけには行かなかつたのでせう。

こちらへ來る間にも、荒川あらかはだとか、大利根おほとねだとか、那珂なか、阿武隈あぶくま、近くは名取川なとりがはに至るまで、大小幾つかの川を渡つては來てゐるけれども、この北上川へ來て見ると全く違つた感じ——どうやら奥州の夷——更に遠くは日高見の國をまで眼前に思ひ浮べ來つたものと

見えます。

キタカミの文字が日高カミの訛なまであるといふ考證かうしやうを仙臺で聞いた、して見ると、人文の未だ判別はんべつせざる上古、武内宿禰たけのうちのすくねや、日本武尊の足跡がある、キタカミとヒタカミは果して相通じてゐるか知れないが、この川の氣象を見ると、悠悠として北から流れ來つて西へ溯るところが、他の河川の北より出で、東海に注ぐ河相と趣を異にしてゐる、北上の名の字面も單純ではあるが、大きくして淋しい、または何となくこの川の川相せんさうを盡してゐるなんぞと字義じぎの詮索せんさくにまで及んで見ました。

白雲はさうして、のぼせきつて川をながめてゐる間に、もと／＼この地點は渡頭わたりづのこと、仙臺から南部へ通ずる要路でありますから、如何に北地のことゝはいへ、一人、二人、三人の旅人が川岸へ集つて來るのであります、漁者りしやもあれば樵者しょうしやもある、農工の人もあれば旅の巡禮もある、馬もある、駕籠かごもあらうといふものです、それがやがての間にかなりの數にまとまつて、そこで一同が誰れいふとなく、ブツ／＼と云ひ出してゐるうちに、ちれつたがる聲、船頭を呼ぶ聲が口々を突いて出でたので、それとは少し離れて高い處に

なつてゐる地點で、右の如く風景をほしきまゝにし、空想を食物としてゐた白雲の耳にまで届くやうになりました。

「成ほど——舟が出ない、拙者のやうに風景を食物として、心目を遊ばせてゐる身とは違ひ、人生の必要あつて旅程を急ぐ人にとつては、待たせられるのは長いものだ、待つ身はつらいものだ、成程、待せるにしても、これはどうも少し待せ過ぎるな、幾ら北のハテの暢氣な土地柄にしても、餘りに悠長な船出ではある、自分が来てからでも、これだけの時間、もうこれだけの人が集つてゐる、船頭が顔を出してもよかりさうなものだ」

と、舟を待つ人の不平に、白雲もそろ／＼共鳴したが、成ほど舟は川の下に見えるが、船頭がゐない。

「オーイ、船頭どん」

「どしやむしや船頭どん」

盛んに呼びたてゝゐるが、船頭が返事もしないのは、あの小屋の中にもゐないらしい、ゐないとすれば、ドコぞへすつぽかしたのか、さうでなければ向ふの岸へ舟を渡して行つて

向ふから又人に乗せてその舟へまた乗せて渡るといふ段取りだらう、はゝア、向ふの岸にも船頭小屋があり、舟があるにはある、舟といへばこの渡しの舟の形は可笑しい、軸も艫もない、ひきがへるを踏みつけたやうなペツタリした舟だワイ、あちらの岸の舟もさうだ。

一體川舟と草鞋は土地々々によつて違ふ、川舟の形といふものは、土地のものがその河流の水勢によつて經驗的に工夫した形が多いから、一定したものと思ふと大きに違ふ、例へば、富士川の急流には富士川の急流に向くやうに底までがちやんと附木ツパのやうに薄くしてある、利根川の舟でも、上流、中流、下流皆それ／＼違ふ、今此處へ来て北上川の舟がひきがへるを踏みつけたやうなペツタリした舟だと云つて、それを笑ふのは間違つてゐる、草鞋にしてもさうだ、平地を歩くものは平地を歩くやうに、山路を歩くものはそのやうに、走つて歩く商賣の草鞋と、ずしり／＼と踏みしめて行く人の草鞋とは造り方が違ふ、形によつて輕蔑してはならないのだ。——

白雲は、そんなことまで思ひ出してゐたが、まだ船頭の影も形も見えない、不平が漸く沸き上つて来る、いくら東北人は鈍重であるからと云つて、これではたまらなくなるのも

道理だと考へました。

二一四

一體船頭は、何處に何をしてゐるのだ、こつちの岸の舟小屋にだつて一人や二人ゐなければならぬではないか、ゐないとすれば向ふの小屋に何をしてゐる。

悠々たる白雲も遂に少し肝癪玉が焦れて来て、向ふの岸を見つめてゐたが、どうも遠目にはつきりと見えないのをもどかしく思ひました、眼を拭つてもう一度見直さうとした途端——白雲がはつしとばかり思ひ當つたことがあります、われながらうかつ千萬、實は、昨日船を立つ時に、駒井氏から借用して来た「遠眼鏡」といふものが、こゝにあるではないか、この行李の中に納めて来て、こんどはこれを一つ充分に活用してやらうとの樂しみが、こんどの旅程の一つの新しい景物と期待して居たのを、今まで忘れてゐたのだ、斯ういふ時だ、この時だ、と、氣がつくと、白雲は急いで行李を解いて、その中から取出したのが最新式の「遠眼鏡」であります。

二十七

この「遠眼鏡」をもつて、田山白雲が對岸の渡頭の船頭小屋のあたりに照準を据ゑた時、不意に右の船頭小屋の後ろから雲つくばかりの大きな男が飛び出したのを認めました。

は、ア、出たな、裏の方から出たな、出は出たが、今までの悠長さに引換へて、これはまた、すばしつこい飛び出し方だ、と呆れてゐるうちにその飛び出した大男が、河岸の舟の方へは來ないで、右手の小高い方へ一目散に何か抱へて馳け出して行く、どうも變だと思つてゐると、續いて又、同じ船頭小屋のうしろからバタ／＼と馳け出した大小二つの人影がある、その猥て、馳け出した處を見ると、まさしく前に馳け出した大男を追ひかけて行くのだといふ事があり／＼と分ります。

ところが、前に馳けて行く大男は、身體こそ頑丈さうだが、馳け方は存外不器用で、何か河原の石ころか、杭かにつまづいて仰向けにひっくりかへつた状態は、見られたものではない、ありません、さうすると、それを幸に後ろから追ひかけて來た大小二つの人間が、いきなりそれを取押へて組伏せにかゝりました、そこで、大男がはね起きようとする、二人が必

死と抑へ込まうとする、三箇が川の岸で組んずほぐれつの大格闘を始め出したのです。

遠眼鏡で委細を見てゐた田山白雲は全く呆れてしまひました。いゝ加減長い間お客をおつぼり出して、焦らせて置きながら、漸く姿を見せたかと思ふと、こんどは又お客の眼の前で、素敵なロケーションをおつぼりしてしまつた。船頭は舟を操ればよろしい、船頭がロケーションをして見せることは、ふざけ過ぎてゐる、また、こちらに待ち焦れてゐる客人はロケーションの餘興を船頭に向つて要求はしてゐない、船頭は早く船を出すやうにして呉れよばいゝのだ、白雲のやうに最新の機械はもつてはゐないけれども、待ちくたびれたすべての客は、この船頭小屋から飛び出して來た後の三人の人影、前に行はれつゝある河岸の大格闘を、あり／＼と肉眼で見て、またわき立ちました。

「何してやがるんだ、人をさん／＼待たせて置きながら、自分達は勝手な芝居をしてゐやがら、フザけた船頭だ、なぐつちまへ」

江戸ッ兒ならこんなに云ふでせう、さうかと云つて、こゝからでは彌次も飛ばせず、退窟紛れに事の成行きを遠目に眺め渡して、むだな力瘤を入れるばかりです。

そのうちにむつくりはね起きたくだんの大男、もう立て直つたと見ると、大變な馬力で兩方から取りかゝる大小二つの、たぶんこれは船頭親子であらうと見られるところの二つをむしろ返り討ちの體で突き飛ばし、はね飛ばし、その暴れつ振りの不器用ながら猛烈なることは當るべくもありません、あとから追ひかけた船頭親子はあべこべに突きまくられはね飛ばされ、蹴倒されつゝ、遂には大聲を擧げて救ひを求むる體です。

それを見ると、田山白雲急に氣がついたことがあると見えて、心急いた人が電話口でお辭儀をするやうに、遠眼鏡を一層深くのぞき込んで、

「ア！ ウスノロ！ うすのろだ、彼奴だ……」

と、下にゐる待合客のすべてがびつくりしたほどに一つの叫びを立てゝしまひました。

事實、白雲が絶叫したのも無理がありません、さう思つて見ると、殊に遠眼鏡といふ視力の飛道具を使用して見れば、いよ／＼それはそれに相違ないことで、眼の玉の碧いことはわからないが、髪の毛の唐もろこしの房のやうに赤いことが、はつきりとわかつて來る。

このウスノロの力の強いことは流石の白雲も一時はタヂ／＼とさせられた體驗がある、中々かいなでの老人子供の手に合ふものではない、あゝして立て直して返り討ちの形になり、二人に悲鳴を擧げさせてゐるのも無理のない處だが、それはさうとして彼奴を此處で見ようとは思はなかつた、固より彼奴を探しに出た目的の旅ではあるが、こんな處で、あんな事をしてゐる彼奴を斯うして發見しようとは思はなかつた。

何の爲に彼奴、こんなことをしてゐるのだ——それはわかつてゐる！　といふのは、あのウスノロが斯ういふことをやり出すのは今に始まつたことではない、彼奴は本來がウスノロであつて、ジゴマでもなければギヤングでもないのである、強盜殺人をしようの、詐偽横領をしようのといふ程のたくらみは彼奴には無いのだ、彼奴が人を犯し、人から咎められることのかぎり食と色との外に出ないのだ、食といつたところで、あれはいよいよ飢に迫つて堪へられなくなつた處に至つて、初めてノコ／＼と人里へ出て来て、その當座の飢を凌ぐだけのものをかづばらつて来る以上の仕事は出来ないのだ、それから色、即ち性慾のことだつて、彼奴のは何も特に巧言令色に構へこんで、色魔だとか、誘惑だと

かいふ手段で行くのではない、眼の前へ異性の女の肉のかほりがうごめいて来る時に、ついついたまらなくなつてかぶりつくまでのものだ。

今の事情が、またそれを證明させる、彼奴無闇に親船を駈落ちして來は來たものゝ、本來あの兵部の娘にしてからが、そんなに思慮の計算のあるやからではない、人の金を持ち出して、二十日餘りに四十兩の五十兩のと使ひ果してから、この世の名残りとしやれるやうなしやばつけも持合せてはゐない、たゞ盲目的に着のみ着のまゝで飛び出して來たのだから、行當りばつたり行詰るに決つてゐる、行詰つた時最初の要求は、彼等にとつては死でなくして食である、少くとも、ウスノロの奴め、雪時の熊のやうに何處かへ食物をあさりに出るに相違ひない、食物を人里へ漁りに出たが最後、眼の色毛の色の変つた珍客、昔二ツ眼のある人物が見世物の材料を生捕る爲に一ツ眼の人の島へ押し渡つたところ、反對に、二ツ眼のある人間が來たから取つかまへて見世物にしてやれと云つてつかまつてしまつたといふのと同じ運命に落つるに定まつてゐる、白雲が、最初七兵衛おやぢの影を捕へるのはかなり難儀であらうが、ウスノロの方は存外手間暇がかゝるまいと安く見てゐたの

が的中しました、彼は今、飢に迫つてあの船頭小屋の中へ何か食物を漁りに来たのだ、そして船頭親子に見つかつてあの醜體だ、白雲は自分の想像の圖星を行つてゐるウスノロ奴の行動か、むしろ可笑しくなつて吹き出したいくらゐに感じたが、併し、彼處で争つてゐる三人の御當人達の身になつて見れば必死の格闘である、殊に氣の毒なのはこの一種異様な侵入者を、こゝまで追跡して来て、折角取押へたかと思へば却つて逆襲されて、一步あやまると自分達の生命問題になる立場に變つて狼狽しつゝ後退しつゝ必死に争つてゐる體を見ると白雲は氣の毒でたまりません。

白雲以外の舟を待つ人々は、事の内情も目色毛色も一切分らないから、どちらへどう同情していかかわからないけれども、どちらにしてもあの格闘の幕が終るまでは、われ／＼は舟に乗れないのだと半ばはヤケ氣味に諦めつゝ、尙八分の興味をもつて右のロケーションを眺めて居りました。

そのうちに、突きまくられ、追ひまくられた船頭親子は、無残にも足を踏みならして重なり合ふやうに北上川の川の淵の中へ落ち込んでしまひました。

「アッ！」

と、こちらの岸で見てゐた一同が聲を擧げてこの無残な船頭親子のドン詰りに同情の叫びを擧げましたけれども、この不幸が、實は却つて力の弱い船頭親子には幸でありました、といふのは、力限り陸上で格闘を續けてゐた日には際限がない、際限がありとすれば暴力に於て格闘の差ある親子は、あの巨大な暴漢の爲に徹底的に致命的に叩き伏せられて再び立つことが出来ないやうにまでさせられてしまふにきまつてゐる、それが川といふ別管區域へ落ち込んでしまつた爲に、相手はちよつと追窮の機會を失つたのだから、この二人の親子が水練を心得てゐる限り——船頭のことだから、むろんそのたしなみはあるに相違ない、——また、何か水中に人を刺すやうな木石の類が存在してゐない限り、致命的の怪我からはまづ遁れられるものと見なければならぬ。

果して、追究された船頭親子が水中に落ち込んだのを機會に、寧ろそれは落ち込んだといふよりは、こちらが叩き込んだと見るのが至當な攻勢であつたけれども、そこまで來ると、もうそれ以上には働くことよりも逃げることの急なのが、自分の立場であるといふこ

とにでも氣のついた如く、倉皇と取つて返し、最初倒れた際に、そこにおつぽり出した包みもの、それは、その中のものは白雲の遠眼鏡を以てすれば、當然何か船頭小屋の中に有り合せた、當座の食料品であらねばならぬ處のものを取り上げるや、それを拾つて、不器用な馳けつ振りで、こけつまろびつ川下の方へ通じて行くのであります。

「やれ／＼、これでどうやら一巻の終りになつたが、可哀さうにたゞき込れてお陀佛になつたらしい船頭親子——」

と云つて、待ちくたびらかされたこちらの旅人達も、改めて同情の眼を以て見る瞬間に、早くも船頭親子は落ち込んだ處から十間許り上流へボカリと浮き出して、二人とも河原に立つて、着物を絞りながら馬鹿な面をして、逃げて行く大男の後姿を見送つてゐる。

やれ／＼これでまあ、こつちも助かつた、船頭親子も怪我もない限り、追つけ舟も廻つて来るだらう、と旅人共は市が榮えたやうな心持で、げんなりしたが、白雲一人だけの興味は、決してそれで盡きたものではありません、更に一層の興味をこめて遠眼鏡の筒を逃げて行くウスノロ氏の後ろへ向けました。

こけつまろびつ走りつけたウスノロが程なく蘆荻の生い繁つたやうな處へ來るとその蘆荻からパツと飛び出して、いきなり抱きつくやうにウスノロ氏を迎へたものがあります。

「あれだ！」

白雲は、その者が兵部の娘おつゆ嬢であることを直ちに認めました。

「は、あ、彼奴等、こんな處に巢をくつてゐたのか、本来、ふやけた奴等ではあるが、それにしては水びたりになつて隠れてゐるのにも及ぶまいに、どこまでも變つてゐる、どうするか見通すことではないぞ」

と、見てゐるうちに、二つの影は相擁して、その蘆荻の中へ没入してしまひました。

「ちえッ、やつぱりあの水の中の蘆荻の陰で二人がうち／＼やけてゐる、しようもやうもない奴等だ」

白雲は二人の没入した蘆荻の中を苦笑ひしながらは眼鏡を外さないで見ていると、やがてその間からすうつと一隻の小舟が漕ぎ出されたの見て、

「は、ア、よしきりぢやあるまいし、水の中にうち／＼やけてゐたといふわけでもない、奴

等、舟をあついで隠れてゐたのだな、さうして兵部の娘だけが舟に残つてゐて、ウスノロが食料品徴發と出かけたものなんだ、さうして、多少の食料にありついたので、これから河岸を變へようといふのだ、あれを下流へ行けば飯野川の宿になり、それから、ずん／＼下れば追波灣へ出るのだ、今では石の巻方面よりも彼地の流れが北上川の本流といひたいくらゐだ。さあ、併し、斯う認めた以上は、彼奴等を斯うして遠方からいゝ氣でさげすんでばかりゐてはならない、あれを追かけなければならぬ、追つかけて手捕りにしなければならぬ使命と責任を負ふ身だ——もう一べんあの野郎を相手にロケーションを繰返さなければならぬ、今度は船頭共とは相手が違ふ、追ひついた以上はこつちのものだが——追ひ過し、海へでも追ひ出してしまつてはならぬ」

といふやうなことが、氣懸りになると白雲も實際、對岸の火事の如く、對岸の馳落者を興味半分だけで見てるわけには行かないといふことに胸をうちました。

二十八

田山白雲が船を出て行つた夕べ、駒井甚三郎は、獨り靜かに船室に落つくと「人が出て行つた」といふ感傷に堪へられない。

白雲が出て行つたのは戻るために出て行つたのである、七兵衛が歸つて來ないのは歸りたくてたまらないのが歸れない事情に妨げられてゐるといふことを駒井はよく知つてゐる、それなのに、人が去つて行くといふ淋しい氣持を如何ともすることが出来ません。

マドロスと兵部の娘に至つては論外であるけれども、それですら離れて出て行つてしまつた人間には相違ない、彼等の放縱と我儘と不謹慎とで背いて去つたのだから、こちらに責任が無いと云へば云ふものゝ、自分の周圍に人を引きつける徳がなく、人を容れるの量がないのかといふことを想像して見ると、駒井と雖もいと心淋しさを催さずには居られないのでせう。

古來英雄といふものには、皆人を引きつける一つの力を備へてゐる、憎まれながらも恐れられながらも人がそれに附いて行く、人がそれから離れられないといふ力があるものだ、然るに自分は——英雄であるとはうぬぼれてゐないが、自分に附く人よりも自分から離れ

る人の方が多く、自分のよしと信ずる理想が人から喜ばれるよりも人から斥けられるものばかりが多いやうに思はれてならない、第一、自分の妻がもう最初から自分に離れてゐる、お君が離れた、従つてあの米友といふ禮儀はわきまへないが心實の確な小男も自分を離れたといふよりは寧ろ怨んで去つた、神尾主膳の陥穽にかゝつて自分は半生を葬られてしまつたやうだが、實は矢つ張り自分はその地位を保つだけの徳がなく、職を怠るだけの缺陷があつたせいだと見られない事もない——駒井はこんな事を考へながら、やがて獨り船室を立ち出で甲板の上を靜かに歩み出でました。

外へ出て見ると月の浦の夜に月はありませんでしたけれども、至つて靜かなものです。遠く松島灣の方のいさり火を眺めて、駒井甚三郎は滿面に觸るゝ夜氣を快しとしました。船の修繕と未完成の部分の工事、この地で大工に心あるものを雇ひは雇つたが、どうも思ふやうにこちらの壺を呑み込んでくれなくて困る、人手に不足はなく皆んなよく働くけれども、本來、斯ういふ船の工事を扱ふ手心が出来てゐないのだから仕方がない、明日は又一つ鍛冶屋を探し求めなければならぬ、機關部の工事を補足をする爲に、この邊か

ら鍛冶屋を求め出して來なければならぬ、それはあるだらう、本當の鍛冶屋は探せば出てくるに相違ないが、それを生では使へない、一應陶冶教育を加へてから、傍についてゐて指導して使はなければならぬ、その手数がどうも容易のものではないが、それは致し方ない、と駒井が、その事を思ひ及ぼすと、どうもあの不所存者の事が氣になる。

「あのマドロスの奴がゐれば、斯う云ふ時には全く役に立つ」
やつぱり未練のやうな思が残るらしい。

その時に船室の一方から唄が流れ出して來ました。

ネンネンネン

ネンネンネン

ネンネのお守は何處へいた

南條をさだへ魚買ひに

チーカロンドン

パツカロンドン

「茂だな、茂太郎歌ひ出したな、珍妙な子守唄を……」

と甚三郎が思ひ出してみると、キヤツ／＼と云つてよろこぶ男の聲が續いてきました、これは申すまでもなく登のぼる。

さうするとまた、茂太郎の聲で、

ちようち／＼ばア

ちようち／＼ばア

うつむてん／＼ばア

かいくり／＼ばア

とゝのめ／＼ばア

その度毎にキヤツ／＼とよろこび笑ふ登、登を笑はせていよくはしやぐ茂太郎、こんどはどうしたのか、登がワーツと泣き出す。

「そら、茂ちゃん、だからいけません、あんまりしつこいから、たうとう、お泣かせ申

してしまいました」

と叱るのはばあやの聲、

「いゝよ／＼、お泣かせ申したつて、またあたいが笑はせてあげるから、いゝぢやないか、

さあ、登さんごらん、あたいが踊つてあげるから、ばア」

それは茂太郎の聲、登も御機嫌ごきげんがなほつたと見えて泣きやんでみると、茂太郎の聲色こゝろいろめかした氣取つた聲で、

うんとことつちやん

やつとこな

そうれつら／＼おもんみれば……

そこで、登と云はず、ばあやと云はず一同がやんやと囁かたささしたその聲を聞くと船頭もあれば大工も交つてゐるらしい、やんやとうけさせた御當人を想像すると、これはどうやら團十郎をやつてゐるものらしい、目口めぐちをかはかし臺詞たいしをめりはらせて大氣取りに氣取つたところが目に見えるやうです、駒井もそれを聞くと、ほゝ笑まれずには居られず、何とな

く陽氣な氣分になるのです。

そこで、駒井も、自分も一つその船室へ入り込んで見ようといふ氣にまでなつたが、却つて一同を驚かせて、折角の興を殺いではいけな——その前を音立てず素通りをしてしまひました。

二十九

それから駒井甚三郎は、歩廊の間を歩いて、コック部屋の處へ來ると、こゝで金推君を見舞つてやりたい氣になりました、それは今の團樂の中に金推とお松だけが加はつてゐないから、駒井はこゝへ來て、扉をコックと叩いたが、叩いても叩き榮のする金推でないことに氣がつくと、そのまゝ扉を明け放しました。

普通ならば、どちらからか言葉をかけなければならぬのですが、こゝではさうする必要もなく、開けて見ると室の真中に蠟燭が一本かすかに光つてゐるその前で、一人ひれ伏してゐる金推を見ました。

駒井が入つて來たのに驚きもしないのは、それは全然氣がつかないであちら向きに伏してゐるからであります、と、云つても、そこで熟睡に落ちてゐるわけでも、居眠りをしてゐるわけでもありませんでした、金推は卓子を前にして何かしら嚴かな唸りを立てゝゐる、しかし、その唸は病苦に惱んでの唸りではない。

その光景を見ると、駒井は何か知らん嚴肅沈痛なるものゝ氣分に打れて突立つてしまひました。

駒井は金推が斯うして密室のうちにひとり深い唸りを立てゝゐる光景を見たのは今宵に はじまつたことではないのです、駒井がどうかして不意に金推の室内を訪れた時、斯ういつた光景を見て最初は病氣に苦しんでゐるのだと思ひましたが、後にはさうでないことを知りました。

つまり、この髯少年は斯うして「おいのり」をしてゐるのです、駒井には信じきれない目に見きれない神様といふものに對して、この少年は斯うして「おいのり」を捧げてゐるのだ、と、いふことを知ると共に、駒井はそれを輕んぜられない心になりました、これを

妨げてはいけないといふ心になつて、或時はそのまま立ち去り、或時はその「おいのり」の濟むまで自分も儼然としてその處に立ち盡すのを例としました。

今も亦その通りです——併し、駒井甚三郎が斯うしてその少年の、祈りを見てゐるが、今宵の少年の祈りは愈々嚴肅に深刻に進み行くかのやうに陽へ侵みるやうな深い唸が連續的に續いて行く、單にその唸だけが駒井の心を何とも云へない嚴かな沈痛なものに導き入れるのです、駒井は遂にその重壓に堪へられないで、この少年の祈りの終るのを待たずにまたそつとこの室を出てしまひました。

祈りの聲少年は船長の入つて來たことも知らず、立ち去つたことも知らなかつたでせう、そしてこの分では、何か夜もすがらの祈りが續くかもしれない。

そこを忍びやかに立ち出でた駒井甚三郎は、次に、事務長室の處まで來て、また歩みを止めてコト／＼と扉を打ちますと、こんどは明瞭な返事がありました。

「どなた？」

「駒井です」

「おゝ船長さま」

中にゐたのはお松です、お松は事務室の卓子の上で今まで一心に本を讀んでゐたことがよくわかります。

「何ですか、この本は」

「この間、殿様から借していただいた御本でございます」

「おゝ、伊蘇保物語、どうです、面白いですか」

「まことに結構な御本でございます、今までこんなおもしろい、爲になる御本を讀んだことがございません、あんまり結構でございますから、つい、登様の御機嫌を伺ひに行くのも忘れて今まで夢中に拜見いたしました處でございます」

「さうでせう、それはたしかに面白くてためになる本、わしも感心して讀みました」

「もとは西洋の御本ださうでございますから、わたしは又金推さんの大事にしておいでなされる、西洋のお寺のお經の御本かと思ひましたら、さうではございませんでした」

「中味はお伽噺のやうなものだが、このお伽話は大人君子も深く味はなければならぬお

伽嘶だ」

二三四

「本當にさ様でございます、噛みしめればしめるほど幾つになつても、どんな偉いお方でもお手本になるお伽嘶だと存じます、全くこんな爲になる御本は他にはございません」

「それに元は西洋の本でも、翻譯がなか／＼名文だから一層読み心地がよい、何處まで讀みました」

「はい、ここまで拜見しましたが」

と云つてお松は雁皮紙刷りの一種異様な古版本のある頁を開いて駒井の方へ示しました。

「は、ア——」

と駒井がそれに眼を落した處に次の如き文字が見える。

「狼と子を持つた女の事」

「それから殿様、この少し前のところに、私としても、少し不審なことがございます」と云つて、お松は、十枚ばかり、後ろへ紙數を繰返した處の書物の上を指すと、そこに

は、

「父と子どもの事」

駒井が示されたまゝ黙讀すると次のやうに書いてある。

ある父、子を大勢もつたが、その子供の仲が不和で、やゝもすれば喧嘩口論をして解めくによつて、その父なにとぞしてこれ等が仲を一味させたいといろ／＼工めども、爲るずるやうも無かつたが、あるとき兒ども一處に集りゐたとき、父下人を召うで「樹の楚をあまた束ねて持つてこい」というて、その束を執つて、數多を一つにして繩をもつて思ふさま堅う巻きたてゝ子どもに渡いて「これを折れ」といふ、兒共われも／＼と力を盡して折つてみれども、すこしも叶はなんだ、その時ちゝ氣條どもを乞うてほどき、一把づゝ面々に渡いたれば、造作もなく折つた、それをみて父のいふは「めん／＼もそのごとく、一人づゝの力は弱くとも、たがひに熱戀し、志を合はするにおいてはなにとした敵にも左右無うとり拉がるゝことあるまじいぞ」と云終つた。

下
心

二三五

互の一味をもつて人間の仲も強く、また不和なときは國家も滅びやすいといふ義ぢや。駒井甚三郎がこの條を讀み了ると、お松が、

「このお話はどうもわたくしが子供の時に聞いた毛利元就公のお話と、あんまりよく似過ぎて居りますから、ことによると元就公のお話をこんな風に書き改めたのではないかとも思はれるのでございますが」

駒井がそれを聞いて頷いて、

「成ほど、さう思はれるのも決して無理はないが、事實はさうではないのだ、一體、この伊蘇保の物語といふのは、今から二千年も前に出来た本なのだから、毛利元就の時代より遙に遠い、だから疑へば毛利元就のあの三人の子供に弓の矢を折らせたといふ物語は却つてこの物語から出たつくり話ではないかと疑ふのが當然なのである、併し、もう少し同情して考へやうによると、日本でこの本がはじめて釋譯されたのは文祿三年といふことだがそれ以前に日本へ来た宣教師や外人によつて、何等か例へ話となつて日本人の口に喰ひしてゐたかも知れない、それを元就が聞き知つてゐて、自分の最期の遺言に利用したもの

と見られない事もあるまい」

「さういふ順序でございませうか、何しても大變結構なお話で、偉い父親ならば、きつと利用しさうなお話でございます」

それから、駒井は、さう解釋するのが親切であつて、たとへ話などいふものは、本にまともつて出なずつと以前に、必らず口頭で傳へられてなければならぬ筈のもの、現に此の伊蘇保物語などにしてからが、二千年前、ギリシャといふ國でイソホといふ人が著したといふ事になつてゐるけれども、事實はそれよりも千年も前に同様の話が行はれてゐたといふ事、イソホはそれ等を上手に集め成したのだらう——日本でも、文祿時代に肥前の天草で釋譯される以前、何れの國人にも最も耳あたりのよいこの物語が、云ひ傳へられ語り傳へられてゐないといふ筈はなく、まして、海外交通の最も便宜の多かつた山陽道方面の要地を占めてゐた毛利元就の知識となることは不自然ではない、元就が最期の時に、あれを利用したのは元就その人の教養と遠慮とを知るに最も格適な話として受容られるといふことなどを説明して聞かせ呉れた、そのあと、お松が、

「殿様、こんな結構な御本ですけれども、たゞ一ヶ所本當になさけないと思ふことがございます」

「それは何です」

「イソホさまが、養子に御教訓なさる言葉のうちに『妻に心を許すな、平生意見を加へい、總べて女は弱いによつて悪には入り易く善には至り難いぞ』とあるのと、それから『大事を妻に洩すな、をんなは智恵淺く無遠慮なによつて他に洩いて仇となるぞ』とありますが、佛様のお教へにも女は成佛が出来ない、孔子様も女子と小人など仰せられまして、女をたのみ難いものになさるのは東洋の國々ばかりかと思ひましたら、この御本のやうに西洋でもやはり女は淺ましいものとなつて居りますのが、眞實のことゝは申しながら、なさけない思ひがいたします」

「うむ、全部がさうといふわけでもなからうが——」

と云つて、駒井は肯定するやうなしないやうな返事をしました、あさましい女もあればたとへばお松さんのやうな立派な強い素質を持った女性もある——とでも云へば云ひたか

つたのでせうが、さうも云はないでゐるとお松が、

「それから殿様、わたくしは申上げに出ようと思つてゐた處でございますが、只今、船の修理に来ておいでなさる人達の中に珍らしい人が一人居りますのでございます」

「それは、どういふ人ですか」

「この近邊の人ですが、日本でははじめてこの世界中を一巡りして來た人の仲間のうちの一人ださうでございます、世界の國々を經巡つて來たことに於ては、あのマドロスさんなんぞより遙かに世間が廣いらしうございます」

「はゝア、それは耳寄りな話だ」

と、いつて、駒井甚三郎はわれながらはづむ程に身を乗り出したといふのは、今もいま迄思ひなやんでゐた當座の問題——かけかへのない船の苦勞人、思案の果が、いつもあの不埒千萬なマドロスの上に落ちて來るのが苦々しい限り、處がこのマドロスに上越すところの海の苦勞人が、現在自分の身近にゐる！といふ報告を別人ならぬお松が聞かせて呉れたのだから、駒井が夢かと驚喜の色を浮ばせるのも無理はありません。

「さういふ人がゐるなら、早速會つて見たい、何處にゐます」

「お船の船頭部屋に泊り込んで毎日修繕仕事を手傳はせていたゞいて居ります」

「今晚もゐますか」

「はい、宵のうちには乳母やさんの御部屋へ皆さんとよくお話しに出かけます」

「では、直ぐに此處へ呼んでもらへまいか」

「今晚お會ひ下さいますか」

「早い方がよい、今すぐ此處へ呼んで来て下さい、此處で一つ逢ひませう」

「では、行つてまいります」

お松があたふたと出て行つたその後で駒井甚三郎は、何だか胸が躍るやうに思ひましたが、また思ひ返して見ると、それはあんまりお誂へ向き過ぎる、さういふ思ひがけない人間が、この際ひよつこりと此處へ現はれるなどは夢のやうなものだ、固より本當のマドロス修業をした人間ではない、海へ出た漁師か何かと災難で漂流して世界中を吹き廻されて來たといふものだらうが、何にしても遠洋航海の實地經驗さへ持ち合せてゐる人ならば十

分だ、早くその人を見て見たい、さうしたらば明日からでもマドロスの補缺として雇ひ大工から引き抽いて天晴れ一方の仕事を任せて見たい。

斯う氣構へしてゐると、やがてお松が手を曳いて當人を此處へ連れて來ました。

三十

待ち焦がるゝほどの目の前へ當人を連れて來られて見ると、再び駒井甚三郎が、一時は拍子抜けのするほど呆氣に取られてしまひ、

「はゝア、君は一體幾つなのですか」

と、取敢ず年を尋ねることが先になつてしまつたことほど、この當人は年寄り中のヨボヨボでありました、遠洋航海といふことから、マドロスの海風に吹き鍛へられた皮膚の色、鬨抜けて張り切つた若い體格、そればかり頭にあつた駒井は、目の前にこのヨボく老人を見せつけられて、やつとそれだけの文句しか出なかつたものです。

しかし、尋ねられた老人は、駒井にそんな思惑外れがあらうとは思はれないから抜から

ぬ顔で、

「はい、今年八十六でございます」

「八十六！」

で、駒井が全く苦笑ひを抑へることが出来ませんでした、でもサラリと打解けて、

「さうですか、よくその年で達者に働けますね、さうして、君が世界中を廻つて来たといのは、それは幾つくらゐの時のことでしたか」

「え」

といつて、もぢ／＼したのは耳が少し遠いものらしい、八十六では耳の少し遠いくらゐは無理はない、と思つてゐると、お松が代つて、大きな聲をして、

「おちいさん、あなたが異國を巡つてお歩きになつたのは、幾つの時でしたかと殿様がお尋ねになります」

「はあ、わしが流されたのですか、それは寛政五年十一月のことでございますな」

「寛政五年」

といつて駒井は胸算用むなざんようをして見ますと、寛政五年といへば、今を去ること六十四年の昔になる、その當時はこのお爺さんも二十一歳といつた若盛りだが、それにしても古い話だ。

と、また呆れましたが、併し、古いにしても新しいにしても経験の教へるところは腐くさらないものがある、よし／＼今晚は一つ、この老人に就て聞き得るだけ聞いて見よう、耳は少し遠いやうだが、金ツンボといふわけではないから、お松がそばにゐて、あしらつてくれれば結構話の用には立つ、そこで駒井は、

「お松さん、金推君きんおしは今例によつてお祈りでもしてゐるらしいと、それを妨さまたげてはいけなからあなた一つ茶菓の用意をして下さい、今晚は一つこのお爺さんから海の話聞かせて貰ひませう、ゆつくりと」

お松は心得て、

「承知いたしました」

と、いつて出て行つたが、暫くして茶菓の用意をと／＼のへて持つて来ました。

そこで、駒井菟三郎は、老人を相手にその昔経験した漂流談をお松と二人がよりで聞き取りにかゝります。何しても耳が遠いし、年は寄つてゐるし、記憶ももう散逸してゐる部分も多いし、言葉も大分違ひますから、もどかしいことは、この上なしですけれども、それでも相當の收穫が與へられないといふことはありません、少くともこの老人が日本人としては最初に世界を一周して來たところの漂流者の中の一人であるといふことは疑ひがありません。

時は、寛政五年十一月、石の巻の船頭で、平兵衛、巳之助、清藏、初三郎、善六郎、市五郎、寒風澤の左太夫、銀三郎、民之助、左平、津太夫、小竹濱の茂七郎、吉次郎、石濱の辰藏、源谷室濱の儀兵衛、太十等十六人、江戸へ向けての材木と、穀物千百石を積んで石の巻を船出したが、途中大風に逢つて翌六年二月まで海と島との間を漂流した、漸く漂ひついたところが、露西亞領のオンデレケオストロといふ島。

その島に島人のなさけで止まること一年ばかり、穀物は無く、魚類のみを食べてゐた。七年四月三日にまた船に乗つて島々を過ぎ、陸地を渡り、エリカウツカといふ處に着い

て總勢一家を借りて棲み、住民の情けにめぐまれ、或は日雇となつて働いて賃銀を得ること八年、その後モスコウを経て、ロシアの港ビゼリボルガといふ處で皇帝に謁見を賜はつた時分には、一行の中六人のものはもう死んでゐた。

こゝで皇帝から歸るものは歸るべし、止まらうとするものは止まるも差支へなしとの仰せによつて、四人は歸り六人は止まることになつた、その歸國四人のうちの一人が即ちここにゐる老人である。

斯くて文化元年正月、彼の地を發船し、マルゲシ、サンベイツケ等を経て七月の初めカムシカツカに着き、翌月發船して九月長崎に歸る――

といふ物語、それを繰返し引き集めて要領をとつて見ると、まづロシアの地に漂着しそこで大部分を暮し、それからシベリアを経てウラル山脈を越えモスコウを経てベテレスブルグに至つてロシア皇帝に謁見し、公使レサノツトに従つてカナシタの港を出て、大西洋を經、アメリカのエカテナといふ處へ行き、それから、サンドーイツチ島を過ぎてカムチャツカに入り、長崎に歸るといふ順路、寛政五年から十三年目で故國へ歸つたといふ筋

道だけは分る。

二四六

右の話のうちにも地名だの方角だの随分混線したり、聞き馴れないところが多いが、それでも地理の素養の深い駒井には、よく要領を受取ることが出来ました。

ほな、委しくは、明日自分の船長室へ連れて来て、地圖について、委しく問ひ質すことにして、それから餘談に移ると、老人は一年ばかりの間、米も粟もなく、魚ばかり食べてゐたことがあるの、はじめて麥のパンを與へられた時の嬉しさだの、皇帝にお目にかゝる時は、わざ／＼繻子の日本服を拵へて與へられたことだの、日本へ歸らうといふもの四人には羅紗を一卷、懐中時計を一つづつと、それから金錢を與へられたし、向ふに泊つてゐる者六人には、衣服、寢道具を支給され、食事には毎日三度々々パンと豚と魚と酒を與へられたこと、そんなことの思ひ出を興味多く語り出しましたが、夜も大分更けましたからお松にまたその老人を送り返させて、さうして自分は船長室へ戻つて、蠟燭をともし光にうつる壁の大地圖を引き合せて、今の老人の話した要領の筋道をずつと指で線を引いて見ました。

三十一

根岸の屋敷で、神尾主膳が日脚の高くなつた時分に起き上がり、

「あゝ、昨夜もあの女は歸らなかつたな」とつぶやきました。

あの女といふのはお絹の事です、お絹は昨夜も此家へ歸らなかつたのです、昨夜もといふ以上は、歸らないのは昨夜に限つたことではない、この頃は、度々さういふ事があると認められる、事實も、その通りで、つゞいて神尾が揚子を使ひながら勝手元で横文字のはいつた赤い籬入を横目に見て、吐き出すやうに、

「あいつ、また異人館か」

それも、その通り、この頃のお絹は異人館へ入りびたりの體である。

神尾としては、今となつては、もう格別氣にもしないらしい、一々氣にしてゐた日には際限がないとあきらめてゐるやうでもあるし、異人館なるが故に、寢泊りを默許してゐる。

二四七

だけの情實でもあるかのやうにも見られる。

洗面も、食事も済むと、神尾は書齋へ立てこもりました。

いつもは、こゝで、閑居かんきょしての唯一の善事としての書道しよだうを試むるのですが、今日は、筆を選ぶことはあと廻しにして、先づ、机に兩腕りやうみぢをつけて、腮おこを兩掌りやうてで受けて、じつと庭前をながめこんだのであります。

庭の八ツ手の下を、小鳥が歩いてゐるのを暫くぼんやりと見つめてゐたが、今度は、腮を受けてゐた兩掌を外して、眼と額をおさへてうつつむきました。

「さあ、今日から一つ著作に取りかゝつてやらう」

暫くあつて、むつくと頭を上げて、硯すずりを引き寄せ、紙を重ねて文鎮ぶんぢんを置き、それから硯箱の中から細筆を選んで、手に取り上げたのが、いつもとは少し變つてゐます。

いつもならば、こんな細筆を選ぶといふことは無い、細筆をとる時は、何か實用あつての例外の場合のみであつて、朝は木軸の大筆に、先づたつぷりと水を含ませることを楽しんでゐたのですが、今日は、いきなり細筆を選んで、

「一つ著作ちよさくに取りかゝる」

と、かけ辭をしたところを見ると、筆の使用も目途も、從來とは違ひ、翰墨を楽しむと云ふのではない、實用向きに使用して、この男がかりにも著作をする氣になつた動機といふものがまた不審ではあるが、すでに今日から着手しようとおくびにも云ひ出した處を以て見れば、かね／＼その下心はあつたに相違ない。

神尾主膳は著作をすべからざるものだと定めてしまふ理由は無い、この男が著作をする、それはやつぱり似つかはしからぬ處の一つのものではあるが——現に旗本はたもとや御家人ごけじんで繪師や戯作げさくを本業同様にしてゐる者もいくらかもある、大名高家でも、立派な隨筆を世に残してゐる人もあるのだから、神尾にしても、苟も著作でもして見ようといふ氣になつた事は、すでに閑居善事の第二段であるかも知れない。

下へ野のを入れた紙を當てがひ、その上へ半紙を置いて、神尾は、さら／＼と文字もじを綴りはじめました、暫くして、

「女賢メノサカシウシテ牛賣ウシウリ損ソコネル……」

と二三度口のうちに、つぶやきながら、筆の進行をすゝめて、思案の體、

「女賢シウシテ牛賣リ損ネル……」

彼は、今再三それを繰返して、

「はて、この故事來歴の出典は、何處であつたかしら」

思案の種はそれでした。

「女賢シウシテ牛賣リ損ネル——といふ俚諺は、日頃、耳目に熟してゐながら、さて、これを紙に書いて、その解釋を附する段になつて、神尾がハタと當惑したのであります。

この語の表現する意味は、女といふものは賢いやうでも拔かりがある、いや、女の賢いのは賢いほど仕損じがあるものだ、だから女の賢いのは危ない、女を賢こがらせてはいけない——といふ戒しめになつてゐるのだが、さて、これが出所は何處か、支那から來たのか、和製か、その故事來歴を知りたい、普通、會話として常識としてとは、そんな詮義立をしないで通るが、著作として世に示すには、そんなことではならない、そこで、神尾が首をひねつたのは、それを知るべく如何なる参考書によつたらいいかといふことの

思案でした。

「曲亭の燕石雜誌なんぞにありやしないか、あれは物識りだから」

と云つて見たが、生憎、こゝには、その燕石雜誌もない、三才圖會もない、どうも、この牛賣リ損ネタ實例の出典に思惱んで見ても當りがつかないのであります、遂に神尾は一

應斷念して、

「明日あたり、市中の本屋をあさつて見よう」

そこで筆をさし置いて、また庭の面をぼんやりとながめて居ました。

その時に、微風が吹いて來て、机の上を煽ると、さして強い風ではなかつたけれど、半紙の薄葉を動かすだけの力はあつて、二三枚、這るやうに、ひらくと疊の上へ舞ひ下りました。

神尾が、あはて、それを抑へにかゝつた手先から洩れたところには「半生記」との題名が讀まれる。

は、あ、著作といつたのは、身の上を書いてゐるのだな、しほらしくも、神尾主膳が自

分の「半生記」の懺悔録でも書き残して置きたいといふ了見になつたと見える。

それに相違ない、神尾の著作といつたのは、かねてよりの宿望で、自分の父祖から、わが身の今日までの自叙傳を一つ書いて置きたいといふ、その希望が今日になつて實現しかけたといふわけなのです、さうして、書き進んで、神尾は自分の母の事を書く段取りになりました、母の事を思ひ出して書いて行くうちに、右の、

「女賢シウシテ牛賣リ損ネル」

につき當つて、その解釋に當惑したといふ次第なのであります。

そこで、神尾は、筆に現はすべき進行をやめて、その代りを頭の中に再現させ、自分の母といふものゝ面影を腦裏に描いて見ました。

神尾主膳の母――

それが當人の頭の中の主題となつてゐるのであります、外で見ても、ちつともわからないけれど、神尾の頭の中では、幼少の時代の自分と母との世界が、まさしくと展開してゐる、母を想像する裏にはどうしても父といふものが浮んで來なければならぬ。

自分の父といふものは、ぐうたらで、のんだくれで、のぼせ者で、人から煽てられれば、財産に糸目をつけなかつた、どうにもかうにも手のつけられない、どうらく者であつたといふことは、自分も人傳によく聞かせられて、事實さうだと信じてゐる、その父に輪をかけて悪らつになつたのが、此の自分だといふことをも、自分ながら相當承認してゐる、人の噂から云つても、自分の印象から云つても、わが父なる者は、やくざ旗本の標本であつたに相違ないとして、母は、それとは全く異つた賢婦人であつたといふことは、世間の通評であり、自分も敢てそれを否定しようとはしないが、よくよく考へ直して見ると、その信念がぐらつく、わが母は果して、父と全く打つて變つた良妻賢婦であつたらうか、父が箸にも棒にもかゝらない缺陷のすべてを、母が埋合せて持ち合せてゐたやうに信じてよいものだらうか。

少なくとも、母がそれほどの賢婦人であつたなら、この現在のおれといふものを、こんなに仕立てないでも濟んだのではないか。

わが母の賢婦説は再吟味の必要がある、父のぐうたらは檢討の餘地なしとしても、わが

母といふものゝ世間相場は改定される必要は無いか。

神尾は、今それをつくづく思ひ返してゐる。

世間の人はその當時云つた、神尾の家は奥方で持つてゐるのだ、主人は論外だが奥方がしつかりしてゐるから、それで持つてゐるのだ——これが世間の定評になつてゐたのに、當人の母は、また唯一のあとより息子たるまだ頭是ごんぞない此の拙者の耳にタコの出るほど云ひ聞かせてゐたのは、

「神尾の家は、お前が起すのですよ、お父さんは駄目だから、お前が立派な人になつて、見返してやるやうにしなければなりません」

これが母の口癖であつた。

だから、自分も、父といふものは駄目なものだ、父といふものは厄介者だ、自分達の名譽を害し、生活を動搖させる以外の存在物ではあり得ないものだ、父に代つて、世間を見返してやるといふのが、自分の將來の仕事でなければならぬ、といふ意味での教育をされて來たのだ、それでも、少年時代は父を輕蔑するまでには至らなかつたが、父の存在

といふものを無視すべきことは教へられてゐた。

さうして、また、父の生活ぶりそのものが丁度、母の教へるやうに、自分には見なされて來ると、そのだらしない處のみが目につき、青年時代の初期から、何かにつけて父を輕蔑し出して來たのだ、さうすると、父が時としては烈火の如く憤つて、自分を叱責したり罵倒したりする、それが腕力沙汰にまでなつた時、輕蔑が變じて反抗となつてしまつた、さういふ時に、また母が必ず、こちらに加勢して呉れた。

父の評判は益々悪くなる、それに反比例して母の人氣はよくなる、神尾家は主人はぐうだらだが、奥方がしつかりしてゐるので持つてゐる——その極めはいよく本格的となつて今日までも動かさないでゐるのだが、果して、それが無條件でそのまゝに受取れるか。

母は、もとより父のやうに品行上の缺點は無かつた、品行上の缺點が無いといふ事は、世間的には、すべての性格的の缺陷を帳消するのと同じ理由で、品行上に些細な缺陷でもあれば、他の性格的に、どんな美點善處があらうとも、大抵葬られてしまふ、品行上では箸にも棒にもかゝらなかつた、わが父が、性格的にも全く缺陷ばかりであつたらうか、何

かしら、認められない處に良處は無つたか、父は世間からは悪評判で葬られてゐたが、友人間では寧ろ敬愛される性格と趣味とを持つてゐたやうだ、母はそれに引かへて、第一性格に潤うるほひといふものが無つたやうだ——それから……

母が、世間に云はれてゐるやうな賢婦人だつたら、父をあんなにはしてゐなかつたではないか、よし、父を救ふことが絶望だとしても、自分をこんなにしてしまふまでの事は無つたのではないか。

自分は、今となつて、母の再吟味さいごんみに續いて、多くの遺憾うっかんな點を見出す、それと共に、父の性格に何か埋もれてゐるところはないか、何かなつかしいものが隠れてゐたやうに思はれてならない。

女が第一線に立つことは、よかれ悪しかれ不自然である、不自然が最善であり得る筈がない、古人が、

女子ト小人ハ養ヒ難シ

と云つたのも、牝鷄ひんけいの最あしたすることを固く戒しめたのも、今となつて、神尾主膳には辨ひし

思まひ當る、現にあのお絹だ——

見給へ、あれが、この頃調子づいてゐる事を、七兵衛から金銀を捲上げて、この生活にゆとりを見せたのも自分の手柄だとしてゐる。

異人館いじんくわんへ出入して、外人を引かけて何か物にしようといふたくらみを一ぱしの見えのつもりでゐる。

主膳は、そこまで考へると、あのお絹といふ女と、自分の母とがその當時、どういふ思わくの下に生きてゐたかを知りたい氣持になりました、父の正妻であつたわが實の母と、父のお手かけであつた今のお絹とが、根本から異つた性格の下に、表面角突き合あひをしたといふ噂うさも聞かないが、内心いかやうに、嫉妬ねたはを磨といでゐたかを考へると、今に、歸つたら一つあの女をとつゝかまへて、あの女が、わが實の母を、どう解釋してゐるか、それに探ぐりを入れて見ようと思ひ定めました。

その時分に、庭先へ、また例の御定連ごぢやれんの子供たちが、どや／＼と入りこんだ物音を聞きました。

男の子と、女の子と、入り亂れてキャツ／＼と遊ぶ子供の肉聲を聞くと、神尾主膳の血が物狂はしくなりました。

淺ましい事の限りに、主膳は、子供の聲を聞いてその童心に觸れることが出来ません、いかに性悪な人も、をさな兒の姿に天國の面影を見ない者は無い筈ですが、悲しい哉、神尾主膳にとつては子供の肉聲が、自分の血の狂ひを齎らすのは、特にあの事以來の事であります。

あの事といふのは、先頃までよく遊びに来てゐた、大柄な少し低能なその癖、色情だけは成人並みに發達してゐる、よしんべエの事、吉原遊びをするから、お前おいらんになつて、廻しをお取りといへば、直ぐにその眞似をする女の子、隠れんぼをして主膳の書齋へづか／＼と入つて来て、主膳の膝を隠れ場所に選んだバカな女の子——この頃、姿が見えないから、仲間の子等にたづねて見ると、

「あゝ、殿様、よしんべエはお女郎に賣られたんだよ」
に、二の句がつけないであると、立てつゞけに、

「よしんべエはねえ、吉原へお女郎に賣られたんだから、殿様、買ひに行つておやりよ」とやられて息がとまりさうになる處を疊みかけて、

「あたしも、今に稼いでお金を貯めてお女郎買ひに行くの、よしんべエを買ひに行つてやらあ」

友達が賣られたのを、お小遣をもらつておでんを食ひに行くと同様に心得てゐる返答に、神尾主膳が胸の眞中をどうづかれて、引くり返されてしまった、その事以來、特に主膳は子供の肉聲に怖しき壓迫を感じるやうになつたのです、で、この肉聲を聞くと、三ツある目の眞中のが、にちや／＼と汗ばんで来て、心も色も物狂はしくなつて来て、立ち上がつたかと思ふと、お絹の部屋へ走り込みました。

さうして、あちらこちらと部屋中をかき廻して、その最後が戸棚を引き明けると、その中をがら／＼引つかき廻し、さうして見つけ出したのが、多分西洋酒の一リットル入りば

かりの小壘こぶらであります、それを見ると、主膳は栓せんをこぼ明けて、グツと飲みました。

これは何といふ種類の酒だか主膳は知らないが、黄色い液體えきたいがまだ六分目ほど入つてゐる、その四分目ほどは、先日、お絹から振舞はれた覚えがある、その残りの部分をお絹から壘ぶらを取り上げられて、

「もう、いけません、お預けですよ、このお酒は強いから、毎日、このくらゐづゝ、わたしがくぎつて飲ませて上げます」

と臆おそひこまれたのを覚えてゐる、それを主膳は覚えてゐるから、これだ／＼と思つて、栓せんをとつて、グツト飲み出したのですが、その時に、さすがの主膳も、一時、

「カッ！」

と口と咽喉のどを鳴して、飲んだ分を一時に吐はき出し、壘ぶらをおつぼり出さうとしたほどに酒の強烈な力におそれました、強い酒とは知つてゐたが、これほど強いものだとは思はなかつた。

併し、いくら強くても酒は酒に相違ない、毒物でないといふことは、主膳の経験に於て

も、強いながら口當りにもわかるものですから、二口目は、やゝ注意して、そろり／＼と飲みました。

さうして、この何といふ判らない強烈な酒の残り六分ほどを主膳が、そろり／＼と忽ち飲みつくしてしまふと、眼がクラ／＼としました、クラ／＼としたけれども、毒に當つたのではない、やつぱり酔心地よひごちは酔心地に相違ない、眩暈めいげんのうちに陶酔たうすいを感じながら空壘あきぶらをおつぼり出すと共に、またそこいらをガラ／＼引かき廻してゐるうちに、ふと、折込みの舶來はくらいのガラス鏡かきやみを發見し、

「はゝあ、こいつ、お絹のやつが異人からせしめたのだな」

と云つて、くりひろげる途端、思はず自分の面かほがうつると、明々瞭々たる三眼！

累かさねではないが、それ以來の主膳は鏡を見ることを嫌ふ、お絹がお化粧けしやうをしてゐる處へ通りかゝつて、つい自分の顔が鏡面に觸れた瞬間などは、あはてゝそれを避ける、日本の鏡はうつすにしても、もつと親切だが、このガラス鏡は強烈だ、いふしも雅致がぢもなく、醜態しうたいそのまゝをすつかりうつしてしまふ、主膳はかつとなつて、そのガラス鏡を疊の上に叩き

つけたが、叩きつけられて裏返しになつた鏡の一面に、また鮮やかな繪がある、それは酔と物狂はしさにボケた主膳の眼にも、ハッキリと受取れる處の繪模様。

肌のすてきに美しい裸女が一人、一糸もかけずに嬌態を長椅子に持たせて、一種異様な笑みを浮べてゐる。

神尾が三つの眼で、一遍叩きつけた鏡の裏繪を見つめました。

「毛唐の奴は、裸女を平氣で描いて表へ出しやがる、描かせる奴も描かせる奴だが、描く奴も描く奴だ、こん畜生！」

と云ひながら、主膳は、疊の上の鏡の裏繪の裸體美人へ、自分の鼻先をこすりつけるほどに持つて来て、香をかくかのやうに、ながめ入りました。

「ちえッ」

實際、腹の立つほど旨く描けてゐやがる、肉がそのまゝ浮いて出てゐる、肌の光澤が生き寫しになつてゐやがる、それに、この生たらしい笑ひ顔はどうだ、生のをそのまゝ取つて来て描きやがつたのだ、描く奴も描く奴だが、描かせる奴も描かせる奴だ、さうして

この鏡の裏繪なんぞにして、大びらで世間へ向けて賣り出す、不埒千萬だ。

日本の女なんぞは、どんなに恥知らずだつて、自分の姿を裸にして描かせて賣らせる奴はない、また、どんな墮落した繪かきだつて、女の丸裸物を描いて市中へ賣らうなんぞといふ事はしない、また、たとひ、賣女遊女にしても、色は賣るけれども、裸になつた姿を描かせるやうな奴はまだ一人もゐない——毛唐はそれを平氣でやる。

毛唐は獸なのだ、だから、女を可愛がるにしても、イキな身なりや、すつきりした姿を可愛がるんぢやない、女を買ふにしても裸にしなけりや満足が出来ないのだ、遊ぶにしたところで、關燈の影暗く淺酌低吟などいふ味なんぞは毛唐にわかつてたまるものか、あいつ等は、女を玩ぶに女を裸にして玩ばなければ満足が出来ないやからなのだ——ちえッ、いゝさまをして、この女め、笑つてやがる、小憎しい笑ひ方だなあ——

主膳は斯う云つて、三眼爛々として、西洋婦人の豊満な肉體美をながめてゐるうちに、その女の面かたちがだん／＼お絹に似て来る、お絹でありよう筈はない、第一、頭が金髪で、色の白さは似てゐるとしても、その肉づきが、お絹でないことはわかりきつてゐるが、

嬌然笑つてゐる、いやらしい笑ひ方が、だん／＼とお絹の面になつて來ると、肉體そのものまでが異人ではない、明暮、自分のそばにゐるあの模範的の淫婦娼婦だ。

さう思つて來ると、その笑ひ方が、からかひ氣味になつたり、思はせぶりになつたり、厭がらせ氣味になつたりして、主膳をなぶつて來る。

「ちえッ」

主膳の三眼はクル／＼として、その繪の傍へ、もう一つの幻影をこしらへて、それを燃ゆるやうな眼で睨み出しました、もう一つの幻影といふのは、そこへ、赤髯の大きな脂ぎつたでぶ／＼の洋服男が一つ現はれて、いきなり、裸體婦人の後ろから、羽掻じめにして、その髯だらけの面を美人の頬へ押しつけて、あらう事か、その口を吸ひにかゝつたのです、幻像がさうなつた時、こんがらかつた主膳の三眼が全くくら／＼として、手が早くも躍動すると無茶に疊に落ちた折鏡の全體を拾ひ取り、力を極めて、發止！と投げつけたのが日頃お絹が身だしなみをする處の丸鏡の正面であります。

在來の鏡臺にかゝつた日本の鐵製の磨かれた丸鏡と、舶來の四角なガラス鏡とが發止と

かみ合つて火花を散しました、併し、どちらがどれだけ損害の程度が大きかつたかといふことなんぞに、頓着もない主膳は、それから、自分の部屋へ走り戻ると、急いで、衣服を改め、わな／＼くやうな手つきで足袋をはき、紙入れを懷中へ押しこみ、それから大小をさしこみ、頭巾をかぶりこみ、いよ／＼本物の物狂はしい氣色になつて、此の屋敷の裏門から、ふら／＼と外へ出かけて行つてしまひました。

その後ろ姿を見ると、ふら／＼として、まさしく物につかれたやうな姿で、どうかすると、机龍之助がこんな姿で人を斬りに出かける事がある。

その後ろ姿を、庭に遊んでゐた子供たちが際どい處で認め、

「あれ、殿様が、どつかいらつしやるよ、わたし達にはだまつてさ」

「あゝ、三ツ目錐の殿様が、ないしよで何處へかいらつしやるよ」

「こつそりとね——おかしいわね」

「きつと吉原へ行くんだよ」

「やうだわ」

「さうに違ひないよ」

「頭巾をかぶつてさ」

「吉原よ」

「吉原たんぼは水田圃……」

「吉原へ何しに行くの」

「定まつてるぢやないか、お女郎買ひにさ」

「あ、さうだ、よしんべエを買ひに行くんだらう」

「さうなんだね」

「ちうよ」

「さうに定まつてるよ」

「憎らしい殿様、ビビ——」

と女の子の一人が、眼をむいて、主膳の後ろ姿に向つて唇を突き出すと、

「ビビ——」

寄つてゐた子供達が、すべて、出て行つた神尾の後ろ姿に向つて、眼口を突き出しました。斯うして、屋敷の裏門を出た神尾主膳は、子供達の想像するやうに、必ずしも、吉原へ行くものとは受取れない。

根岸の里をふらつき出した神尾主膳は、どこをどう踏んでゐるのだから、自分でもよくわかつてはゐないらしい、ふら／＼と、人通のない處、或は人通りの劇しい處を、無性に歩いて來たが、ある處で、

「駕籠屋、築地の異人館まで急いで呉れ、異人館、知つてゐるだらう、赤髯の巢だ、毛唐が肉を食つてゐる處だ、行け／＼、異人館へ乗りこめ——酒料はいくらでも取らせてやる」やがて威勢のいゝ駕籠の揺れつぷりで、神尾主膳の身はかがれて宙を飛んで行く。その行先は、もうわかつてゐる、即ち築地の異人館。

白雲の巻了

膽
吹
の
卷

三十五 膽吹の巻

一

宇治山田の米友は山形雄偉なる膽吹山を後ろにして頻りに木の株根を掘つてゐます。その地盤を見れば、正しく膽吹山の南麓であつて、その周囲を見れば荒野原、その一部分の雑木が斫り倒され、榛莽荆棘が刈り去られてある、そのうちのある一部分に向つて鋏を打ち卸しつゝ、米友がひとり空々漠々として木の根を掘りつゝあるのです。

打ち込む鋏の音が、こだまを返すほど森閑たる處で、ひとり精根を株根に打ち込んで、側目もふらず稼いでゐるのはこの木の株根に執着があるわけではなく、斯うして幾つもの株根を掘り起すことの目的は、この土地を開墾する、つまりあらくを切る爲の勞力でなくて外に理由のある筈はありません。

米友が膽吹山の下で開墾事業をはじめた。

これは、これだけの圖を見れば驚異にも價する事に相違ないが、筋道をたづねて見れば甚だ自然なものがあるのです、それは後にわかるとして、かうして米友が一心不亂にあらくを切つてゐるとき、

「米友さん——」

そこへ、不意に後ろの林から現はれたのは手拭を姉さん被りにして、目籠の中へ何か野菜類を入れたのを小脇こわきにして、さうしてニッコリと笑つて呼びかけたのはお雪ちゃんでした。

「御精ごせいが出ますね」

「うん」

米友も鍬を休めてゐると、お雪ちゃんはだん／＼近寄つて来て、

「少しお休みなさい」

「どーれ」

と云つて、米友は鍬を投げ捨て、まだ掘り起さない掛けごろの一つの木株へどつかと

腰をおろしたが、さて、斯う云ふ場合に、抜かりなく、間まのくさびにもなり、心身疲勞の慰藉ともなるべき——アメリカインデアン傳來の火附草をとつて先づ一服といふ手先の藝當が米友には出来ません、腰を卸したまゝ、兩手を膝に置いて、猿のやうな眼を見張つて、お雪ちゃんの面を見つめたまゝでゐますと、

「友さん、一ついかど」

と云つて、お雪ちゃんが目籠の中から、珊瑚さんごの紅くれなゐのやうな柿の實を一つ取り出して、米友に興へました。

「有り難う」

米友は、腰にさしはさんでゐた手拭を引き出して、今、お雪ちゃんから興へられた珊瑚のやうな柿の實を一ぺん通り見込んでからガブリとかぶりついて齒をあてるとガリ／＼かぢり立てました。

「甘あまいでせう」

「甘あまめえ」

「もう一つあげませう」

「有り難う」

お雪ちゃんはまだ幾つも目籠の中に忍ばせてゐるらしい、それを一度に、幾つかを與へては、當座の口へ持つて行く手順に困るだらうと心配して、わざ／＼一つ宛目籠から出しては米友に與へるものらしい。

「むいて上げませうか」

「いゝよ、いゝよ」

お雪ちゃんは摘草用の切出を目籠の中からさぐり出して、米友の爲に柿の實の皮を剥いてやらうと好意を示すのを、米友はそれには及ばないと云ひました、それはさうです、米友として皮と肉との間のビタミンを惜しんでさうするわけではないが、この珊瑚のやうな小粒の柿の實をお上品に皮を剥いたり、四ツ割にしたりして、しとやかに口中へ運ばせるなんていふことはガラにないのです、米友に柿の實を當がつて置いて、お雪ちゃんが、

「友さん——お前に聞きたいと思つてゐましたが、あのお嬢様といふ方は、一たいあれは

どういふ方のですか」

柿の實で買収して置いて、それから探訪の鎌をかけようといふお雪ちゃんの策略でないことは、わかつてゐるし、米友とても亦、昔嘶の主人公と違つて、柿の實や握飯の一つや二つで買収される男ではないに定つてゐるが、つまり、お雪ちゃんは、此の機會に於て、このあたり靜かな、さうして、後ろには山形雄偉なる膽吹山が傲然として見張りをしてゐる、新開墾地の人無き處で、日頃から尋ねんと欲して尋ね得なかつた腑に落ちない條々を、この人によつて解釋して見たいと念じてゐた希望が偶然こゝへ現はれたよけのものでせう。

「うん——あれはね」

米友の返事は存外素直に出ました、うつかり餘計な質問をかけて、びんしゃんハネつけられないのが見つけものとお雪ちゃんとしても多少危惧してかゝつたのでせうけれども、それが存外物やはらかな手ごたへがあつたものでしたから先づ安心してゐると、

「あれはね、あれは變人だよ」

と米友が、先づ斷案を頭から、たづねた人の眞甲へ卸してしまつたには、お雪ちゃんも

面喰めんくひました。

二七六

「變人へんじん！」

變人へんじんだか、常人じやうじんだか、それを聞くのではない、そんな斷案は人に聞かなくても一見すれば誰でもわかることで、ちよつと付き合つて見さへすれば、お嬢様といふ人が——こゝにお嬢様と呼ぶのは、彼の有野村のお銀様の代名詞であること申すまでもありません——常人でないことだけは、わからずには置かないのですから、そんな無意味な斷案を改めて米友から聞く必要はないのです、だが、相手を呼んで變人だといふ、この返答の主、即ち宇治山田の米友がどれだけ常人に近いのだから、それを考へると多少はおかしくもなるのですが、これはこの返答の結論でも斷案でもなくて、歸納きふたと演繹えんぎとの論鋒を逆につかつたものとして見れば、もう少し希望を残して聞いてゐないわけには行きません。

「うむ——變人だなあ、よつぽど變つてゐるよ、あの娘もあれで家はなか／＼金持なんだといふ話だかなあ」

それもわかつてる、お銀様の背景に偉大なる財閥ではない財力の權威があるといふこと

は不破の關以來、お雪ちやんもとうに心得てゐることなのでした。

「え、え、それはわかつてるのよ——お家は、甲斐こういの國で第一等のお金持だといふこともよくわかつて居ります、わからないのはあの方の——さうですね、わからないと云へば、どこもこゝも皆んな、わたし達の頭ではわかりきれないところばかりで、どこをどうとおたづねしていゝかさへわからないのですけれど——」

「うむ、ありやあね、心が傷きずついてゐるんだ、あれで、もとはいゝ娘むすめだつたんだつてな、姿だつてお前、いゝだらう、あの通り姿もいゝし、心持も鷹揚たうやうで品格があつて、女つぶりとしてもさすが大家に生れただけによ、上々の女つぶりだつたんださうだがな、面かほを傷けられてから、それから心が傷きずいてしまつたんだよ」

「まア」

その時に、米友の返答が漸く、お雪ちやんの壺にはまりさうになつたのです、破題を先きに思ひきり上げてしまつたものですから、つゞく調子の途惑ひがしてゐたのを漸く糸のりさうになつたのでお雪ちやんが喜んで、

二七七

「まア、お可哀さうにね」

「うむ、可哀さうと云へば可哀さうに違えねえかも知れねえが——可哀さうといふよりは我儘の分子が多いね、あれぢやあ可哀さうだと思つても、本當に憫んでやる氣にやなれめえ」

「さうねえ」

「面が傷いたからつて心迄傷けるには及ばねえのさ、人間は面よりは心が大事だからなあ」こゝに至つて折角壺をさまりさうなピントが、平凡至極の俗理に落ちてしまひました、人は面よりは心が大事ですからね、その位見え透いたお世辭は無いが、また醜婦に對する慰めの言葉として、これより以上或は以外の慰め言葉といふものは無い、米友ともあるべき者が、こんな平凡極まる俗理を云ひ出したのは、たゞ、ほんの間投詞の一種類に過ぎないことは分つてゐますから、お雪ちゃんを失望せしめることはなく、

「どうして、あんなにお面にお怪我をなさつたのでせうか」

「うん、そりやあね、火傷をしたんだ、子供の時分に火ですつかり焼き立てたんだね、面

を火で焼かれたといふより、火の中からあの面を拾ひ出したんだね、それで五體は満足なんだが、あの面だけが——處がねえ、お雪ちゃん、お前の前だけれども、女といふものは何のかんのと云ふけれど、つまる處は面だけが身上ぢやねえのかなあ——」

「どうして、米友さん、そんな事を聞くの」

「どうしてたつて、女といふ奴はね、面が悪ければ五體を棒に振つて一生を臺無しにしてしまはなけりやならねえのか、面のよし悪しの外に女といふものゝ身上は無えのかなあ、さうかと云つて、また面がよければいゝで——樂あ出來ねえよ」

「ホ、ホ、ホ」

とお雪ちゃんが、少しおかしくなつて、

「それは、面の大事なことは、女だつて、男だつて——人間でなくつたつて、皆んな大事ぢやありませんか、あのお嬢様がお小さい時分に、そんなむごたらしいお怪我をなすつたから、それならお前さんの云ふ通り、心も傷くのは當り前ぢやありませんか」

「處がねあのお嬢さんのは、たゞ傷いたんぢやねえ、傷いてから、それから僻んだんだ、

僻^{ひな}んでから、それから、さうさなあ、呪^{のろ}ひだなあ、呪^{のろ}ひになつて、憎^{にく}しみになつて復讐^{ふくしう}になつて……今ぢや、手におへなくなつてゐるといふ、抑^{おさ}も^もの起^{おこ}りが火傷^{やけど}の怪我^{けが}といふのが偶然^{ぐうぜん}のあやまちの怪我^{けが}ぢやねえんだ、あの娘^{むすめ}の繼母^{ついではは}といふ人が自分の子^こに家^{いへ}をとらせてえが爲^{ため}にあのお嬢様^{お嬢様}を焼き殺^{ころ}さうとしたといふのが、あの娘^{むすめ}の呪^{のろ}ひと憎^{にく}しみと復讐^{ふくしう}のもとなんだ——もう今となつては誰^{たれ}が何^{なに}と云^いつたつて、どうにも手^てがつけられねえ」

「ですけれども、なか／＼親切^{せいちねつ}で、大腹^{だいふく}中で、さうして物^{もの}わかりがよくて、どこと云^いつて……」

「それだ／＼、お氣^{いき}に入りさへすりやあ、どこまでも、よくして呉^{くれ}れるし、悪い段^{だん}になると人^{ひと}を取り殺^{ころ}さすにや置^おかねえ、で皆^{みな}んな腫物^{はれもの}のやうに、おつかながつてゐるが、おいらなんぞは、ちつとも怖^{こわ}いと思^{おも}はねえ」

「え、え、米友^{みやと}さんは、あのお嬢様^{お嬢様}のお氣^{いき}に入^いりのやうですな、米友^{みやと}さんに限^{かぎ}つて、あのお嬢様^{お嬢様}の前^{まへ}でポン／＼云^いつてもちつとも氣^{いき}におかけなさらないやうですけれど、他の者^{もの}は皆^{みな}んなピリ／＼してゐるやうです」

「何も、おいらは氣^{いき}に入^いられようと思^{おも}つて、おベツかを使^{つか}つてゐるわけぢやねえんだが、皆^{みな}んなお嬢様^{お嬢様}、お嬢様^{お嬢様}つて鬼^{おに}か蛇^{じや}でももあるやうに、おつかなびつくりしてゐるのが、おかしくつてたまらねえや——」

と、米友^{みやと}が得意^{とくい}になつて、少^{すこ}しくせゝら笑^{わら}ひの氣^{いき}持^{もち}です、その時^{とき}お雪^{ゆき}ちゃんが膽吹山^{たんぷきやま}の方^{かた}を向^むいて、

「友^{とも}さん、あそこへお出^ででのほあれはお嬢様^{お嬢様}ぢやありませんか」

お雪^{ゆき}ちゃんが、指^さしたところの林^{はやし}の透間^{すうま}を米友^{みやと}が見^みると、

「あつ——」
と舌^{した}を捲^めきました。

「こつちへおいでなさるやうですな」

「うん」

「わたしは、お目^めにかゝらない方がいゝでせう、さよなら、米友^{みやと}さん」

「まあ、いゝよ——」

「でも、何だか、わたし怖いわ」
 「なに怖いものか——」

林の陰から姿を現したのはお銀様と見られた人の姿ばかりではありません——そのあとに一頭の駄馬を曳いた馬子と、馬子に付き添つて、手代風なのが一人、つまり、この二人一頭が、恐る／＼お銀様のあとを二丈ばかり間隔を置いてつい来る、お銀様は先に立つて、儼然として例の覆面姿で歩みを運びながら、ゆらり／＼とこちらへ向いて練つて来るのです、一筋道ですから、それは當然、この米友があら／＼を切つてゐる現場の處へ通りかゝるに相違ありません。

お雪ちゃんも隠れるともなしに、姿を後ろの林に隠してしまひました。

米友は再び鋏をとつて、黙々として木の根起しに取りかゝります。

人家のない膽吹尾根の原ですから、近いやうでも遠く、姿ははつきりと認めてからでも、あの通り、ゆらり／＼と練つて来るものですからこの場へ來かゝるまでは可なりの時間を要します、お雪ちゃんが、この場を外したのは、特にお銀様といふ人に好意が持てないわ

けではなし、悪意を芽ぐませてゐるといふわけでも無いのですが、何となく氣が置けて、不意に當面に立つことを忌がつたのでせう。

米友には、さうして、お銀様を避けなければならぬ心の引目といふものが少しもないから、引續いて木の根を掘りくづしに取りかゝつてゐるふんのこと。

「友さん」

「何だい」

暫くあつて、尋常一様の應待がはじまりました、いつしかお銀様は米友の丹念な木の根掘りの前に立つてゐる、米友は特に頭をもち上げないで仕事の手をも休めないで、

「何か用かい」
 と答へました。

米友としては、この人が來た爲に、特に仕事の手先まで休ませて、敬意を表さなければならぬ引目を感じるといふことなく、また、最前、お雪ちゃんをあしらつたやうに、ともかくも木の根へ腰を卸して應待するほどの必要を認めなかつたのか、それとも人の來る

度毎に手を休めて株根へ腰をかけてみた日には際限が無いとでも思つたのか、そのままの仕事をしてゐると、

「随分、骨が折れるでせう」

と先方からお世辭を云ひますと、

「なあ——に」

米友は、鼻の先で返事をしながら、傍目もふらずに鍬を使つてゐました。

斯ういふ働きぶりは、二宮尊徳に見られると、非常に賞美される働きぶりなのですが、

米友は、賞美されんが爲に斯うして働いてゐるわけでもなく、お銀様も亦、使用人の勤惰を見るつもりでこゝへ來たものではありませんでした。

「友さん」

「何だえ」

「少し、お前に頼みたいことがある」

その時米友がはじめて鍬の手を休め、腰をのぼして、鍬の柄を腮のところへ當てがつて

まともにお銀様の方に立て直りました。

「何だい、おいらに頼みてえといふのは」

「ちよつと、お使ひに行つて貰ひたい」

「ちえッ——」

と米友が舌打をしました。

それは、頼みを聞いてやらないといふ表情ではありません、折角、精を出して、斯うして木の根を掘つてゐる處へ、小うるさいが、事と次第によつては、頼まれを聞いてやらない限りではないといふ好意を知つてゐるお銀様は、米友の舌打に頓着なく、

「この人達と一緒に、長濱といふところまで行つてもらひたいと思ひます」

「長濱——」

「え、——長濱といふところへ兩替に行つて下さい、友さんはたゞ用心について行つて呉れさへすればいい、萬事はこの人達に頼んであるから」

この時まで、お銀様の後ろ影を踏まざること二丈許の間隔を置いて、鞠躬としてゐた手

代風のと馬子と、それに従ふ極めて従順なる一頭の駄馬とを米友が流し目に見ました。

「つまり、おいらは、たゞ用心棒だけについて行きやいゝんだな」

「さうです、此の人達に萬事は頼んであります、こちらから、お金を持つて行つて、さうして、あちらで、そのお金を此處の土地で使へるお金と取替へて來るだけの仕事なのです、ですけれども、何しろお金のことだから誰れかしつかりした連があつて欲しいと云ひますから、そこで、友さんのことを考へつきました、用心に行つてやつて下さいな」

「あゝ、あゝ、どつちへ廻つてもおいらは用心棒に使はれるやうに出來てるんだ——」

と米友は、やけのやうに云つたが、自ら輕蔑してゐるわけでもなく、頼まれる事を拒絶するわけでもなく、鍬を取り上げて、傍への小流れの處へ行つて手を洗ひ、その序に、ブルと面を二つばかり水で押し撫で、それから腰にたばさんだ手拭を抜き取つて無雜作に拭き立てゝしまふと、もうそれで外行きよそゆの仕度萬端が整つたのです。

一頭の駄馬を中にして、一人の馬子と、馬わきの手代風なものと、それに宇治山田の米友(例の杖槍は附物)が前後して、この一文字道を、長濱街道の方へ行く、その後ろ姿をお銀

様は米友が今まで掘り起してゐる木の株根の傍に立ち盡して、遠く／＼見送つて居りました。

右の一行が山林さんりん叢澤そうたくの陰に見えなくなつてしまふと、廣い荒野あれのほら原の開墾地に、お銀様一人だけの姿です。

この時分は丁度眞晝時まひるどきなので、うらくと小春日和が開墾地の土の臭を煽るやうな日取りでしたけれど、お銀様がくるりと向き直つて膽吹山いぶきやまに對し、ひたと向ひ合ひになつた時分に膽吹山が遽かに山翼さんよくをひろげてお銀様に迫つて來るのを覺えました。

二

そこで、お銀様は膽吹山の挑戦に向つて答へるやうに、ゆらり／＼と右の開墾場から山を押して進んで行きました。

以前、馬を曳いて來た一筋道とはちがつて、今度は、あらく沿ひの林をめぐつて、めぐり盡すと、そこにまた一つの風景が展開されました。

山腹がこゝへ來ると、またカーヴのなだらか味を見せまして、雄偉なる膽吹の山容そのものゝ大觀はさして動かないけれども、裾の趣きは頓に一變して來ました。

右の三合目ばかりの麓は一帶に松柏がこんもりと茂る風情、左へかけて屋の棟が林の中に幾つか點々として見える、そのつゞき、彌高いよたかから姉川あねがはの方へ流れる尾根を後ろにして宏大な屋敷あと、城跡と云つた方がよいかもしれないほどの構へが在ることを、明かに見付けられるやうな地點に立ちました。

ゆらり／＼と山を押しながらい行くお銀様の目は、この宏大なる屋敷あと乃至城あとに向つて、足は爪先あがりになつて行くのであります。

その時、往手ゆくとの林の中から、いかにも遽しく、轉がり出して、こけつまろびつ、此方へ向つて走り來る二つの物體がありました。

不意ではあつたけれど、こちらは驚くほどのことはありません、まさしくこの地方に見る、あたりまへの山稼やまかぎの二人の農夫で、仕事着を着て、駕籠を背負つたなり、これはこの地特有の副業或は正業としての有名な、膽吹山の藥草取やくそうとのこぼれであることは疑ふべく

もありません、たゞ、ちよつと驚かされたのは、斯く慌しく、こけつまろびつ、走る二人のうちの一人が、何か胸に後生大事にかき抱きながら、ものに追はれるものゝやうに走り來る事の體ていが、穩かでないと思はるゝばかりです。

いよ／＼近づいて見ると、その二人は、顔にも手にも、かすり創だらけで、着物も可なり破れ裂けてゐる、妙な恐怖心とはにかみをもつて、お銀様に摺れ違ふ處まで來たが、存外歩調がゆるやかになつて、その胸に後生大事に抱いたものに眼を呉れながら、何かお銀様の好奇に訴へても見たいやうなしなをして、

「いや、はや、大變な目に逢つちまひました」

「どうしたのです」とお銀様も反問せざるを得ませんでした。

「鴛うしの子を、とつつかまへましたよ、鴛うしの子を……」

「鴛うしの子を……」

その胸にかい抱いた處のものを提示するやうに云ひましたから、お銀様が篤とそれを見直すと、それは、ポロ／＼の風呂敷包みにくるんであるとは云へ、中で生きて動く氣色が

むく／＼と見えました。

「お見せなさい」

「この通りですが」

彼等は、自慢半分に、風呂敷の結び目を少しはだけて見せると、もう嘴が黄色くなりかけてゐる一箇の猛禽雛が幼いながらも猛然として、人を射るの眼を光らして、跳り立たうとしてゐます。

「まあ、どこで捕りました」

「硯石の崖のつべんで見つけたから仕事を休んで、捕つかまへましたが、いや、はや、これが爲に一日つぶしてしまつた上、命拾ひでござんした、御覽なさい、この通り、二人共からだ中傷だらけ、高い崖から轉がり落ちてすんでの事に生命を粉にする處でござんしたよ」

「珍しいものですね」

「鶯の子なんぞは、なか／＼捕まへられるもんぢやござんせん、親鳥にでも見つからうも

のなら、今度はあの爪で上の方へ命がけの仕事なんですが、でも、親鳥は留守でござんしてなあ」

「さうして、お前さん達、折角つかまへたこの鳥をこれからどうしようといふの」

「さあ——」

と二人がお銀様から尋ねられて改めて、面を見合はせましたが、

「家へ連れて行つて飼つて置いてえと思ふんですが」

「さうですか、餌には何をやるつもり」

と、お銀様から疊みかけられて、二人はまた面を見合せてしまひ、

「さあ——」

「何を食べさせて置きますか」

「さうだなあ——何をつたつて、こちとらの身分ぢや、特別のものを宛てがふわけにも行きましねえから、粟や稗を、わしらのうちとら並に食べさせて、育てゝ見てえと思つとるんですが」

「それは、いけません」

と、お銀様は二人の農夫の言ひ分を、頭から蹴散らしたものだから、彼等も眼を白黒させ、

「いけませんかねえ」

「鴛といふ鳥は、粟や稗なんぞを食べやしません」

「さうですかね」

「さうだともさ」

「では、何を食べさせたら宜しうござんせうね」

彼等はお銀様に向つて、憐みを乞ふものゝやうに教を仰がんとする體です、彼等は、ただ、此の猛禽の子を見つけ出したといふ興味と、それを捕へることの緊張さから、正當の職業である藥草取の一日の業を抛擲してしまつて、生命がけでこの一羽を巢の中から捕獲して來は來たものゝ、その前後の處分法については、あまり考慮を巡らしてゐなかつたのです、小鳥山鳥を捕まへて來たと同様に當座は何でも有り合せの雜穀を宛てがつて置き、

それから然るべき買手を見つけたら相當にいゝ値になるだらうとの漫然たる豫算だけであつたのが、お銀様の爲に頭からそれを否定されたのですから狼狽しました。

「生きたもので無ければ食べやしません、鴛といふ鳥は鳥の中の王様ですから」

「あ、さ様でございましたなあ、生きた物、生きたものなら何でも宜しうございますか」

「生きたものと云つたて、トカゲやイナゴなんぞを食べさせてもダメですよ、生きたものの肉でなければ鴛の子は育ちません、さし當り兎なんぞがいゝでせう」

「兎の生きた肉を食べさせるのでございますか」

「えゝ毎日——少し大きくなると一匹や二匹では足りないでせう」

「あてことも無え、毎日、兎を二三匹も食ひこまればやたまることだねえ」

と、抱いてた一人が、自分の身でも食ひきられるかのやうに悲鳴をあげました。

「とてもやりきれた話でござらねえ」

二人は、この時、はじめて面を青くしてしまひました。

事實、この二人の者の身上で、一羽の鳥とは云へ禽類の王者の子を手飼ひにしようとは、

分に過ぎた扶持方だと、この時、はじめて觀念せざるを得なくなつたに相違ありません。
 「どうしような、欲しいと云ふ人はねえか知ら、誰れかいゝ買手を見つけて賣つてしまふことだ」

「さうだ」

二人が、斯う云つて、吐息をつくのをお銀様を受取つて。

「お前さん達が、相當の値段でゆづつてくれるなら、わたしが買つて上げてもよろこびます」

「え、奥様が買つて下さる——」

「え、賣つていゝなら、わたしに譲つて下さい」

「どうしような」

「でもなあ——折角、命がけでつかまへて來たもんだからなあ」

彼等は賣りたくもあるし、さうかと云つて、生命がけでつかまへて來たものを、あたり近所へも披露しないでこゝで素氣なく譲り渡してしまふ事にも多大の未練があるらしい。

その煮え切らない返答振りが、お銀様の興を損じたものか、お銀様は駄目を押すことも何もしないで、二人を置き去りにして、ゆらり／＼と前へ進んでしまひました。

取り残された二人、賣らうか賣るまいか、思案に暮れて、まだ茫然と猛禽の子を抱いたまゝ、お銀様の行く後にぼんやりと立つてゐる。お銀様は、ゆらり／＼と、それでも歩くものと歩かないものとの距離ですから、見る／＼相當の隔りが出來たが、此のひやかしのお客様は、柳原河岸で洋服の値切をする客のやうに、番頭の呼び戻しを待つてゐるといふ疵引きも無いと見えてさつぱりと歩み去つて行くのに、未練たつぷりの二人はまだ立ち去りきれないで、馬鹿な面をして、お銀様の後ろ姿を見送つてゐるばかりです。

斯うして、お銀様の姿の小さくなるまで見送つてまだ立ち去りきれなかつた二人が、また改めて面を見合せて、

「ありや、この頃、お城あとの地面が賣れたさうだが——あのお城へ來る奥様ぢやねえか」

「さうかも知れねえ」

「國中一番の大金持だつて話だから」

「さうだ——なら、お氣の變らねえうちに買つてしまつた方がいゝかも知れねえ」
その時、二人共、また逆にころばり震動してお銀様のあとを追ひかけ、

「お——い」

「もうし」

「もうし」

「御新造様——」

「お城あとの奥様」

呼ばれてお銀様が振り返ると、

「もうし、この鳥を幾らで買うておくんなさる」

「幾らでも、お前さん達の欲しいと思ふだけの値をつけて御らん」

「え！」

彼等二人は、またそこで二の句がつけなくさせられてしまひました。

三

そこで、たうとう猛禽の子賣買の路上取引は成立せず遂にお銀様は大手の崩れ門から城跡の中に身を隠してしまひました。

お濠外に残された、二人の農夫は相變らず馬鹿な面をして、ぼんやりと相手を呑んでしまつてけろりとしてゐる門内を見込んでゐるばかりです。

そこで、門内へ入つたお銀様の手は何物も抱へられてゐず、ぼんやりと取り残された二人の男の中の一人の腕に、最初の通り禽王子入りの風呂敷包みが後生大事に抱へられてゐる。一方は賣らうと云つてわざ／＼追ひかけて來、一方は幾らでも糸目なしに買はうと申出でたらしいのに、その取引が行はれずして一方は手ぶらで門内へ入り、一方は、あつげらんとして、物品をストックしてゐる體は少し變です。

併し、その取引は取引として、お銀様が何物も持つことなくして、この城あとの大手の崩れ門から入ると、早くも蔓々として斧の音、鑿の響が傳はります。

邸内は今し、盛んな普請手入れの時と思はれます。

大手の崩れ門から入つたお銀様は鷹揚として、この領土をわが物顔の氣位は更に變りな
いところを以て見れば、この普請、手入れ、斧の音、鑿の音といふものも、他人のもので
はなく、自分の権内によつて動かされてゐる物の音だと聞かないわけには行きませう、
事實——お銀様のこの間中の理想と計畫と實行とが、こゝに斯うして現實に行はるゝの緒
につきつゝあるのです。

と云つてしまつただけでは、地理と方針に多少の無理があり撞着があることを不審とす
る人もありませう。

第一、あの時に不破の關の關守氏の紹介によつて、お銀様が西美濃の地に、可なり廣大
な地所を購入し、岡崎久次郎の助けを求めず、西田天香の指導を仰がずに、こゝへお銀様
獨流の我儘な自由な壓制者と被壓制者の無い、搾取者と被搾取者のない、併しながら、統
制と自給とのある新しき王國を作らうとして、その事をトシ／＼拍子に進行せしめたのは
前に云ふ通りであるが、その土地といふのは、あの時の話であつて見ると、足利尊氏以來

の名家、西美濃の水野家の土地を譲り受けるといふことであつたが、こゝへ来て見ると、
これは見る通り膽吹山の南麓より山腹へかけて——北近江の地になつてゐます——その間
に、どういふ變化があつたのか、或は實地踏査の結果、西美濃の地が何か計畫に不足を感
じてゐる處へ、偶然この北近江の地の話があつて、急に模様變へになつたのか、その邊の事
情はまだわからないが、併し、北近江といつてもこゝは西美濃と地つゞきの地形だから、變
化融通がきいて、現實の示す通り、彼女はこゝに王國の礎を置くことになつたものらしい。
この界限即ち——京極の故城趾上平寺を中心にして左に藤川、右は例の彌高から姉川に
かけての小高い地點、土地の人が稱して「お城趾」と云ふ部分の廣大な地所内をお銀様が
我が物顔に、此の驕慢な歩みぶりを以て觀れば、この邊一帶の地は、まさしく此の人の所
有権内にうつり、さうしてお城あとの中の江北殿と呼ばれてゐる部分の修補と復興が、こ
れから女王の宮殿となり、新理想境の本山とならうとするものであるらしい。
そこへ、ひよつこりと、奥の方から姿を現はした、撫附髮に水色の紋つきの年配の男が
ありました。

「や、お歸りでござつたか」

「はい」

「飛脚の方は滞りなく出立を致させましたから御安心下さい」

「御苦勞様でした」

その撫附髪に水色の紋つきといふのは、見たことのあるやうなと思ふも道理、これぞ、短笛を爐中に焼いて、おのが身の戀ざんげを試みた不破の關屋の關守氏でありました。

その取りしきぶりを見ると、この男は、あれから不破の關屋の關守をやめて、こゝに来て、専らお銀様の事業の番頭役を引受けてゐる氣分は確かであります。

こゝで右の關守氏は、右のわが儘な女王を案内して先きに立ち、お銀様の爲に江北殿の隅々の案内に當ります、その途中説明するところを續り合せて見ると、「江北殿」といふものには、略々、次のやうな歴史があるのです。

「お城あと」は古へ佐々木京極氏のお城あとであり、「江北殿」は其の京極屋形のあつたところだといふ、京極氏は江城六郡の領主で、元弘建武以來の錚々たる大名であり、山陰の

尼子氏の如きもその分家に過ぎない——松の丸の關縁によつて豊臣秀吉の寵遇を受け——と云つた名家のあとであることは、不破の關屋の關守氏が事新しく説明するまでもなく、お銀様の歴史の知識には充分なる豫備がある。

お銀様は、その名家の屋形あとをそつくり自分のものにすることに多少の満足を感じてゐないではない。

不破の關守氏は、屋形の隅々をめぐり、こゝと指し、彼處を叩いて、往昔の居館の構圖を聯想してお銀様に地の理を説明し、略々その要領をつくした後に、お銀様の爲の居館としての一部まで戻つて來ると、そこで、自然に別れて、關守氏は工事の監督の方へ取つて返し、お銀様はお銀様で、この館の中へ没入してしまひました。

四

その前後の時、このお城あとの西南隅のピークの一角にお雪ちゃんがありました。

これは別に離れのやうになつてゐるけれども離れではありません、あちらを本丸とすれ

ば西の出丸でまるになります、廊下傳でまひに渡つて行ける間柄ではあるが、庭を廻つて、縁側えんがはから出入するものが却つて人の勝手になつてゐるのは、その縁から庭先が開けてすばらしいなごめになつてゐるせいせう。

お雪ちゃんも此の縁先へ臺所仕事をもち出してやつてゐることほど、このすばらしい情景をよしとしました、それはその管です、こゝから眺めて御覽なさい、日本第一の大湖、近江の琵琶湖びわこの湖の大半が一目なんです。

自然にその琵琶湖の湖をめぐるところの山河江村までが眼の下に展開されてゐようといふものですから、誰だつてこの縁先を祝福せずには居られない道理、まして風景を愛することを知らぬお雪ちゃんのことです、最前摘み取つて来た野菜類を洗つて、こゝへすくひ上げて来て、俎な、庖丁ばうてい、小桶こづつの類までこの縁先に押し並べて、さうして琵琶湖の大景を前にしてはお料理方を引受けてゐるところです。

お雪ちゃんが庖丁を使つてゐる手を休めてまぶしさうに眼を上げて、また、うつとりとなだらかな膽吹尾根から近江の湖面を眺めやつた時——壺中こちゆうの白骨しろほねの天地から時あつて頭

を出して、日本の脊梁せきりやうであるところの北アルプスの本場ほんばをお雪ちゃんは眺めあかして居りました、それからふと、飛驒ひだの高山たかやまの相應院さうおういんの詫住わぢずまひへ居を移して見ると、眼下に高山の市街を見て胸が開いたほど眼界の廣きを感じましたが、今こゝへ来て見ると、その比較ではありません。

さすがに日本第一の琵琶湖の湖は大きい、周圍七十五里と云つてしまへば、それまでですけれども、斯うして見たところの津々浦々は決して七十里や百里ではないやうに思はれてなりません。

まして、この大湖の岸には飛驒の高山と違つて、日本開闢以來の歴史があり、英雄武將の興亡盛衰があり、美人公子の紅涙があるのです、さすが好學のお雪ちゃんにしても、今直ぐにその歴史と傳記を數へ擧げると堪へないのですけれども、歴史と傳記いしとでんきに彩られてゐる此の山水の形勢が、お雪ちゃんの詩腸を動かさないといふことはありません。

あはたゞしい今日の日が過ぎれば、やがて一々の指呼のあの山水についての人間の残したロマンを訪ねることが、今のお雪ちゃんの生活に清水のやうに湛たへられてゐるのです。

今も、うつとりと、ながめてみると、ふと比良ヶ嶽のこなた、白雲の揺曳する青空に何か二點の黒いものを認めて、それを凝視してゐる間に、見る／＼その一點が擴大されてそれは鵬翼をひろげた大きな鳥、清澄の茂太郎がよろこぶアルバトロスを知らないお雪ちゃんに取つては、まあ、何といふ鳥でせう、あんな大きな鳥は見たことがありません——白骨の山の奥にゐる時だつて見たことのない鳥。

さう思つて、右の一點の鳥影から眼を放すことではありませんでしたが、その鳥は次第次第に近づいて来て、お雪ちゃんの館の上へ来ると、姿が見えなくなりました。

お雪ちゃんにとつては、その大きな鳥は、今し、あの湖水のあちら側の比良ヶ嶽から来て、さうして、自分のゐるこの裏山の膽吹まで、殆んど一息に飛んで来たやうに思はれないではありません。

鳥の姿は斯うしてお雪ちゃんの頭上から膽吹の山に向つて消えてしまつたが、それはそれとして、なほ山水の大景に見惚れてゐると、不意にまた頭上でバサと大きな物音がしたのに驚かされました。

頭上とは云ふけれども、この館の屋根の上よりも高い處です、この屋根の上からピークへかけて押し被ぶさつたやうに枝をひろげた大きな松の木がありました、それは何百年といふ松の木で、直ぐこの庭の中央に根を張つてゐるのですが、幹がすつくと太く高くて、枝が上空に一むらをなしてゐるものですから、遠く望めば靈芝の如く車蓋の如く、庭へ出て見ると、その高い枝ふりは氣持がいゝのですが、この室内では盤踞してゐる太い幹と根元を見るだけで、枝葉は見えないのです。

頭上の物音といふのは、この大きな松の上からバサと起りました。

さうすると、そのあたり一ぱいに影を引くやうに舞ひ下りたものは例の大きな鳥、以前にも大きな鳥に相違ないとお雪ちゃんはながめたのだが、今度のは、本當に、眼の前、咫尺の間に羊角して飛び下つて行くのですから、とやから追ひ卸された鶏を見るほど鮮かにその鳥の形を見ることが出来て、ハツと眼を澄ましました。

「鴛！」

と直覺的にお雪ちゃんはさとりました、鴛の實物をまだこんなに近く見たことのないお

雪ちゃんでしたけれども、鷺でなければこんな大きな鳥はあり得ないといふ直覺と、實物では目のあたりに見ないが、繪では随分見せられつけてゐる猛鷺の玉の姿が、はつきりと眼の前に落ちたのです。

眼をすましてゐると、右の猛鷺は、すさまじい勢で、羽ばたきをして羊角に中空を押し廻り、それから急に翼を旋回してほとんど地上とすれ／＼に舞ひ下り、さうかと思ふとまた相當に高く舞ひ上つては思ひ出したやうに直下して來るかと思へば輪なりになつて舞つてゐる、その舉動が何となしに尋常でないことを想はせられてなりません。

右の大鷺は、一旦膽吹のとまり處へついたが、何をか見つけたものだから、また飛び戻つて來たのだ、何かこの下の平原で見つけものをしたものだから、それを捕りに來たものらしい。

お雪ちゃんはさう思つて鳥の舉動を見守ると、全く物狂はしいやうに横轉、逆轉、旋回、飛上、飛下を試みてゐるのがいよ／＼只事とは思はれないのです。

恐しい鳥、鳥の中の王——あの勢で人間をさへ攫つて行くことがある、何をあの鳥が

地上に見つけ出したのだらう、覘はれたものこそ災難——

お雪ちゃんはさう思つて、下の原野を見卸したけれど、鳥は中空にあるから見得られるものゝ、獲物がこの眼の下一ぱいの原野のいづれにあるといふことなどが認められよう筈がありません。

鷺が人間を攫ふといふことはいつも聞いてゐる——もし、不幸な人間の子が——もしや、米友さん——あの人は小さいから、もしや、子供と間違へられて、あの荒鷺の餌食に覘はれてゐるやうなことはないか、あゝして、一心に木の根を掘つてゐる處を後ろから不意にあの大鷺の鋭い爪を立てられるやうなことはないか、鷺が大人を攫つたといふ話はまだ聞かないが、子供を攫つたといふことは極めてよく聞いてゐる、米友さんは柄が小さいから鳥の眼には子供と見られない限りもない——お雪ちゃんは、取敢ず、米友の爲に餘計なことまで心配になつてわざ／＼縁を下りて下駄をつゝかけて、こゝから左よれば、やはり視野の一部分の中にはいるさいぜん米友が、あらくを切つてゐた開墾地のあたりを見透しましたけれども、それらしい人の影が認められませんでした。

それにも拘らず、大鷲の物狂はしさはいよく一層でありました。

三〇八

單に獲物を覘ふならば、あんなに騒ぐ筈はない、猛禽の中の王ともあるべき身が、兎や小鳥をあさるのに、あんなに仰々しい振舞をする筈はないと、お雪ちゃんは案ぜられて來ました。

地上を探しあぐねたやうに、この猛禽は今度は一文字に羽をのして彌高から春昭の方の人里へ向けて飛び狂つて行くやうでしたが、そのうちに姿が見えなくなつたのは、遠く雲際に飛び去つたわけではなく、近く膽吹の山中へ舞ひ戻つたわけでもなく、何處を何處と見定めたわけではないが、お雪ちゃんの眼にはたしかにあの人里の中へ大鷲が飛び下りてしまつたと思はずには居られません。

さうだとすれば、あの勢で、村里へ舞ひ下りたとすれば、村里一帯の不安が思ひやられる！

一匹の狼、一頭の猪でさへ村が荒される、まして肉を裂くに足る鋭い爪と血を吸ふことに慣れたあの獍猛な勢と、それから千里を走る翼を備へた、猛禽の王様に侵入されてはた

まらない——何か、あの不安を村の人に知らしてやる手術は無いものか。

お雪ちゃんは、そんな事を考へながら、再び無事にあの猛禽が中空高く舞ひ上り飛び戻つて來ることを望んでゐたがどうしたものか、さつぱりその音沙汰がありません。

お雪ちゃんは、村里の安否も氣になるが、猛禽の消息も氣にかゝつてなりません。

そんなことまで思ひ惑うてゐる處へ庭から人の足音がして、はつと思ふ間に、それが例によつての覆面のお銀様であることを認めました。

五

お雪ちゃんは、お銀様の姿を見た瞬間に居すまひを直して了ひました、無論、釋をとつて、極めていんぎんに挨拶をしました。

「こゝはよい景色でございますね」とお銀様がいふ。

「はい、お館のうちに、景色はこゝが一番よろしうございます」

「この松も、いゝ松ではありませんか」

「全く、見事な松でございます」

「あなたは、こゝから見た琵琶湖附近の名所々々を御存じですか」

「否、え——まだ、随分昔からの名所がございますさうですけれども、調べて見る暇もございません、教へて下さる方もございません」

「二人で少し調べて見ませうか」

「はい」

「お仕事が忙しいの」

「否、え——どうでもよろしい仕事なのでございます」

「では、もう少しこちらへいらつしやいな」

少しでも多くの視野を展げられるやうに、お銀様は、お雪ちゃんを自分の身に近く招き寄せましたから、お雪ちゃんはそのまゝ縁先にのり寄ると、

「こらんなさい、あの比良ヶ嶽から南へ比叡山の四明ヶ嶽——その下が坂下、唐崎、三井

寺——七景は雲に隠れて三井の鐘と云ひますが、こゝではその鐘も聞えません、唐崎の松は花より朧にてとありますが、その松もこゝでは朧にさへ見えはしません」

「けれどもお嬢様、そのつもりで、斯うして眺めて居りますと、三井寺の鐘が耳許に響き、唐崎の松が墨繪のやうに浮いて出る氣持が致すではございませんか」

「さう思へばさうですけれども、物足りない思ひもします」

「一日、ゆつくり、お伴をしてあの邊を見て歩きたいものでございます」

「そのうちに、一緒に出かけませう、こちらの岸から船を浮べて、船でゆつくり八景めぐりをしたいものです」

「お船でしたら、それに越したことはございません、お伴をさせていたゞきたいものでございます」

「そんなに遠くないうちに、その暇が得られるだらうと思ひます」

「楽しみにしてお待ち申して居ります」

「それから、お雪さん——」

とお銀様が改まつて、呼びかけたものですから、——お銀様はお雪ちゃんと呼ばずお雪さんと呼ぶのです——そこでお雪ちゃんが、

「何でございますか、お嬢様」

「あなたにまた少し、御面倒を願はなければならぬ事がございます、實は、あなたにこれから勘定方を引受けていただき度いと思ふのでございます、斯うして工事に取るかゝつて居りますと、何かと入目を取りに来る者がありまして、一々わたし一人で拂ひ渡しをしたり、受取をやりとりしたりすることは容易ではありませんから、その仕事を一つあなたに引受けていただき度いと思ひます、つまり、この屋敷の勘定方、會計方をあなたにお頼みしたいのですが」

「まあ、そんな大役がわたしにとまりませうかしら」

「否——たゞ、お金を少し預つていただけ、その出入りを記して置いていただけ宜しいのです、さうして下さると、わたしが助ります、わたしは又關守さんを相手に、この古館を新しくするいろ／＼の設計や田畑の開墾や人の出入などに氣を配らなければなりま

せんから」

「随分お忙しくつていらつしやいませう、それならば、わたしでお役にたちますことならば、一生懸命おつとめを致しませう、でも、お金の會計方はわたしなんぞでは、あんまり大役過ぎるかと思ひます」

「否——慣れゝばやさしいことです、たゞお金を扱つてゐることが悪い人に知られるとそれを狙ふものが出来て來ますから、そのつもりで、お金の番人はあの米友さんにでも頼んで置いて、あなたは人に拂ひ渡してやることゝ人から受取ることだけをおやり下さつてそれを一々帳面につけていただきさへすれば宜いと思ひます」

「さういふわけでございましたなら、米友さんを相手に——御用をおつとめ致して見ませう」

「有り難う——では早速お頼みませう、こゝへ少し持つて來たのですが」

と云つてお銀様は抱へて來た小箱の包みを解いて、蓋を開けながら、

「これから、この土地を拓くについては、相當にお金も要ることゝおもひましたから、今

日飛脚を甲州へ立て、貰つてお金を取寄せることにしました。取敢ず道中の路用のうちを、お角さんといふ人から受取つて當座の費用に宛てることにしましたが、どうも、土地土地で、お金が變るものですから、兩替をしなければなりません、それでまた、たつた今、あの長濱といふ處へ、使を頼んでお金の兩替をして貰ふことにしましたから、そのうちこまかいのも參るでせう、取敢ず、このお金を預つて下さい」

と云つて、お銀様が無難作に箱の中から摘み出したのは幾片かの小判でありました。

「甲州を立つ時に、父がわたしの爲に路用だと云つて、あのお角さんといふ人に預けたお金を、半分は手附として、この土地の持主に渡しました、その残りをわたしが此方へ來る時にお角さんが渡して呉れました、それをまた三つに分けてあの人にも持たせてやりました、その一つは今長濱へ兩替にやりました、残る一部がこれなのです——數へて見ると小判が五十二枚だけありました」

「まあそんな大金……」

お雪ちゃんは、思はず眼を見はりました、お雪ちゃんとしても、單に金錢に眼がくらん

だといふわけではなく、あんまりお銀様の金扱ひが大まかなのに、ちよつと驚かされたのです。

五十二枚の小判を、無難作に他人の眼の前へ持つて來て、餘り物でも處分するやうな扱ひ方が、お雪ちゃんには意外に思はれてたまらなかつたのです、お雪ちゃんとしても、さう卑しい生い立ちではないから、千萬金を見せられようと、時と場合によつては、心を動かすやうなさもしい人柄ではないけれども、お銀様のあまりざつとざつとした扱ひ振りに吞まれたやうな形で見ると、お銀様が、

「否え、大金といふほどではありませんけれども、それでも、拂ひ渡しや、買物に、これでは扱ひかねることがありますから、別に五十二枚だけ、今申しました通り長濱へ兩替にやりましたから、そのうちに戻りませう、小出しは小出しとして置いて、これはまたこれとしてお預り下さい」

「では……お引受け致しました以上は、ともかくも米友さんの歸るまでお預りして置きまして」

「どうぞ、さうして下さい」

「念の爲に一應おあらためを願ひます」

「はい——」

と云つて、お銀様は悪びれずに、自身その箱の中から小判を取り出して一々お雪ちゃん
の眼の前で數を讀み、

「この通り五十二枚ございます」

「確に五十二枚——さうしてお金につもれば幾らになるのでございませうか」

「ホ、ホ、ホ」

とお銀様が珍しく軽く笑ひながら、

「お金に積ればと云つても、これがそのお金そのものぢやございませんか」

「まあ、本當に左様でございました、小判五十二枚ですから、五十二兩でございますね」

「え、一枚を一兩と覚えてみらつしつていたよきまして、その値段は、小判のたちによつて違ふのでございます」

「そのやうに聞いて居りましたが、この小判は……」

「これは、たちのよい方の小判なのです、御覽なさい、享保小判と申しまして、これこの一枚の重さが四匁七分あるのです」

と云つて、お銀様は小判の一片ひとひらを指の上のせて、目分量を試みるかのやうに、お雪ちゃんゆきちゃんの眼の前に示し、

「一枚の重さが四匁七分ありますが、それがみんな金といふわけではありません、そのうちの六分三毛といふのが他の混まぜものなのです、純金ばかりでは軟かくつてお金になりませんから——さうして、この一兩を小こ銭ぜにに替へますと六貫五百文程になるのです」

と、お銀様が説明しました、つまり一兩の享保小判の全體の重さは四匁七分あつて、混ぜ物が六分三毛あるから差引そのうち正味の純金分が四匁七厘だから、これを銀ぎんに換へかへ小粒こつぶに換へ、錢ぜにに換へたら幾ら——西曆一九三三年前後、世界各國が金の偏在と缺乏に苦んでそれ／＼國家が金の輸出を禁止し、日本の國に於ても、公定相場が持ちきれなくなり、その一匁市價が十圓まで飛び上つたとして右の享保小判の一枚は、四十七圓に相當するから

五十二枚は二千四百四十圓ばかりの勘定となる——それだけの金を旅費の一部分として無雑作に目の前に出されたことに於て、今更お雪ちゃんもこの人の實家といふものが底の知れない程の長者であることを思はせられずにはゐないと共に、さうかと云つて、それを湯水塵芥たうぢりやくの如く扱ふわけでもなく、量目の存するところは量目として説明し、換算くわんさんの目算は換算の目算としての相當の常識——寧ろ、富に於てはこれと比較にならない自分達の頭よりも遙かに細かい計算力を持つてゐる容子に於て、お雪ちゃんは、このお嬢様は金銀の中に生れて來たが、金銀そのものゝ價値を知らない、お嬢様育ちの娘ではないといふことの頭の働きを見て取ることが出來ました。

昔、三井みつゐであつたか、鴻池かうちであつたかのお嬢様が——ある時、述懐じゆくわいして云ふことには、「世間の人がお金が無くつて困ると口癖に云ひやるけれど、幾らお金が無いといひやる人でも箕みに一杯や二杯は持つてゐる事だらう」と。

このお嬢様は、さう云つた種類のノホ、ンなお嬢様とは全然違ふといふことをお雪ちゃんにはちらと思ひ出して見ました、事實この目の前にゐるお嬢様のお家といふのは、三井、

鴻池、奥州の本間と云つたやうな家筋に優るとも劣らない長者でおありなされるにしても、このお嬢様こそは、鷹揚な處はドコまでも鷹揚ではあり得べしとも、細かい處は充分細かく眼が届き頭が働く人柄だと思はずには居られません、それが却つて、この際、お雪ちゃんの心を頼もしいものになりました、世間知らずのお嬢様から、無算當に大金を預かるといふことよりも、知るところは知り盡してゐる人から、情を明けて頼まれる方が頼まれ心がよい——といふことをお雪ちゃんが感じました。

さういふことをお雪ちゃんが感じながら、二人さし向つて話してゐるうちに、眼下の原野の中の遠方から、轟然として一發の鐵砲の音が聞えると共に、森の中から、人が蟻の子のやうにこぼれ出したのを、二人共殆んど同時に認めました。

「何でせう」

と、まづ不審を打つたのはお銀様でした。

「どうでございます、何か騒がしい容子でございます」

とお雪ちゃんも相鍵を打ちました。

やゝ遠く、鐵砲の音だけでしたら、二人もそんなに不審がる事はなかつたでせうが、人の子が蟻のやうに散亂したものですから、それで、何か相當に穩かならざることが起つたのではないかしらと、多少不安からせる空氣があつたのであります。

その時、また、さきほど、此の場へお銀様が訪づれない以前——お雪ちゃん一人で空想と實景にあこがれてゐる時分に、お雪ちゃんの印象をつかまへた、あの大きな鳥——アルパトロスを知らない限り、日本の本土で見える最も大きな鳥であり、強さに於ては鳥類の世界を通じての王者であるところの、鶯わしの姿が、突然またあの森の中から見えて出して來ました。

この大きなさうして強い鳥が、あの村里の森の中に、今まで潛行せんかうしてゐたと見えるが、今し、パツと舞ひ上つて、空中に姿を現はして見ると、また急に低く飛び下り、低く飛び下つたかを見ると、また、やゝ高く舞ひ上つたのです、その途端にパン／＼と鐵砲の音が續けさまに、また聞え、同時に蟻の子を散らしたやうな人が、あちらこちらへ去り飛ぶのを逐目にハッキリと二人が認めました。

そこで、お雪ちゃんには、はつきりと、それだけの光景のおこりがわかりました、あゝ、さうだ、最初の大きな鶯が人里に下つたものだから、それを認めて、村人が騒ぎ出したのだ、だが、それは大きな鶯を見てゐないこのお銀様には合點の行かない事だらうと、

「わかりました、わかりました、お銀様、わたくしが先程こゝで見て居りますと、あの比良ヶ岳の方から一羽の大きな鶯が参りまして、それが、この膽吹の上から館やかたの屋根の上を飛び廻つて居りましたが、やがてあの村へ飛び下りたのは、たつた今のごさいます、それを村の人が見つけて捕まへようとして騒いでゐるのでございませう」

「あゝ、さうですか、あの大きな鳥は鶯でございませうか」
とお銀様も、またその鳥の姿を見てゐると、或は高く、或は低く、村里と人の頭上に上つり降りつして、その邊を去らない鳥の舉動をいよ／＼不審だと思はないわけには行きません。

幾ら鳥類の王、無双の猛禽にして見たところが人類の威嚇を怖れないといふ筈はない、まして、その様式の程度は知らない、種々鳥時代の遺物にしてからが、鳥おどしの價値だ

けは充分につとまる、あの鐵砲といふものゝ音を聞いて走らない鳥はない筈なのに、あの鳥は自家の勇力を恃たかんでか、高く低くあの通りに入れて人里と人の影を怖れない、見やうによつては人間と相争ふかの如く、また人間を憤いかるかの如く、また人間を擲なげかきの如く、つかず離れずに空と地とで對峙たいじしてゐるのであります、人間の騒いでゐることは猛禽の襲來に備へる意味から云つても同時にこれを捕へんとする慾望から云つても當然のやうなものだが、それと對抗して去らない鳥の舉動こそ解せない——と眉をひそめた途端に、お銀様がハッと氣のついた事がありました。

それは、先刻開墾地方面をゆらり／＼と歩いてゐた時分に、バツタリ行き合つて、それから取引の開始となつて、押しつ押しされつ、それつきりになつたあの二人の山狩が、つかまへた鷺の子の事でありました。

それが思ひ浮ぶと、お銀様は覆面の中で三二度うなづいて、

「わかりました、わかりました」

と、さき程、お雪ちゃん云つた通りに鸚鵡あひむがへ返しをして、

「あの鳥が村へ下りたのは、自分の子を取り戻したい爲に下りたのでございます」

「どうして、そんな事がおわかりになりますか」

と、その以後ばかりを知つて以前を知らないお雪ちゃんには、以後を知らず以前を體驗してゐるお銀様の云ふことが、全くわかりませんでしたけれど、實はこの場合二人の實見を合せて、はじめて安全な全體觀が出来上るのであります、お銀様がそれを説明することは雜作もない事でした。

「それはね、御覽なざる通り、あの大きな鳥は、村里の上を離れないで、村人と追ひつ追はれつしてゐるでせう、珍しく鳥の中の王様が人里へ現はれたものだから、村の人の騒ぐのは無理はないが、鐵砲の音にも驚かずにあゝして、鳥が離れないのは、あれは村の人に自分の子を取られたから、それを取戻さうとして覘つてゐるのです、わたしは先程村の人がこの鷺の子を取つたのを知つてゐますから、あの大鷺の心持がよくわかります」

「あ、さ様でございましたの、それで自分の子を取り戻したいが爲に、あゝして鐵砲の音にも人の數にも怖れないで、戦つてゐるのでございますね」

二人は、その出来事に、すっかり解纏がついて了ふと同時に、それをながむる興味も一層高潮して來ました。

三二四

人と鳥との争ひ——それはいづれが勝つかといふことの興味よりも、お雪ちゃんの心では、あれほどの執着しつやくだから返してやればよいのに——捕へた子供を離してやりさへすれば猛禽も満足して歸ることです。ところが、あゝなつては人間も慾だから捕へた子を返してやらないのみか飛び込んで來た親をまで捕へずには置くまいとして意氣込んでゐるのだ。

ですけれども、この場合、親鷲に勝利を得させてやりたい——やうな心持が、お雪ちゃんの胸の中では繰返し々々念ぜられてならないのに、覆面のお銀様は冷々として、人鳥、いづれが勝たうとも負けようとも、我れ關せずと云つたやうな素振りでながめてゐるのが物足りない。

さうしてゐるうちに、鐵砲は引つゞいてパン／＼となり、中には弓矢を持ち出したり、長竿を擔ぎ出したりするものまで見えました。鳥の姿がまた森かげに隠れて見えなくな

つて了ひました。併し、村人がまだ騒がしい氣分を以て走り廻り、立ち惑うてゐる處を見て見ると、大鷲を射留めたものでも捕縛したものでもないことはよくわかります。

斯うして、やゝ長いこと恐らくは何とか解決のつくまでは二人はこの場の光景から眼を放せない事になつてゐると、けた／＼と、前庭の木戸口から人の息せき切つた發音があつて、

「申し上げます、只今、村の人が大勢これへ押しかけて參りまして、生捕つた鷲の子を幾らでもいゝから、こちらの奥様に買つていただきたい、買つていただけなければ暫く預つていたゞき度いなんぞと申して、これへ持つて參りました、いかゞ取り計ひませうか」

この報告を聞くと、お銀様が、だから云はないこつちやない——といひたさうな表情で立ち上り、

「今、そちらへ參ります」

六

お銀様が急に立ち去つた後、お雪ちゃんは、何かとそぐはない氣持で、ぼんやりしてゐると後ろから、

「お雪ちゃん——」

「おや、辨信さんぢやありません、辨信さん、あなたもあんまりですね」

とお雪ちゃんは、振り返つて辨信の姿を見るが早いか、斯う云つて怨じかけたほど、事が急促の思ひになりました。

「はい」

抜からぬ面で見つてゐる辨信の姿を改めて見直すと、お雪ちゃんが、こみ上げて来るやうな悲痛と、それから何と云つていゝか知れない、昔の感じに隔りかけられました。

それは、その昔、辨信が自分の家の甲州上野原の月見寺で、机龍之助に斬られた時のあの表情と少しも變らない、やつれきつた姿であるのを見ると、この人は、斬られて來たのではないかと、胸を打たれるやうな心になると共に、そのあたりの光景までが、辨信が傳つて來た廊下づたへの構へまでが、あの時の自分の家の寺の住居そつくりが、こゝへ移さ

れたのではないかと、お雪ちゃんは一時、くらくくと眼眩がするやうになつて、

「辨信さん、お前さんはまあ」

と云つたきりです。

「お雪ちゃん、どうですか、この新しい村の新しい御殿の住み心地は……」

と云ひかけた辨信の調子は、少しも變つたものではありませんでした、無論斬られてなんぞ來たわけではなく、これがいつもの調子の辨信なのですが、この際のこと、何だか不意に出でたやうなものですから、お雪ちゃんの神経が少し昂奮し過ぎてゐたのでせう。

「大へん、ようござんすね、宜しうござんすけれども辨信さん……」

お雪ちゃんは、取敢ず問ひに答へて置いてから、引續いて、やつぱり怨言の筋を引くことを如何とも致し難く、疊みかけて詰問でもするやうに、

「あなたといふ人も、あんまりぢやありませんか、わたしをこんな處へまで連れて來て——連れて來て下さつた御親切も、斯うして何とは知らなければ、住み心地は悪いとは思へないところまで、連れて來て下さつた御親切は有り難いですが、わたしの逢はうと

してゐる人に、ちつとも會はせて下さらないぢやありませんか」

「あゝ、その事ですか」

「そのことですかぢやありません、美濃の國の不破の關へ来て、鈴慕の曲をまで聞かせて下さつておきながら、それからあとはどうしたのです、あなたはどうしてわたしの會ひたい人に會せて下さらないのですか、——鈴慕が開ける位のところにあるのですから、あなたさへ會せてやらうとお思ひになれば、今日すぐにでも會へるに違ひないと思ひますのに、それを、あなたは會はせて下さらない、たゞ、會はせて下さらないだけならいゝけれども、もしかして、あなたは、わたしをあの人から遠ざけようとなさるのぢやないかしら、それも、あなた一風流の親切から出でゝさうなさる、意地悪でなさるのではないことは、よくわかつてゐますけれども、そんなにまで、わたしといふものが、たよりない、意氣地ない人なのでせうか、不破の關で鈴慕の曲を遠音に聞いて、それから、わたしはあなたの呼びにいらつしやるのを待ちきれませんから、自分で行つて見ますと、鈴慕の主はゐないし、關守さんも何だか空とぼけておいでになつて、わたしの聞きたいわけを答へては下さいま

せん、たゞあの紅々と燃えた爐の中に、尺八の燃え残りだけが無残に残つて居りました、それから、わからないお嬢様が、思ひ通りの世界を作つて見たいと仰言つて此處へ土地をお求めになり、住居を建てるから、わたしも仲間に入れとおつしやる、それはよい事だと辨信さん、あなたも賛成なさいますから、あなたを信じて、此處へ斯うして三日目になりますけれど……」

こゝでも、お雪ちゃんが、辨信の株を奪つて一息にこれだけの恨みつらみを述べたてゝしまひました。

「よくわかります、お雪ちゃんの恐み言がよくわかります」

と辨信の方が却つてさつぱりした短句調であしらふものですから、お雪ちゃんに、いよいよ満足の與へられよう筈もありますまい。

「わかります／＼だけでは困るぢやありませんか、わかつたら、わかつたやうにして下さらなければ……」

「お雪ちゃん、そんなに云ふものではありません、會へる時が來ればいつでも會へますよ、

「體お雪ちゃんは、何の爲にそんなに會ひたがるのですか」

「そんな事、わかつてらぢやありませんか」

「わたしには、ちつともわかりません」

「忌な辨信さん——それがわかつてゐらつしやればこそ、お前さんだつてわざ／＼飛驒の高山から、美濃の不破の關までわたしを連れて来て下すつたぢやありませんか」

「いゝえ、さういふわけぢやありません、わたしの耳に鈴慕の音が聞えて、こちらへこちらへと導くものですから、その音色を傳つて來ると、ついで／＼不破の關まで來てしまつたのです」

「あら——あんな事云つて、辨信さんといふ人も、擲擲ひます、こんな人の悪い方ぢやないと思ひました」

「否え、わたしは、あなたをからかひは致しませんし、また別段あなたに對して人の悪い行ひをしたとも思ひません」

お雪ちゃんは、いよく辨信の答辯ぶりに平らかではありません。

「辨信さんのなさることは、辨信さんだけの世界にはよくおわかりなのでせうが、わたしは短笛の音色だけを聞き、その笛の管の燃えさしだけを見る爲に來たのではありません、あなたと二人、裸、はだし同様で美濃の國から飛んで來ました、今思へばどうして、こんなかよわい二人だけで、あの旅が出來たのか夢の様に思はれるばかりです、それほどの思ひをして來たのに、來て見れば、その遠音を聞かせたゞけの思はせぶり……萬事をうやむやにしてゐる辨信さんのズルイのを怨むのは、怨む方が無理なんでせうか」

「ですからね、お雪ちゃん、あなたもわたしも鈴慕の音色にあこがれて來たのだといふことは、今もクド／＼と申した通りなのです、併し、不幸にして二人の聞かうとしてゐた鈴慕は聞くことが出來ないのみか、音色を鈴慕に借りて内容精神はやつぱり墮地獄の音でありました、それ故に、わたしはあれを聞かないやうに、せめて、あなたにそれを聞かせたくないやうにとつとめてゐる心は、今もあの時も少しも變りありません——それですから、今のわたしと致しましては、お雪ちゃんに怨ませうとも、ズルイといはれませうとも、コスイと云はれませうとも、うやむやと云はれませうとも、これより外に何とも致し方が

無いのでございます、ですから、これはさうと致しまして、お雪ちゃん、わたくしはこれから、一つお山巡りをして参りますから、少しの間待つてゐて下さい、お山巡りと申しますのは、實は、わたくしも縁あつてこの膽吹山の麓を汚しながらまだお山の神様へ御挨拶にもお禮にも出て居りませんから、これから一つ……参詣をしてまゐりたいと思ふのです、お聞にもなりましたでせうが、この膽吹山と申します山は、日本七高山のその一つに數へられて居ります名山でございます、高さから申しますと、先ほどあなた方がおいでになつた焼ヶ嶽や穂高、神高坂、大天井の方の山々とは比較になりませんけれども、あの地方は、山そのものも高い事は高うございますけれども、地盤がまたおのづから高いだけ、こちら方面よりは標高が高まつて居りますものでございますから、山容そのものだけの高さをもつていたしますと、この膽吹山とても随分あちらの高山峻嶺に劣りはしないと、斯う考へますからわたくしも、その心構へで参詣してまゐりたいと思ひます、案内者でございますか、私としましては別段、案内者は頼みませんが、山に順つてまゐりさへすれば、あふないことはなからうと存じます、登山路の道筋だけはよく承つて置きました、これ

から参りますと、程なく女一権現といふのがあるさうでございます、それを過ぎますと、北に彌勒菩薩のお堂がございまして、あの邊には一帶に松柏の類が繁茂致し、膽吹名代の藥草のございしますのも、その邊であると伺ひました、それから登りますと三所権現があり、それをまた十町登りますと鞠場といふのへ出ると承りました、その鞠場より上へは女人は登ることを止められてあるさうでございます、それからは巖根こどしき山坂を越えて、絶頂が彌勒といふ處、そこへ行くと、時ならぬ風は漂忽として起り、且止まり、人の膽を冷すさうでございますが、一體にこの膽吹のお山は氣象の變化の劇しい山ださうでございます、殊に怖るべきは、頂上の疾風だなんと人様が申しますから、その邊も随分用心を致しまして、さうして頂上の彌勒菩薩に御参詣を致して御挨拶を申上げ——それから歸りには、出來ますことならば、別の道をとつて西に降り、伊吹神社へ参詣——膽吹明神と申しますのは風水龍王が御神體であらせられ、その昔、飛行上人が此の山に多年の間住んで居りまして、開基を致されたと承りました、飛行上人と申すのは、いづれのお生れか存じませんが、飛行自在の神通力を得て、御身の輕きこと三鉢——とございますが、三鉢

の銖と申しますのは、三匁でございませうか、三十匁でございませうか——まだ、私もよく取調べて居りませんが、身の軽いといふ事を申しますと、わたくしも至つて身輕の瘦法師でございしますが、飛行自在の神通力などは及びもない事でございす故に、つとめて自重を致しまして、山險と氣象に逆らはず、神妙に登山を致し、愼密に下山を致して參るつもりでございす。本來、目が見えませんが、山へ登りましても人寰の展望を恣に致さうとの慾望もござりませず、山草、藥草の珍しきを愛で、手折らうとの道草もござりませぬ、たゞ一心に神佛を念じ、他念なく登つて下るまででございます。それ故、今晚のうちには、無事に戻つて參るつもりでございすから御安心下さいまし、もしまた、途中、天變地異の災難がございましたら、心靜かに臨機の避難をいたしまして災難をやり過して、それから徐ろに下りてまゐります、いかに、疾風暴雨といたしましても、一晝夜の間威力を續けてゐるといふ例は少なうございすから、その間をどこぞに避難して居ります間の時間——それを御考慮に入れて置いていたゞきましても、明朝までには間違ひなく戻つて參ります、その外には、決して御心配になるほどのおそれはございすまい、あ

つ、さうでございすか、なる程、昔、日本武尊がこのお山で大蛇にお逢ひになつて、それが爲に御壽命をお縮め遊ばされたといふ歴史の真相、あれは怖れ多いこととございすたね、山神が化して大蛇となり、悪氣を以て武尊をお苦しめ奉つたといふ歴史、これは眞實でござりませうが、今日はさ様な悪氣は盡く消滅してゐるに相違ござりませぬ、でも、毒蛇はゐない代りに盜賊が——あゝ成程、それも一應は尤もなお心づかひでございす、この膽吹山や伊勢の鈴鹿山が名ある盜賊の住みかであつたことも、も早や過ぎ去つた昔のこととございす、今日では誰もさ様な事を噂にさへ申しませぬ、たゞ恐るべきは山路の險と氣象の變化、それだけなんでございませう、では、わたくしはこれから出かけて參ります」

こゝまで、辨信は喋りまくつて、また靜かに、風のやうに廊下先から消えてしまつたのを、お雪ちゃんは、とゞめようとして、つかまへどころのないのに苦しみました。

辨信が歸ると間もなく天候が遽に變つて來ました。

後ろの膽吹山が大きな鳴を立てたかと思ふと、さつと吹き卸す風が千丈の枯葉を捲いて原も村も里も、一度に裏葉を返す秋の色を見せました。

と見れば、比良ヶ岳、比叡山の上に、眞黒な雲がかぶさり、さしも晴やかに光つてゐた琵琶湖の湖面が淡墨を流したやうに黝ずんで來たのを認めました。

麓の方で、さしも物騒であつた鳥の形も人の氣配も、いつの間にかすつかり消えてしまつて、膽吹山おろしだけが、自分の頭の上でゴーツと鳴るのを聞くばかりです。

餘りの急激な天候の變化に、お雪ちゃんは悲しいやうな怖しいやうな氣分に襲はれてゐると、つゞいて山おろしが庭先の松の梢を傳つて、見ゆる限りの野も山もどよめき渡ると見る／＼南近江から、伊勢と美濃へかけての天地が暗くなつて行くのです。

うしろの膽吹の山が息をついては吐き、吐いてはつくやうに山鳴をつゞけてゐる、その度毎に野分の大風が吹き出されるやうな響きを聞くと、お雪ちゃんは、どうしても、さきのあの大鷲がこの山へ舞ひ戻つて、その羽風が斯うして煽るのだと思はれてなりません。

不在の間に子を捕られて、それを取戻さうとつとめたけれども、その甲斐がない爲に、親鷲が憤つて、山の上で羽風を鳴す爲に、急に天候が斯う變つて風が吹きすさんで來たものやうにお雪ちゃんには受取れてなりませんでした。

それにしても、この不穩な天候、もはや斯うして、暢氣な縁先の仕事は出來ないものですから、委細をとりまとめて室内へ持込みながら、あゝ、いやな風、自分の不快よりも、これから袂をひるがへして、あの膽吹の山の頂を極めようとする辨信の爲に悪いさい先だと思はずには居られません。

お雪ちゃんは障子を締め切つて、風を防ぎながら、辨信さんの爲に、この風が早くやむように、餘り強くないやうにと心配してゐると、その心配が漸く昂じて來てなりません、取越し苦勞はするなと、特に戒めて行かれたにかゝはらず、この時はまた辨信法師の山登りが一層氣がよりになつてたまらないのみならず、風水盜賊の難の外にまた一つ、もしかしてあの辨信さんが、この山上に棲む大鷲にさらはれてしまひはしないだらうかといふ懸念さへ起つて不安に堪へられなくなりました。

「辨信さんも辨信さんです——何もわたし達さへ御参詣をしない先に、いくら身軽だからと云つて、たつた一人でお山登りなんぞをしないで宜いではないか」

この信友も亦、自分に氣をもませる存在の一つであるやうに思ひ案じて見ました。

八

その心遣ひが、その夜、枕についてからのお雪ちゃんを苦しいものになりました。

膽吹山から吹き卸す大風の中に、袖を飄ひらして、ひたすらに山路を登る辨信の姿を、いと小さく、まざく／＼と目のあたりに見ました。

膽吹山容の雄偉ゆうゐにして黝黒まうこくなることは少しも變らず、大風はその山全體から吹き湧き、吹き起り、吹き上げ吹き下すやうにのみ思はれて、つまり、山全體が大きな呼吸をしてゐるやうにしか、お雪ちゃんには受けとれなかつたのは、さしも大風ではあるけれども、雨といふものは一滴も降つてはゐらず、星の空はらんかんとして、山以外の天地は至つて靜かなものなのです、そこを、山だけが盛んにひとり吹き荒れ、吹きすさんでゐるものですか

ら、山自身が呼吸をしてゐるものと思はれません、その度毎に辨信のやつれた法衣の袖が吹き裂けんばかりに吹き靡かされ、その小さな五體が吹き上げられ吹き下されてゐるのを見るばかりです。

そこで、お雪ちゃんはまだ辨信を可哀さうだと見ないわけにも行きませんが、御覽なさい、あの通り、あのたど／＼しい足どりを、二萬呎以上のエヴェレストの探検家の運ぶ足どりと同様に、辨信の身が吹き倒され、吹きまろばされるから、寸進尺退の有様、見るも齒痒いばかりであります、山路が峻げんしい上に、あの烈風がまともに吹き卸すのだから、たまつたものではありません、成ほど、音に聞く伊吹嵐いぶきあらしは怖しい、全く、辨信さんといふ人は進んでゐるのだから、退いてゐるのだからわからない、あゝ、危ない、あの崖がけ、あそこへ願落てんらくした以上はもう助からない！

その時に、辨信の頭の上の空中から、遽かにまた一團の黒雲が捲き起つて來たやうなのを認めました。

あ、鳥が——またあの大鷲が……

あなやと思ふ間に、その一羽の大鷲が、急に舞ひ下つて、大風にこけつまるびつしてゐる辨信の胸のあたりを見計らひ、一掴みに掴んだ、と見れば、そのまゝで空中高く舞ひ上つてしまつたのです。つまり、山路を、こけつまるびつ上らんとして、危く崖下に顛落することの不幸の代りに、空中高く攫はれてしまつたのです。

あれよく——と呼ぶものはお雪ちやんばかりでした。

「ど、どうしたんだ」

あゝ、よかつた、米友さんが来てくれた、友さん、今、辨信さんが鷲に攫はれてしまひました、大きな鷲が澤山出て来て、そのうちの一羽が——崖に這つて轉んだ辨信さんの身體を上からのしかゝつて、あれが本當の鷲掴みといふのでせう、胴中どうなかのところをグツと一掴みにしたまゝ、あれ、あの通り高い處へ飛んで行つてしまひました、辨信さんは身體からだが小さいから、それで子供と間違へられて鷲の爪にかゝつたに違ひない、あれく、あの崖の處へ——米友さん、何でもいゝから早く辨信さんを助けてあげて下さい。

「よし来た！」

頼もしげに米友は力み立つたけれども、その實は同じ處に齒咬はぶみをしいく地圍太ぢゐんだを踏んでゐることがよくわかります。つまり、いかに米友の勇氣と精力とを以てしても翼を持たない限り、あの攫さらはれた辨信を如何ともし難い焦躁が、お雪ちやんにはつきりとわかるだけ、餘計に氣が氣ではありません。

その癖、鷲に攫はれて、中空高く釣り下げられた辨信の面かほを見ると——夜ではあるし、遠くはあるし、高くはあるのですから、こゝで辨信の面が見えよう筈はないのですが、不思議とお雪ちやんには、ハッキリとそれがわかりました。

平々淡々として泣きもしなければ怖れもしないのです、もがきもしなければ焦りもしない、悲鳴も上げなければ絶叫もしてはゐないのです、鷲の爪で胴中の全部をしつかりと掴まれてはゐるけれど、その爪が肉身の間に喰ひ入つてゐるのではないのでせう、苦痛の表情が更にないのみならず、血も流れてはゐないので、でも、死んでゐるのでないことは、その表情がそれを示します、寂靜じやくせいではあるけれども辨信の面の上には苦痛のあと、悶絶もんぜつの色は現れてはゐないので、辨信さんといふ人は、普通の人々が苦痛の極とする時には却つ

て安靜の色が現れるし、多くの人が絶望の刹那といふ時に、却つて大安心の愉快相を現して来る人だ——だから、この場合、あゝして澄し切つた面を見てゐると、あれで全く無事なんだといふ辨信の心境が、お雪ちゃんの心の鏡にはつきり映るのです、せめてそれだけが、お雪ちゃんの心の慰めでありましたが、さうかと云つて、あのまゝで置けるものではありません——米友は頻りに齒咬みをして、地圍太を踏んでゐる。

「奴！ やりやあがつたな」

「友さん、どうかならないのですか」

「うむ、見てやがれ！」

その時、ブーンと風をきつて曳火彈のやうに米友の手のうちから飛び出したのは、それは例の宇治山田以来身邊を離さぬ處の杖槍でありました、手練の手もとから風をきつて、飛び出した、その目あては、あの大鷲でなくて何であらう。

「あら！ 米友さん、無茶なことをしては……」

却つてお雪ちゃんが、その棒の爲に胸を打れた思ひをしました。

といふのは——いくら腹が立つと云つたところで、こゝであの鳥を痛めつけては、どうもならないではないか、鷲が一羽だけでもあるならば、それを打落さうとも射止めようと知らないが、あの鷲は辨信さんといふ人質を取つてゐる、鷲を落せば、辨信さんも落ちて来る、落ちれば鷲よりも辨信さんが先に粉微塵に碎けてしまふではないか、米友さんといふ人も考へが浅い！

お雪ちゃんは斯う思つて、ひやりとしたけれども、そこはまた餘裕があつて、まあ、米友さんが斯うして腹立ちまぎれ、危急まぎれに、思はず知らず、得意の棒を擲つて見たところで、鷲はあの通り、千尺の高みにゐる、いくら米友さんが、棒の名人だからと云つて、矢も鐵砲も届く筈のない、あんな高い處まで、棒が届く筈がない——さうも思つて、お雪ちゃんも、やゝ安心してゐると、どうでせう、その米友の擲つた槍が、容易には下へ落ちて來ないのです——それは丁度棒の先に眼鼻でもついてゐて、棒の身には翼が生えて、棒のうしろは推進機でも仕掛けてあるかの如く、眞一文字に鷲に向つて伸びて行くといふよりも、米友そのものが棒に化けて、中空を飛んで鷲を追ひかけに出かけたと見るより外は

ない心持がしました。

「友さん——お前も危ない」

「なあに大丈夫だよ」

その聲は後ろでしないで、中空の中から聞えて来たからです。

と見ると、繰出して中空へ飛ばせたその棒の上に、早くも米友が馬乗りにつきつてゐるではありませんか、さうして毬栗と筒袖とを風に靡かせながら、一文字に鷲を目かけて乗りつけるのです。

「あ！ 友さん」

お雪ちゃんも、ひた呆れに呆れてしまひました。米友さんとしたことが、音に聞いてはゐるけれども、斯うまで向ふ見ずの人とは思はなかつた、あれ／＼、米友さんに追ひかけられて、あの鷲が逃げますよ——逃げるのはいいが、辨信さんを落さなければ——あ、かなはない、鷲の逃げるのよりも、棒に乗つて追ひかける米友さんが早い、もう、やがて追ひつく、鷲は、あれ／＼越中の立山の方へ向つて逃げるが、逃げ間に合はない、あの分

は、米友さんが鷲に追ひつくに違ひない、追ひつけば米友さんの事だからいきなり鷲に向つて組みつくに違ひない、いくら米友さんが強いからと云つて、裸同様の身で、嘴と爪とを持つてゐる鳥の王様にまともに向つてはたまるまい——あれ／＼、鷲の仲間が、あの通り、山々から幾羽も幾羽も飛び出して來ました、あれが皆んな加勢するでせう、あれが寄つてたかつて米友さんを突つくに違ひない——あゝ天地一杯の鷲、米友さんの姿も、それに包まれて見えなくなつた。

星の空はらんかんとして暗い、膽吹山は眞黒く、憎らしい程に落つてゐる、いつの間にか、大風はやんだのですが、風がやんで山が澄し返つてゐる處を見ると、いよ／＼膽吹の山といふのは山それ自らが息をする山だといふやうにお雪ちゃんには感ぜられてなりません、そこからは、地球上の何れかの低氣壓に作用されて起る風とは別に、膽吹自身が持つてゐる呼吸が、夜のある期間には風となつてあの通り湧き出すのだ、それが證據には、山以外の天地はあんなに静かなのに、山自身も亦定期の呼吸といふものをやめてしまへば、この通り憎らしいほどの落つき振り。

だが、山は落つきぶりを示してゐるが、お雪ちゃんの不安は去らない。

「お雪さん——」

そこへ、また耳許に憎らしいほど落ついた、これは人の聲、女の聲、眼を上げて見ると、お銀様が枕もとに立つてゐます、そのお銀様も白の行衣を着て、白の手甲脚絆、面だけはすつかり白布で捲いて、その上に菅笠、手には金剛杖——さうしてお雪ちゃんの枕許に立つて呼びかけたその姿だけを以て見れば、決して、これがお銀様だとさとれるわけではないのですが、その聲でお雪ちゃんは、さとつて起き直つてゐずまひを直さなければならぬと思がしました。

九

「さあ、お雪さん、お山へ登りませう」

「まあ、この夜中に……」

とお雪ちゃんが呆れました。

けれども、それを許すお嬢様でない。

否やを云はせる餘地のない壓迫を感じて見ると、起きてこの人と同じ扮装をして待機の姿勢をとらなければならぬことを餘儀なくせられました。

「ホ、ホ、ホ、夜中なればこそです、臆吹夜登りと云つて、臆吹の山には夜登ることになつて居るのです」

「ですけれども……」

「あなたは怖がつてゐらつしやる、なに怖いことがあるのですか、見た目では恐い山のやうに見えますけれども、登つて行く間の美しさでは日本國中、こんな美しい山はないとさへ云はれてゐるのではありませんか」

「そんなに美しい山でございますか」

「美しい山ですとも、世間並の萩や、すまきや、桔梗、女郎花の秋草が一杯咲いてゐる上に、この山でなければ見られない花といふ花が澤山に咲いてゐます、臆吹の百草と云ひますけれども、百草どころではありません、五百草も千草も三千草も、花といふ花は皆んな

この山にあるのです、見た目の美しい百草の中には、何とも云へないよい香にはひを不斷に放つてゐるものがあります、その香と色の中を丁度夜が明ける時分に、わたし達が歩いて行くことが出来るのですから、こんな楽しい山登りは、他にはございません、あなたは、白馬ヶ嶽のお花畑はなばたけを御存知でせう、あれよりも此の膽吹の山の花の路の方が美しいのです、白馬のお花畑は、美しいけれども、冷た過ぎ清くあり過ぎます、こゝのは本當に花野原、の花といふ花が皆んな、人間味を以つて咲きそろつてゐるのですから、同じ美しさにも温か味がありますのよ」

さう云つてお銀様から遊意ゆういをそゝのかされても、お雪ちゃんは少しも、誘はれる氣にはならないで、却つて命令のやうに響きます、百花が絢爛けんらんであらうとも、香氣かきが馥郁ふいくであらうとも、温か味があらうとも無からうとも、白馬ヶ嶽のお花畑の飽くまで清く飽くまで冷たいのには心を惹かれたが、こゝでは何といはれても、その氣になれないのは、多分お銀様その人の口から云はれたといふばかりではなく、先程の大風と、それに續いての辨信法師と大鷲との印象かどうがどうしてもお雪ちゃんをしてこの膽吹の山の山道さんだうを懐なつかしからせるやう

にしないものでせう、その難色なんしよくを見て取つたお銀様は附け加へて云ひました。

「それから頂上へ行くと、とても、ながめがまた日本一です、北の方の高山といふ高山が皆んな眼の中に落ちて來ると共に、南の平野も西の京洛も、それにあの通り日本一の大琵琶湖びわこが、眼の下に控へてゐるのですもの、風景の好きなあなたが、それを好きになれない筈はずはありません、文永の昔、膽吹の彌三郎といふ山賊が、此の山の頂上に腰をかけて、琵琶湖の水で足を洗ひました、その時に湖水を取ひろげようとして土を運びましたが、その土もつこの畚ひんの中からの落ちこぼれがあつた竹生島たけなまや沖おきの島しまになつて残つてゐるのださうです、膽吹の西の麓ふもと、姉川あねがはを渡つた處にあるあの七尾山も彌三郎がつき固めた土くれだといふことです、それから、また東の麓ふもとには俗に泉水せんすいと云はれてゐる所があつて、そこには千人の人を容れられる洞穴ほらあながあります、それが彌三郎の住居であつたと云はれてゐるけれど、わたし達は、もそつと奥へ突き進んで、人の全く見られない所を見ることが出来るのです」

お銀様は、風景の次に、傳説を以て、お雪ちゃんの想像心に訴へて、これが遊意をそゝらうとしたが、それでもお雪ちゃんの氣の進まないのを、もどかしがつて、

「お慰ですか」

「慰ではありませんけれども」

「あの大風の中を、辨信さんでさへ登つて行つたではありませんか、それを意氣地のない、お雪さん、あなたは、越後の白馬ヶ嶽や杓子嶽までも登つたではありませんか、好きな人と一緒ならば、畜生谷を越えて、加賀の白山までも登りかねないあなたではありませんか、わたしと一緒にはお慰なのですか」

「さういふわけではありませんが」

「さういふわけでなければ、わたしと一緒にに行つて下さつてもいいでせう、あなたはお山に慣れてゐらつしやるけれども、わたしはさうは行きません」

「否え、わたしだつて」

「あんなことを云つてゐる、白馬ヶ嶽から高山の花を摘んだり、雪の溪を越えたりして、越中の劍嶽や、あの盛んな堂々めぐりをいゝ氣になつて、ながめて來た癖に」

「それはさうかも知れませんが」

「さあ、早くなさい、風もすつかりやみましたよ」

「それではお伴をいたしませう」

「わたしと同じことに、こゝに斯うして白行衣も、白手甲脚絆も、金剛杖も、あなたの分を、すつかり取揃へて持つて來ましたから、これをお召しなさい」

成ほど、誅らへて對にこしらへさせたと思はれる裝束が、早くもお雪ちゃんの枕許にちやんと並んで催促してゐる、斯うなつては退引がならない。

壓倒的に、いつの間にか、お銀様と同じこしらへをさせられてしまつて、いざとばかり、戸外へ出ますと、星はらんかんとして輝き、膽吹の山が、眞黒に蟠つてゐる麓は、濛々たる霧で海のやうに一杯になつてゐるのを見ました、お銀様は無二無三にその霧の中へと没入して行くので、お雪ちゃんも同様の行跡を猶餘することを許されません。

雲霧晦冥の中に没入して行くお銀様、それに追従せしめられて行くお雪ちゃん、ある時はお銀様の姿を、はつきりと霧の中に浮ばせて見とめ、ある時は、何處にどう彷徨ふか見失つて呆然として立つと不思議に、お銀様が霧に隠れる時は、きつとすゞしい鈴の音が聞

えます。

ふと、気がつくとは自分は、お銀様のあとを追うてゐるのではない、たゞ清らかな鈴の音を追うて、雲霧の中を突き進ませられてゐるのだと感じた途端に、また、あり／＼と、お銀様の姿が先に立つて、すつきりと歩み行くものですから、その鈴の音を聞いてゐる時は、清水の湧くやうな爽やかな氣分に打れますけれども、お銀様の姿のひらめくのを見ると、ゾツと、身の毛が立つやうな思ひをします、斯くて、見えつ隠れつして行くうちに、遂に人間としてのお銀様の姿が次第々々に龍蛇に變つて行くのではないかと疑はれ出して來ました。

今や、憎らしいほど、眞黒く蟠つてゐた山谷雄偉なる膽吹山の形も全く見えなくなりました、見るものは雲と霧と、その雲と霧の中を清らかな鈴の音とそれから、ひらり／＼閃めく龍蛇の面影――。

自分は山登りは慣れないと云つたお銀様の身の軽いこと――さうして、絶えずそれに引摺られて行く氣分のわたし、それでも山へ登る氣持はしないで、濡れない海の中を深く滑

り入るやうな感じが不思議です。

「お雪さん――疲れましたか」

「否え」

「早くいらつしやい、あなたに見せて上げるものがありますから」

「何でございますか」

「足もとを見て御覽なさい、色々な花が咲いて居りますよ」

「まあ――」

成ほど、足もとを見ると――あるにはあるがお雪ちゃんが怪つとしました。

點々として、至る處に、花といへば花が咲いてゐることは間違ひはないが、その花のまた何といふ毒々しい色、ドス黒くて、いやに底光りのする、血といへばいへるが、しかも人間の温かい血といふ感じさへ無い、魚類の冷たい悪血――さうして葉の捲き方から節根までが一々ひねかれてゐる。

「一つそれを摘んでごらんなさい」

「はい」

「それが膽吹の毒草といふのですよ」

「毒草でございますか、薬草ではございませんか」

「薬草も毒草も同じことなんです、薬草も變じて毒草になるし、毒草もいつか薬草になる事があります、一つ摘んで香りをかいでござんなさい」

「はい」

「遠慮には及びませんよ」

「でも……」

お雪ちやんは、これを摘む氣にはなれないのです、見てさへ胸の悪くなる、この魚血のやうなドス黒い草の花——膽吹の山は薬草で満ちてみると話には聞いてゐるが、これは皆んな毒草！ 良薬は口に苦しといふことですから、見て身ぶるひするほどいやな草なればこそ、薬としての効能が強いものか、よし、それはそれとしても自分は手をのべて、この花を摘む氣にはなれない。

たとひ、それは毒があらうとも、もつと美しい花を摘みたい——お雪ちやんが、さう思つて、ためらつてゐると、意地悪さうにお銀様が笑ひ、

「さうでせう、あなたは、そんなのを摘むのはおいやでせう、いつぞや白馬ヶ嶽のお花畑で、胸に餘るほど摘み取つて、誰れかに見せたやうな眞正に美しい色の花はこゝにはございません、ですから、あなたは、それを摘むのがお忌なんぞでせう」

「さういふわけではありませんけれど」

「わたしは、また、こんな毒々しい花が好きなんです」

と云つて、お銀様は、いきなり前かどみになつて、その花の一莖を手早く摘み取つて、さうして、それを無遠慮にお雪ちやんの鼻先に持つて来て、

「香をかいでござんなさい」

「あつー！」

あゝ、忌な香——お雪ちやんは、むせ返つて、ほとんど昏倒しようとなりました。

「そんなに忌がるものぢやありません、それは白馬ヶ嶽の雪に磨かれた深山薄雪や、梅鉢

草とは違ひます、こゝのは、眼の碧い、鬚の赤い異國の人が持つて来て、人の生血を飲みながら植ゑて行つた薬草なんですもの」

「もう御免下さい」

「あなたには嫌はれてしまひましたねえ、それでもわたしは何となし、この悪どい香が好きなんです」

お銀様は、その一莖の花を今度は自分の鼻頭へ當てがつて、董の香に酔ふが如く、貪ほり喫ぐのであります。

お雪ちゃんは眩がして來ました。

「お雪さん、しつかりしなくちやいけません、この花の香ぐらゐが何です——それく、この山から立ちのぼる悪氣の香は、日本の武神日本武尊のお命をさへ縮めるほどの怖い毒があるのです」

「え！」

「今日は、それを、あなたに見せて上げたい、いや、それで、あなたを迷はせて上げたい

と思つて連れて來たのです、大蛇がゐるのですよ、現注このお山に、その昔、日本武尊の御命をちよめ奉つた大蛇の事を、あなたも本を読むことが好きだから、歴史でよく御存知の筈です、山神化して大蛇となり道に當る、日本武尊、蛇を跨いで猶行く、時に山神雲を起し氷を降し、とあります、それは太古の歴史ですけれども、わたしも現在、この山におろちを一つ封じ込んで置くのです、それをあなたに見せて上げませう」

「もう、澤山でございます、御免下さい」

「ホ、ホ、ホ、まだ大蛇が出來はしません、出て參つても、あなたを吞まうともしませんが、吞ませもしませんから御安心なさい、さあ、もう少し登りませう、まだ、なかく夜は明けません」

斯う云うて、お銀様はまたも雲霧の中に突き進んでしまふと、以前の如く、玲々として爽かな鈴の音が聞えはじめました。

+

暫くして、一つの巨大なる石門の處に來ました。

「これが、先刻の話の膽吹の彌三郎の千人窟ですよ」

見上げるばかりの石柱が二つ夫婦岩のやうな形に聳えてゐて、その間が船形のうつろになつてゐる、その間へお銀様がお雪ちゃんを引摺り込みました。

引摺り込んだといふのは穩かでないけれども、お雪ちゃんはそもくこの人との道づれに全く氣が進まないでゐる處を、壓倒的に歩かせられたり、毒草を鼻頭にこすりつけられたりして、それでも、どうもこの人のあとを追ふことから免かれられない引力を感じてゐる處へ、今は、もうこの先が地獄になるか、牢屋になるか眞暗闇の石門の前へ來て、こゝへはいれと身を以て導かれる、それを拒む力もなく、忌といふ言葉さへ出ないで、ぐんぐんと引摺られて行くのは、お銀様の手ごめにかゝつてさうされないでも、事實は、それ以上の力で引摺られて行くのです。

お雪ちゃんは、遂に、この石門の中へと引摺り込まれてしまひました。

「御安心なさい、直ぐにまた明るくなりますよ、そら御覽なさい」

石門の中の眞暗な洞窟を二町ばかり歩むと、左手の崖がカツと開けて、そこから、眞赤な日の光がさしました、日の光であらうと思ふけれども、それは餘りに紅過ぎる、遠く彼方に廣大なる池がある、池といふよりも湖です、さうしてその廣さ、その周圍、それは何となく琵琶湖に似てゐるけれども、その湖面を見ると、いよく眞赤であつて湖邊の山に、例へば、比良であるとか比叡であるとか見立てらるべき山々が、實景に見るそれよりも遙かに劍山絶壁をなしてゐる上に鮮紅のヴェールをかけたものであるやうに思はれてならぬ。

さうして見ると、決して日の光を一帶にかぶつてゐるわけではない、日の光とは全く違つた、たとへば螢の光を鮮紅にしたやうに、光は光に相違ないが、それは熱の無い光である、つまり、月の光に血が交つたらこんな色になるかもしれないと、お雪ちゃんは全くいやな思ひで、この湖面を左右に見ながら、斯うなつてもなほ、お銀様のあとを追はなければならぬ自分の無力のほどを自覺する餘裕ありません。

「こゝが彌三郎の百間廊下ですよ、千人座敷へ行くまでにはまた暗くなりますから、御用

心なさい」

三六〇

果して、この天然の大廊下を少し行くと、また眞暗闇になつてしまひました。

「足もとにお氣をつけなさい、水があります、水が流れてゐます、妙にベト／＼した水ですけれど血ではありませんから怖がるには及びません」

ハツとお雪ちゃんは、その水たまりの中に爪先を踏み込むと、成程、生ぬるい、こんな奥まつた岩窟の間から湧き出す清水だから、こんなに生温い筈はありようはない、血ではないと豫め豫告をされたから、却つて、これは生血がどろ／＼流れてゐるのではないかとお雪ちゃんが二の足を踏むと、お銀様から、

「そら御覽なさい、向ふの岩に大小二つの瀧がかゝつて居りませう、あの大きいのは姉川、小さいのが妹川の源になるのです」

と云はれて見ると、成ほど、廣大に開けた岩窟の中の往年の壁面に、大小二條の瀧がかゝつてゐる、飛驒の平湯の大瀧だの、白山白水の瀧だのをうつ／＼に見聞きしたお雪ちゃんにとつては、その瀧が必ずしもゞき瀧だとは思ひませんけれども、周囲の異様な景色に

は打たれざるを得ないのです。

「臆吹の彌三郎よりも、もつと昔、此の洞窟の中に、山賊が棲んでゐたのです、大江山を追はれた酒呑童子の一族がこゝを巢にしてゐたのです、その時に公家や民家から奪ひ取つて来た美しい女達を山賊が競つて弄びました、さうして、この神臺で汚物を洗はせたといふことです、その山賊を征伐する爲に頼光父子が、渡邊の綱や金時を連れて二萬餘騎で攻めかけて来たといふことですから、山賊の方も少々の數ではなかつたんでせう、ですからこの位大きな洞窟が無ければなりません、さあ、もう少し奥へ行つて見ませう」

もう少し奥へと云つて、のぞき込んだお銀様のうしろ姿を、お雪ちゃんは怖しいと思ひました、怖しいのはこのといふのは、もう通り越してゐる筈なのですが、その時はもう意地も我慢も無くなつて、

「お銀様、もう、わたしは、こゝで澤山です、本來、わたくしは、あなたとお山登りをするつもりで出てまゐりました、こんな洞穴入りをするお約束ぢやなかつた筈でございます」
一生懸命にこれだけの事を云ひますと、後ろを振向かないお銀様は冷然として、

「否え——お山登りなんぞは、いつでも出来ます、あなたとわたし二人は外に見るものも見たいものがあればこそせう、暫く待つてゐらつしやい、わたしが叩きますから」と云つて、お銀様は岩壁の一方に立つと、しなやかな手で、その岩壁の上をはたくと打ちはじめました。

あんな手荒なことをして——でも、しなやかな手は折れも砕けもしないで、岩壁の一方が割れました、忽ちそこが開けて見ると、第二の岩戸があつて、注連が張りめぐらしてある、その中は土の牢、岩の獄屋になつてゐるのがありくとわかる。

「お寢みですか」

その奥に人がゐるに相違ない、しかもその主こそお銀様がかねて承知の人であるらしい。その時、その暗い中から不意に短笛の音が流れ出しました。

「今、わたしが明りをつけてよく見えるやうにして上げます」

と云つて、お銀様は、いつの間にも用意したのか、懐中から小田原提灯を取り出すと、早くも火がうつつてゐました。

もとより小田原提灯の火ですから、この廣大陰暗な洞窟の全部が照し出されよう筈はありませんが、それでも、注連を張つた岩窟の中までは臙に光が届いて、その奥の方に、かゝかに白い衣服がうごいてゐることがわかる、それはたしかに人間には相違ないが、まだ、そのえたいはわからないのです、男だか女だか、それは固よりわからないが、幽明何れの人だか、分明ではないが、その中から起る短笛——つまり尺八です——の音だけは明々亮々として、お雪ちゃんの耳まで響き來るのであります。

「あゝ、鈴慕——」

やつぱり鈴慕でした。

「お嬢様、この中で鈴慕の聲が聞えます、早くこの中へ入つて見ませうよ」

「危ない！」

と、お銀様が遮ぎるのを、お雪ちゃんは却つてせき込んで、

「お嬢様、もう少しあの提灯の火を明るくしていただけませんでせうか、笛の音だけは、ハッキリと聞えますけれど、中においでになるお人がどなたかわかりません」

「もう、これより明るくはなりません」

「そんなことをおつしやらず、もう少し明るくして……光が届かなければ、わたしはあの牢の中へ近寄つて見ませう、出来たことならば、あの牢の中に入つて見てもよいと思ひます」

「足もとをよく御覽になつての上でね——」

と云はれて、お雪ちゃんが足もとを見直すと、全身の血が一時に冷たくなりました。

同じ岩壁の中の遠近と見たのは、實はウソでした、あの牢屋のある處と、自分達の立つてゐる處との間には、絶對的の岩角が相聲を立つてゐることにはじめて氣がついたのです、普通、山に於ての隔たりと云つても、谷と谷とを豫想するのですが、つまり同じ日本の中、同じ地上である限りは山河溪谷の隔たりがあるとは云へ、河には橋、谷には棧を以てすれば要するに地續きの實が現はれるものですけれども、こゝの懸崖といふものは丁度地球と月世界との間の絶對と同じこと、下を見れば見るほど底の知れない斷崖——

さうして、その裂け目の左右を見ると、先刻見た赤い空氣の湖面が一層面積を擴大して、

山脚はいよ／＼押し迫つてゐる、山も湖面も今は全く螢の光そのもの同様な蒼白なる光線が流れ渡つてゐるのであります。

「あゝ、月が上つて來ましたね、もう提灯は要りません」

お銀様が斯う云つて、フツと蠟燭を吹き消した途端に、さきに湖面山岸一杯に充ち満ちてゐて螢のやうな光が競つてこの岩窟のすべての中に流れ込みました。

さうすると、對岸の牢屋の中が、はつきりと見得られるやうになりました、その中心に憎くも澄ましきつて、座を構へて頻りに短笛を弄してゐる白衣の人の姿、それが、また極めてハッキリと浮び出て來ました。

それは白骨温泉以來の鈴慕の主です。

十一

その時に龍之助は短笛を持つたまゝ、氣輕にずつとこちらへ出て來ました。

ずん／＼こちらへ歩いて來て、お雪ちゃんと當面の巖の直ぐ突角の處まで來ると、そこ

にずつと結びめぐらしてあつた丸太の手すりに無雑作に腰をかけてしまつたものですから
お雪ちゃんが、

「お危なうございますよ」

と云ひましたが、龍之助は微笑しただけです、お雪ちゃんはそれから立て續けに、

「先生、まあ、あなたは、どうしてこんな處に……」

と云つてせき込みましたが、龍之助は、

「お雪ちゃん、お前どうしてゐたの」

「先生、あなたこそ、どうしてそんな處にゐらつしやるのです、お一人ですか、こちらへ
いらつしやい」

「は、は、は、たうとうこんな處へ閉ぢこめられてしまつたよ」

「まあ、誰が、あなたをそんな岩の牢の中へ入れてしまひましたの」

「誰でもない、そ、そこにある人がさ」

と云つた、その上眼づかひで、お雪ちゃんの記憶がお銀様の方へ、甦つて來ました。

「お嬢様、あなたが先生をこんな牢の中へお入れ申してしまつたのですか」

「でも、仕方がありませんもの」

「仕方がないとおつしやるのは」

「膽吹の山の大神は、斯うでもして封じて置かなければ、世間がたまりません」

「まあ、残酷な」

お雪ちゃんが一切の恐怖を忘れて、ムキになりましたが、問題の當人は一向平氣で、

「まあ、いゝさ、斯うして窮命させられてゐるのは、やむを得ない自業自得といふものだ
でも、二人で、よく見舞ひに來てくれました、ゆつくり昔話でもしようではないか」

懸崖絶壁に腰をかけながら、涼み臺に出て世間話でも持ちかけるやうな氣分で、いやに
慣々しい處へ、お銀様がまた妙に、碎けたしなをして、

「どうです、悪女大姉の事は、悪女大姉に未練はございませんか」

「は、は、もう、何とも思つちやゐないね」

「お絹さんはどうです」

「は、は、は」

三六八

「山の娘のお徳さんとやらの、こつてりした情味は忘れられますまいね」

「は、は、は」

「高雄山蛇籠で馴染んだお若さんといふのはどうです」

「は、は、は」

「伊勢の國の鈴鹿峠の下の關の宿から、お安くない御縁を結んだあのお豊さんとやらの心意氣だけは、あなただつて恩に着ないわけには行きますまい」

「は、は、は」

「あなたは人妻を犯しました、人の後家さんを取りました、淫婦を弄ぶこともしましたし、處女と戯れることもしましたねえ、わたしの知つてゐるだけでも……そのうち、誰れが一番お氣に召しましたかねえ」

「は、は、は」

「甲州の八幡村の小泉の家に、わたしに逆綴の帳面の初筆をつけさせました、あの時の水

車小屋の娘も可哀さうでしたね」

「は、は、は」

「その帳面はあれからどうなりました」

「は、は、は」

「水に流されてしまつてそれつきりでしたか、帳面は水に流されても、あなたの悪い行ひは流れてしまひは致しますまい」

「は、は、は」

「あれから後、何人の人を殺しましたか」

「は、は、は」

「染井の化物屋敷の時の事をお忘れなさりはしますまいね、辨信さんと、わたしと三人で、あの、うんきの中に土藏の二階で合奏をしたことがありましたねえ」

「は、は、は」

「白骨の温泉こそお楽しみでしたねえ、誰れも知らない天地の間でこんな憎らしい小娘と

「一緒に……」

「は、は、は」

「あなたは、この小娘を愛してゐたのですか、愛してはゐなかつたのですか」

「は、は、は」

「この雪といふ小娘も、面に似合はない大膽者でしたね、姉さんの男を横取りしてしまつて、さうして……」

「あら——」

「こんどは、お雪ちゃんがたまりかねて叫びました。」

「は、は、は」

そのあとで、龍之助の響、お銀様はお雪ちゃんに取合はずに龍之助の方に向いてつゞけました。

「白を切つてゐるけれども、わたしはもう疾うに睨んでゐますよ、二人の中はあの月見寺の一間で刀を拭つてゐる時から出来てゐたんですとも……さうして、このお雪ちゃんとい

ふ小娘を姪姫にんしんさせてしまつたものだから、土地にゐたゝまれないで、湯治を云ひ立てゝ白骨温泉しやれなんぞと洒落しやれこんだのが憎しい」

「あら、まあ——」

お雪ちゃんが、また眼を見張つて、抗議を申込まうとする途端に龍之助が、また、

「は、は、は」

と笑ひました、そこで、お銀様は、やつぱりお雪ちゃんにはとり合はずに、龍之助の方にまともに向つて、

「さうして、白骨にゐる間に、あなたはあのイヤなをばさんといふ女をどうしました」

「は、は、は」

「可哀さうなのは、淺吉といふ男妾と、それからですね、もう一人……」

「は、は、は」

「それを云ふと、また此處にゐる小娘が、ムキになることせうが、淺吉といふ男妾ばかりが可哀さうなのではありませんでした、まだ、たしかに一人、闇ひとから闇やみへ送られた可哀

さうなのがあつた筈です」

「何をおつしやるのです、それは、誰れのことでございますか」

果してお雪ちゃんが躍起やくきとなりました、お雪ちゃんの躍起やくきが、あまりに眞剣であつたせい、今度は龍之助も、は、は、はといふ例の輕薄極まる冷笑を浮べませんでした、そこで、お銀様が今度は、お雪ちゃんの方へ向き直つて、

「誰れだか、わたしは知りませんが、あの時にたしかに闇から闇へ送られた可哀さうな人の子がたつた一人はあつた筈です」

「それを承りませう、それを、外のことゝは違ひます」

何故か、お雪ちゃんが、お銀様の喧嘩を買ふやうな氣勢にまでいきみ立つたのが意外でありました。

「聞きたいとおつしやるならば、云つて見ませう、それを誰れよりも早く感じたのは、あのイヤなをばさんといふ人でした、そこは年功ねんこうですから、いやに處女じよらふ振つてゐる乙女おとめの乳首ちちのきに眼をつけてしまつたんでせうね、温泉のお湯の中で……ですけれども、それが飛驒トビ

の高山たかへ来る時分には、すつかり下りてしまつてゐました、男の子であつたか、女の子であつたか、そのことは存じませんが、大それた自分の手で、虫も殺さない處女振つた娘さんが、嬰兒殺しえいじころをやりました、それは人を殺すことは、茶飯ちやうはんを食べるやうに心得てゐる人のお仕込みだから、子供を一人闇から闇に送るなんぞは、云ふに足りない仕事でせうが、それでも親は親、子は子です、何處ぞにゐる人殺しの名人でも、まだ我が子を手にかけて殺したといふことは承りません」

「まあ、お嬢様、あなたのお言葉は怖い毒を持つておいでなさいます——本當に驚くべき邪推じやたいでございます、いつ、わたしが、そんなことを……」

「お雪ちゃん、いつまた、わたしが、あなたがそんな悪い事をしたと申しました、今でも白骨へ行つてごらんさい、あそこで死んだ淺吉さんといふ男妾をとこめかけの人の石の墓かぶるしがございませう、その傍そばに、心ばかりの小さな石塔いしとうが据ゑてあります、あれは誰れのですか」

「あんまりだ、あんまりだ」

お雪ちゃんは、遂に面かほを蔽おほうて泣き伏してしまひました。

「は、は、は」

その時、また冷淡極まる笑が龍之助の面に浮びました。

十二

同時に、湖面の一點に、ざんぶと音がしてそのあたり一面に水煙が立つたかを見ると、漣々として、そこに波紋が、韓紅になつて行く異様の現象が起りました。

湖面も、湖を立てこめた數千丈の斷崖も、前に云つた通りの螢のやうに蒼白の色に覆はれてゐたのが、今、不意にざんぶと音がしてその水煙から輪になつて行く波紋のすべて鮮紅色になつて行く現象を、さすがお銀様が怪しまずには居られません。

「あれは、どうしたのです」

意地悪いお雪ちゃんいぢめを抛擲して、さうして疑問をかけたのを、龍之助がうなづいて、

「あれだ、あゝして、毎日、いゝ加減の時に、人が飛び込むのだ」

「飛び込んでどうするのです」

「どうするつて、つまり身投だよ、見てみると、一時の間に十も二十も飛びこむことがある、そら見な、あの通り眞紅になつてゐる中に、眞白いものがふわりと浮いてゐるだらう、女の髻だ」

「え」

「男は水に落ちて死ぬと、死體は上向きになり、女は下向きになるといふことだが、こゝで見るとさうばかりではない、眞白い女の髻つぺたが、搦きたてのお餅のやうに幾つも幾つも浮いてゐる處は見られたものぢやない」

「業さらしです、女の風上には置けない」

「人間といふ奴は全くわからない奴だ、刀を抜いて見せたりなんぞすると、慄へ上つて助けを呼ぶ癖に、死にたいとなると、勇敢にあゝして後から後からと、この血の池の中に飛び込んでしまふ」

「勇敢なのぢやありません、意氣地なしなんです」

「どつちだかわからないよ」

三七六

「自分の身を粗末にして、それを見榮と心得る馬鹿者が絶えないのです」
「時に……」

と龍之助は少し改まつて、斷崖の欄干から後ろの岩壁へ背を持たせ、
「開墾事業の方はどうです」

「どしどし進行して居りますよ」

とお銀様との問答が全く別な内容へ向いて來ました。

「ものになりますかね」

「ものにしますとも」

「さうして、この開墾王國の女王の下に何人位の人口が收容出来る見込みですか」
「何人と制限はありません、土地の生産の供給が許す限りは人を入れます」

「土地の生産の見込みはつきましますか」

「それは、つかない筈はありません、苟も土そのものに生産能力のある限り、種を蒔いて

やれば實を結ばせるだけの素質を持った土地ならばそれに住む人口を食はせて餘りあるだけの生産は、きつと得られます、既に土地が食物を供給しきへすれば、人間を其處に收容し、そこに生活を爲さしめ得ないといふことはありません」

「成程——」

「人間が、自由を奪はれるのは、つまり食へないからです、それと同じやうに、人間が人間にたよらずして食へさへすれば、人間は本當に人間らしく生きて行くことが出來ます、さむらひが主君に忠義を盡すといふのも、知行を貫つて食へさせられてゐるからです、知行を貫つて食へさせられてゐるから、それでまさかの時は君の馬前で死ななければなりません、まさかの時でない時、尋常の場合にも主君といふものゝ前に奴隸の状態であなければなりません——自分で食ふことを知つてゐれば、知行を貫つて、忠義を盡す必要なんぞはありません、それと同じやうにすべての人が……」

「まあ、待つて下さい、お銀さん、自分で食ふことを知つてゐれば人は奴隸の状態にゐなくともいゝと云ひましたね、さむらひといふ奴は知行を貫つて身賣りをしてゐる奴隸の一

種だといふやうなことを、お前さんは云ひましたね、成ほど、して見ると、自分で作り自分で食ふことを知つてゐる、あの百姓の生活はどうです、あれがさむらひ以上の奴隷生活ではないと誰れが云ひます」

「え、それには、それで、また理窟があります、百姓が天地の間に物を作り、自ら生き自から食ふことを知つてゐる境涯にありながら、現在さむらひ以上の奴隷生活を送つてゐるといふことは、わたしも充分にそれを認めます、それを認めればこそ、わたしの開墾事業も起らうといふものです、事實、今日の百姓は、自ら力を盡して、土地に蒔いたその収入を、自分のものとするのが出来ません、全部を自分のものとする事が出来ないのみならず、殆んど全部を他の爲に奪はれてしまつてゐるのです」

「誰れが奪ふのですか」

「百姓以外の、衣食を作らない人が皆んなして奪つてゐるのです、さうして、衣食を作つてゐる百姓は、そのうちのホンの生きて行くだけといふよりは、息をするに足るだけの少量を與へられて、さうして、身動きも出来ないやうにこしらへられてゐるのです、ですか」

「それを、わたしの開墾地ではやめようと思ひます、正當に衣食を作る人には、正當にその分け前わけまえを與へます、さうして、衣食の爲に人間が人間に屈従することなく、衣食そのものは人間以外の天の恵み——とでも申しませうか、そこから得て、人間はお互ひに人間としての平等な體面をもつて生きて行かうと云ふのが、わたしの開墾地の目的なのです」

「は、あ——それは結構なお考へに違ひありませんが、併し、假りに其の目的が達せられたとしましてはすな」

「はい」

「さうして、人間が、生活の爲に、つまり衣食の爲に、お互に屈従することなく、衣食の餘りある生活の下に、人間の自由が伸び、享樂きやうらくが増し、まあ所謂、王道樂土わうだうらくととか地上の理想國とかいふものが成立したとしましてはすな」

「はい」

「その時に、もし、隣の地に悪い奴があつてその理想國を羨み、その餘裕のある寶を奪ひに來たらどうします」

「さういふものが多少現はれたところで、わたし達の團結の力で受けつけません」

「ですけれども、それが若し、その悪い奴が多少でなく、二人や三人や五人や十人といふことではなく、數百、數千の人が團結して侵入して來たらどうします」

「その時は、わたし達のうちの男は劍を捨て、女はつむぎを投げ捨て、その外敵を彈き反します」

「して見ると、さういふ不時の侵入者に對して平常の用意といふものが要りますね——五十人の敵ならば、有合はす獲物を取つて、應急的に追つばらひませうけれど、千人萬人の侵入者に對して素手といふわけには行きますまい、先方も亦必ず素手でやつて來るといふわけでもありませんまい、必ず、こちらにも、それに要するだけの武器といふものを、平生備へて置かなければならぬのでせう」

「それは、事業が進み、規模が大きくなるにつれて自然に、その準備が出来るやうになります、たとへば部落の中に火事があつたとしましても、一軒二軒のうちならば、手桶や鹽で間に合ひませうけれど、殖えてくれば非常手桶や龍吐水も備へなければならず、また備

へる費用もおのづから働き出せて來ようといふものです、いつ來るか分からない侵入者の爲に、あらかじめ備へて置かなければならない必要もありますまい」

「拙者は、さうではないと思ふ、その非常と侵入者に對するあらかじめの設備が無い限り開墾地は成り立つものでないと思ふ、さうして行く、その設備の爲に生産の大部分が奪はれて行つてしまふから見ても、さうならぬ——それはさうとしてすな、今度は内部に就て伺ひませう、お銀さん、假りにあなたの理想國が成立して、無事に相當の期間續き得たとしてすな、外敵も侵入者も、影を見せない水いらすの樂土が成立したとしてすな——その内部に我儘者があつたら、それを誰れがどう處分しますか」

「そこです、わたしの理想國では我儘といふものが無いのです、我儘がないといふのは、離れに對しても絶対に我儘を許すからです、今の政治も道徳も、すべて人間の我儘を抑へることにのみ專一なのですから、それで人間の反抗性を煽る結果になるのです、無制限に我儘を許して見てごらんさい、人は無意識に自重の人となりますよ」

「は、あ、それは、すばらしい徹底振りですね、また一理ありとも思ひますが、そんなら

「つ實例について伺ひませう」

三八二

と龍之助は尺八を取直して、それをかせに使ひながら、改めてお銀様に物和らかな質問を試み出しました。

十三

「たとへば……こゝにその理想國のうちに一人の我儘者が出たとします、そのものが男であつたとして、假りに、その男が同じ樂士のうちの一人の女を戀したとしませう、その結果はどうなるのです」

「わたし達は、戀愛の自由を絶対に許すつもりでございます」

「戀愛の自由、然し、その戀愛が完全性を帯びなかつた時はどうです、つまり、一方だけに戀愛があつて、一方にそれが無かつた時はどうです」

「相愛しない處に自由は許されせんね」

「處で、問題はそれからです、許されないその戀愛を強行したものがあつた時は、どうし

ます、つまり、最初の例の樂士のうちの一人の男が一人の女を愛してはゐるが、女がその戀に酬いなかつた時、男が淡白に諦めて引下れば問題は無いのですが、さうでなかつた時、當然暴力が發動される、さうして女が力に於て弱くして、その暴力に反抗しきれなかつた時に、その結果はどうなりますか」

「それは仕方がありません、その時は女は死を以て身を守るか、さうでなければ男の力に服従するのです、同様の事情は女が積極的である場合にも許されなければなりません」

「はゝあ、して見ると、あなたの國もやつぱり暴力を是認するのですな、征服を認めるのですな」

「さうですとも、力が大事です、力といふのは腕の力ばかりではありませんよ、絶対の自由を許す處には絶対の力がなければならぬのです——さうして、その力といふものは、非常の時は武力で、平和の時は金力なんです」

「だが、武力も金力も如何ともする能はざる力のあることを認めませんか」

「そんな力はありません、あるやうに見えましても、皆、武力か金力が持つ變形なのです」

「ですが——たとへば、今、女のこと为例をとつて見ましたから、もう一つ、假に女の貞操といふものなんぞはどうです」

「貞操、みさをですわね」

「さうです、たとへばです、女が愛する夫の爲に死を以て貞操を守るといふやうな場合に武力や金力が、これをどう扱ひますか」

「貞操ですか——貞操なんていふものが本来わたしにはよくわかつてゐないのです」

「は、あ、さうしますと、良家の夫人も遊女おいらんの類も同じやうなものなんですわね」

「え、え、本来同じ人間ですわね、一方は一人の夫を守るやうに生みつけられてゐるし、一方は多數の客を相手にするやうに出来てゐるだけのものなんですわね、一人の夫を守らなければならぬやうにさせられてゐる者が貞女で、多數の男を相手にするものが不貞女とは斷言出来ません、良家の夫人と云はれるものでも、性格的に随分イヤな女があり、遊女おいらんの類ひでも、性格的に立派な女があるものです、貞操なんていふものゝ本質を何だかわかつてゐない癖に世間體だけを守つて内實は墮落しきつてゐる良家の夫人といふのが幾

らもあります、それからまた、境遇さへ改めてやれば立派な貞女になりきる遊女がいくらもありますね——わたしは女を見るに貞操なんぞをさう勿體ない標準にしたくはないと思ひます、もとく、貞操といふものは、一定の人を一定の人に押しつけたり、與へきつたりしようとする壓制から起つた人間の勝手な束縛なのです、併し、昔はその壓制も束縛も社會生存の爲に必要でありました點は認めますけれども、今では、その壓制と束縛が人間を使用するやうになりました」

「さうしますと、女の貞操といふものは無條件に解放していいのですか」

「さうです」

「では、女といふ女は皆遊女にならなければならない道理ですわね」

「いえ、違ひます、遊女は操を賣るのです、解放といふのは賣却することではありませぬ、また、わたし達の社會では賣ることの必要を認めないのです、男も女も獨立して生活が與へられる保證が立てば、何を好んで賣りたがるものがありますわ——縁あれば合ひ、縁無ければ去るだけのものです」

「なか／＼むづかしくなりましたが、それはさうとして、かりに道義的に貞操を認めないとしても、感情的に汚らわしい女と汚らわしくない女との區別はありませう、さうして、假りにあなたが男であつてどちらを選ぶとすれば、それは無論、汚らわしいものよりも汚らしくはないものを選ぶこととせう、最初から一人の男を守り通して呉れる人と、誰れもおかまひなしに相手にする女と、どちらを選ぶかといふことになれば、あなただつて、それは定まつてゐるでせう、それをもう少し實感的に云つて見るとすな、あなたの妻があなた一人を愛してくれるのと、妻でありながら他の男に許すといふ女と、どちらを選びますか」

「そんなことはお尋ねになるまでもありませんよ」

お銀様はツンとして、つき戻すやうに龍之助に向つて答へました。

「一人の夫を愛しきれない妻——一人の妻を愛しきれない夫——つまり、それを世間でいふ放蕩のはじまり、亂倫の起りと定めてしまつてゐますから、すべての悲劇がそこから起るんですが、考へて見れば馬鹿々々しい話です、本來、自然に出でなければならぬ愛情

といふものを、強ひて追ひかけようとするから、そんな馬鹿々々しい事が起つてくるので、好きである間は夫婦であつてよろしい、いやになれば夫婦なんていふ形式をぬいでしまひさへすれば何でもないことではありませんか、夫婦といふ形式をお友達といふ關係として見れば、何の事はございません、その時々によつて、無制限であり、近くもなり遠くもなるべきお友達といふものを生涯一緒に引きつけて置かなければならぬ筈もなし、また、そんな煩はしい事をしたと云つても出来るものではありません」

「だがなあ、男女の間の事つてものはさう單純には行かんものでなあ、一方の愛が衰へても一方の愛はまだ盛んなこともあるですからなあ、つまり、才練といふものがあるものだな」

「その才練とか嫉妬とかいふのが一番いけないんです、わたしの作らうとする理想國では、さういふ場合に於る才練と嫉妬とを嚴重に禁止する、またさういふ場合は極めて自由恬淡であるべきやうに子供のうちから教育して置きたいと思ひます」

「成程——子供のうちから、異つた習慣の社會に置いて異つた教育をして置けば知らぬこ